
神すらも知らず

玄雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神すらも知らず

【Nコード】

N9240C

【作者名】

玄雪

【あらすじ】

世界を滅ぼした「神々の黄昏」から長い時が流れた。神々を裏切った邪神は再生した人間界に降り立つ。人として生きる彼の目的とは！？

第1話

過去を見せる夢

遙か昔、人は神の国の下に存在した。神々はユグドラシルの樹の恩恵を受け、世界を支配していた。しかしそれを良しとしない巨人族との衝突は絶えなかった。巨人族との戦いを繰り返しながらも、神々の支配は永遠に思われた。しかしそれはあっけなく終わりを迎える。希望の神バルドルに死が訪れたのだ。そしてその原因を作ったのは、一人の邪神であった。彼は巨人族を率いて神々の国アースガルドに攻め入った。これが神々の時代の終わりを意味する『神々の黄昏』である。巨人スルトの放った一撃は大地を焼き尽くし、世界は崩壊した。その時そこに立つ者はおらず、邪神もその戦いで命を落とした。滅びた世界に現れたのは、復活を果たしたバルドルだった。バルドルは世界を蘇らせ、再び神の支配する世界ができるはずだった。しかし蘇った世界に人間の姿はなく、邪神の魂も何処かへ消え失せてしまった。

それから長い時間が流れた。人は古き時代にあった出来事を神話として伝えている。神のいた世界ではない、違う世界で新たな文明を築きながら――。

我が義兄弟よ

なぜ我らを裏切った

なぜ我らの希望を奪い消し去った

答えよ 義兄弟よ

それは戦場で発せられた言葉。遙か昔の誰も覚えていない記憶。その手を血で染めた愚者への非難。思えばそれが、彼が自分に向けた最後の言葉だった。

奇妙な音楽で夢は中断された。少年は起き上がり、音楽の出所を探した。それはすぐに見つかった。左翼の車だった。車は彼がいる土手のそばを通り過ぎていった。彼には理解のできない歌詞と、車に書かれた「神風」の文字は彼を不機嫌にした。いや、夢が彼を不機嫌にしたのだ。

「・・・ずいぶん懐かしい夢だったな」

少年は首を振って眠気を飛ばした。神にすぎることも、神になろうとすることも、とても馬鹿らしいと思っていた。人は神にはなれない。神は人を救いはしない。神は傲慢で、愚かで、気まぐれだからだ。ほんの気まぐれで助けられた人間は、それを慈悲深きことと勘違いする。神ができる事なんてほんの少しのことだ。運命を変える力もない。腹が立つぐらい無力な存在だ。未来がわかりながらも、変えることができない。川に落ちた葉のように、ただ流されることしかできない。そしていつかどこかに引っかかるか、沈むかして止まるのだ。そこに神と人の差なんて存在しない。そのことを人間はわかっていない。神は導く者でも、救う者でもない。支配し、搾取する者だ。かつてそんな時代があったことを、今の時代の人間達は知らない。この国のほとんどの人間は神への信仰すら薄れている。少し前までは一人の天皇を神と考えていた。今ではそれもなくなくなり、神は空想の存在へと始まり始めている。しかしそれでいいのかもしれない。今、この世界は神の世界から切り離され、別の時代を生きている。そこに神は必要ないのかもしれない。彼はそんなことを考えていた。

「何してるの？」

突然、後ろから座っている彼を見下ろすように声をかける者がいた。

「何でもない」

彼は後ろに立っている同年代の少年にそう言った。彼は立ち上がると、尻に付いた草を払い落とした。

「授業は終わったのか？」

「うん、どうしたの？　こんなところで」

今、彼らがいるのは近くに高校がある川辺だ。すでに授業を終えた小学生達は我先にと土手を滑り降り、中学生や高校生がそれを眺めながら帰路についている。そして彼らは似ていないが双子だ。初めてそれを聞く人はたいいてい驚く。しかし双子が似ているのは一卵性の場合であって、二卵性双生児は特に似ているわけではない。双子Ⅱ似ているという概念はおかしいと、双子の兄の方は思っている。特に、この二人は血が繋がってるとも思えないほど似てない。

「買い物を頼まれたから付き合ってくれないか」

「いいよ、でもまだ慣れないの？　もう二年になるのに」

「商品名がよくわからない。どれがどれだかさっぱりだ」

それを聞いて弟の方はクスリと笑った。それを聞いた方は眉間にしわを寄せた。

「さっさと行くぞ」

そう言って兄の方は歩き出した。弟の方はそれに黙ってついて行った。

買い物はいつも近所にある商店街とスーパーで済みます。この日も二人はスーパーで買い物を済ませ、外に出てきた。兄の方は右手に買い物袋を持っただけ、弟の方は少し荷物の量が少ない買い物袋と、学校帰りの証である通学用の鞆。それを持つ彼が着ているのは学校指定の青っぽい制服。同じ歳であるはずの兄の方は制服を着ず、夏でも長袖の服を着ている。周りは暑苦しいと言ったが、彼自身は気にも留めていないようだ。

「悠斗、実、おまえたちそこで何をやっているんだ？」

後ろから二人を呼ぶ声がした。二人が振り返ってみると、そこに

は数人の若い男女が喫茶店のテラスから手を振っていた。その中の一人に、二人の知っている顔があった。

「始兄さん、そっちこそ何してるの？」

実と呼ばれた双子の弟の方は、帰りたがる兄の方を引きずるようにして一番上の兄の方へ歩み寄った。

「大学の仲間と春休みに行く旅行の打ち合わせ。二人は買い物か？」

「うん、学校帰りに付き合ってくれて言われて」

そう言って実は悠斗の方を見た。悠斗は別にこの兄が嫌いな訳ではない。話のネタにされるのを嫌うのだ。

「ねえねえ、二人とも大杉君の弟さん？」

机の向こうから乗り出してきた女子大生は、目を輝かせながら言った。

「はい、そうです」

実は愛想良く答えた。悠斗の方は何も言わなかった。

二人は始とその仲間におごってもらえるということで席に着いた。その間二人は質問責めを食らっていた。

「ねえねえ、どこの学校行ってるの？」

「双子なんだってね、どっちが上？」

「何歳？ 彼女はいる？」

実はたくさん質問に一つ一つ答えていく。一方悠斗は実に全て任せて黙って注文したコーヒーを飲んでいた。そして兄の友人達をつまらなさそうに見ていた。普段の彼は決して人見知りではない。むしろ社交的だ。しかし今は夢見が悪かったせいか、話しかけようともしない。悠斗は急に立ち上がった。

「先に帰るよ」

そう言ってイスを元の位置に戻すと、周りが何も言う暇を与えずにその場を去った。残された者達はそれを黙って見送るしかできなかった。

「弟君、かっこいいね。でも人見知り激しいの？」

「いや、そういうわけではないんだが・・・」

「今日はちょっと機嫌が悪かっただけですよ」

始の言葉を実が引き継ぐように言った。おそらくそれもあるのだろうが、その内自分を話題にされるのだろうと思ったからだろう。

「ねえねえ、もしかして例の話の弟さんってさっきの方？」

急に振られた話題に、二人の兄弟はやはり来たかと思った。

「ああ、そうだよ」

始は半ばあきらめたように言った。例の話というのは二年前に起こった事故のことだ。

二年前、悠斗は交通事故に遭い、生死の境をさまよう程の傷を負った。一命は取り留めたが、起きたときの彼はそれまでの十五年間を全て忘れ去っていた。それどころかまるで別人のようになっていたのだ。以前の悠斗は考えるよりも身体を動かす方が先で、頭はあまり良くなかったが、人に好かれ、みんなの中心になる人物だった。今の悠斗はまったく違う。他人を見下しているわけではないが、

目上に対しても遠慮はしない。何よりも自分のことを考えて行動する。他人が作ったルールに従うのも嫌う。そして嘘つきで悪戯好きだ。悪戯も子供のするようなかわいらしいものではない。気に入らなかったかつての同級生のスクーターの燃料タンクに穴をあけたことだってある。一歩間違えれば大惨事になっていた。犯人は見つからなかったが、後に悠斗の言動で彼が犯人だということがわかった。しかし証拠はなく、両親は記憶を失った哀れな息子を甘やかしている。警察は捕まえることもできず、記憶障害の少年にそこまでする気もなかった。警察が去った後の悠斗は、まるで勝ち誇ったかのよう唇を歪ませたのを二人は忘れられなかった。悪魔がいるのならこんな顔をするのかもしれない。そう思った。両親はもしかしたらそんな息子を恐れているのかもしれない。

嘘は当たり前のように吐く。他愛もない嘘から、信頼関係を崩すような嘘まで。結果的に以前の悠斗が築いてきた信頼関係はほとんど崩れている。今の彼が中学に行ったのはほんの一ヶ月ほどだ。怪我をしてからおよそ半年入院していた彼は、卒業までの一ヶ月だけ

学校に通い、受験も受けなかった。今は家で何もせずに過ごしている。両親は何も言わず、最近は近寄るのも恐れているように見える。「その話はあまりしたくないんだが」

始がそう言うのと周りもそれ以上追求しなかった。悠斗についての話題が終わったわけではなかったが、それは彼の容姿に関してのものだった。双子の弟に似ていない彼の顔は間違いなく美形に属する者だった。親戚にも彼に似ている者はいない。幼い頃は平凡な顔で、母方の祖父に少し似ていると言われていた。しかし成長するに連れ、誰にも似なくなった。

始の友人達と別れた後、実と始は家への帰路に着いた。その途中、話を切り出したのは実だった。

「今日、改めて考えたんだけど、悠斗って本当に変わったのかな」「どういうことだ？」

意味のわからない言葉に始は首を傾げた。

「だからさ、悠斗が変わり始めたのって、本当にあの事故の時だったかな」

そう言われて始は考え出した。確かに危険な悪戯や嘘をし始めたのは事故の後だ。しかし、それより前からその兆候が見え始めていたのではなからうか。

「事故より前から少しずつだけど、嘘を吐くようになったり、悪戯をし始めてなかった？ 友達とケンカして帰って来ることが多くなっていたなかった？」

信頼関係は確実に悪くなっていった。しかし反面で頼りにもされていた。誰も考えつかないような方法で物事を解決したりもした。社交的になったとも言える。彼の矛盾した性格は事故後、はっきりと表に出るようになる。

「確かにそうだったかもしれないな。ああなり始めたのはいつ頃からだろう。事故より少し前か、もしくはもっと前からか」

始は唸った。このままではいけないと思っていた。今さら元に戻

って欲しいとは言わない。それは今の悠斗を否定することになる。記憶を失っても、悠斗に変わりはない。彼の矛盾した性格を理解してそばにいられる人間は少ないだろう。人と付き合っていくには、彼の性格をどうにかしなければならぬ。

「今度、ちゃんと話し合わなければな」

時間は少し前に戻る。実達と別れた悠斗は町中を歩いていた。彼が今考えていることは、先ほど見た夢のことだ。あれは昔のことだ。気が遠くなるほど昔にあった出来事。どれだけの時が流れても忘れることなどできない記憶。

「雨が降りそうだよ」

「まじ？ 朝は晴れてたのに」

すれ違うカップルの声で悠斗は空を見上げる。南から黒い雲が流れていた。聞こえてくる雷鳴が何を示しているのか、彼にはわかっていない。

「どうやら奴らが動き出したようです」

そう言ったのは建物の影にいる誰かだった。

「そのようだな」

悠斗は最初からそこにいたのがわかっていたように、全く動じなかった。

「もう十七年だ。遅いくらいだろ。いや・・・」

むしろ早いと言うべきか。悠斗は考えた。彼らにとって十七年という年月はほんの一瞬に過ぎない。かつての自分もそうだったはずだ。それにも関わらず、今の自分は一年すら前よりも遙かに長いと感じられる。悠斗はおかしかった。笑いたいくらいだった。こんなにも自分はこの時間に馴染んでいる。

「この調子だと一番手は彼のようにだ」

悠斗は空に広がる黒い雲を見て言った。

「まだ万全ではないのでしょう？ そんな状態で戦うなんて無茶です。とても話し合いで済む相手でもないのに」

悠斗を心配するかのように言う人物を、悠斗は優しい目で見つめた。

「心配ないよ。それよりおまえは次男坊を探しておいてくれ」

「・・・わかりました。ご武運を」

そう言うとその人物はどこかへ消えた。風が悠斗の髪をなでた。

「そろそろ潮時か・・・」

悠斗の独り言は誰の耳にも届かなかった。

第1話

過去を見せる夢（後書き）

いつまで続くかわからない長編に目を向けていただいて感謝します。
第1章「始まりを告げるは裁きの雷」開始です。
できれば最後までお付き合いしてください。

第2話 雷神の降臨

次の日、空は朝から黒い雲に覆われ、朝日を拝むことはできなかった。休日の朝は遅い。学業に励む者や仕事をこなす者達は、ほとんどが平日の疲れを癒すためにいつもより長い睡眠をとる。大杉家でもその光景は同じで、三人の兄弟は朝昼兼用の食事をとっていた。「話し合う」と言っていた始は、今日こそ話そうと考えていたのだが、弟の機嫌は悪いままだった。一体どうしたのかと思ったが、今話しかけてはよけいに悪くなるとわかっていたので、何も言わなかった。実は二人の兄が黙り込んでいたので、それに習って沈黙を通していている。両親は朝食を食べた後、知人の見舞いのために出掛けた。時計と風の音だけが響く中、沈黙を破ったのは来客を示す呼び鈴の音だった。

「僕が出るよ」

実はそう言って席を立ち、玄関に向かった。悠斗は顔を厳しくした。

「はいはい、どちら様ですか？」

実はそう言って玄関の扉を開けた。そこに立っていたのは、一人の少年だった。歳は実とさして変わらないように見え、青い髪と瞳をしていた。少年は礼儀正しくゆっくりとした口調で言った。

「シアルヴィと申します。こちらにいる知人に主からの伝言をお伝えしたいのですが」

「知人？ 誰のことですか？ 今ここにいるのは僕と兄たちだけなんです」

実がそう答えると、シアルヴィは少し困ったような顔をした。実はどうしたのかと不思議に思った。そしてそれを口に出そうとしたとき、後ろから声がかかった。

「なんだ、シアルヴィか。わざわざ使いをやるなんて、あいつにしては慎重だな」

二人は声の主の方を見た。声をかけたのは悠斗だった。

「悠斗の知り合いかい？」

悠斗の後ろにいた始が言った。悠斗は後ろも見ずに言った。

「ああ、少しな」

悠斗の唇はわずかにほころんだ。しかしそれが善意に満ちたものではないことが、よくわかった。悠斗は来訪者の方へ歩み寄った。シアルヴィはわずかに後ずさりした。悠斗はそれを見て満足したように、にんまりと笑った。

「どうした、シアルヴィ。久々の対面だというのに。ああ、それと俺の名前は杉悠斗だ。覚えておけ」

なぜ会ったことのあるはずのある人間に名を名乗るのかは、実達にはわからなかった。しかしそれよりも目に付いたのはシアルヴィの顔だった。明らかに悠斗を恐れていた。顔色は悪くなり、汗が流れていた。悠斗はその姿をあざ笑うかのようにだった。

「それで？ おまえの主は何と言って来たんだ？」

シアルヴィは身体を震わせながら言った。

「あ……ここから南の方向にある廃棄された工事現場で待つと……」

「わかった。すぐに行く」

悠斗はそう言うと言分の部屋へ向かった。彼は自分のジャケットを持ってすぐに戻ってきた。

「悠斗、出掛けるの？」

実が靴を履く悠斗に聞いた。

「ああ」

悠斗は関心がないように言った。

「雨が降りそうだよ。傘を持っていった方がいいんじゃない？」

「いらない」
悠斗は靴を履き終わるとシアルヴィを無視して外へ出た。彼の姿が見えなくなると、シアルヴィは緊張の糸が切れたように座り込んだ。

「だ、大丈夫？」

実が心配して近寄った。シアルヴィは顔を上げないまま震えていた。

「ねえ、君は悠斗とどういう関係なの？」

実はシアルヴィの顔をのぞき込むようにして尋ねた。シアルヴィは震える声で言った。「あの方は悪魔だ・・・世界を滅ぼした悪魔だ・・・」

シアルヴィはそう言うと、ふらりと立ち上がり出ていった。それを見送ると、実は傘を持って家を飛び出した。始は止めようと声をかけたが、実にその声は届いていなかった。始はしばらく迷ってから実の後を追った。

悠斗が目的の場所に着いたとき、まだ雨は降っていなかった。しかし雷がすぐそばまで来ていた。

「雨が降る前に帰りたいんだが」

悠斗は目の前にいる人物に言った。彼の前にいたのは長身の男性だった。身長は二メートル程あり、筋肉質のがっしりとした体型と金色の髪を持っていた。角張った顎には髭もなく、若いアメフト選手のような見た目。その目には怒りの色が見え、常人なら回れ右をして逃げ出すだろう。しかし悠斗はその威圧感を平然とした顔で受け止めていた。彼の黒い髪は風に遊ばれていた。それを気にせず、悠斗は言葉を続けた。

「そんな怖い顔をするな。数千年ぶりだというのに」

悠斗はからかうように言った。相手はますます機嫌を悪くしたようだ。悠斗はそれに満足したように続けた。

「おまえもずいぶん変わったな。前は黒いあごひげを蓄えて、戦士と言うより蛮族のようだったのに」

「貴様はどうなんだ？」

悠斗の言葉を遮るようにして相手は言った。

「貴様は少し貧弱な姿になったのではないか？ もっとも昔からお

まえは貧弱だったがな。さすがはヘルの父親だ」

それを聞いても、悠斗は顔色を変えなかった。そして悪魔のように口を歪ませた。

「よく似ていない親子だと言われていたが、似ているところがあつたんだな。それに比べ、おまえたち親子は全く似ていないな。知的な父親からどうしてこんな野蛮な息子が生まれるんだ」

そう言い終える頃、雷が悠斗を襲った。真上から降ってきた雷を、悠斗は予想していたかのようにかわした。ついさっきまで悠斗がいた所は抉れ、焼けこげていた。落ちたのは雷だけではない。そこには巨大な鎚が振り落とされたのだ。悠斗はそれを見て勝ち誇るかのように笑った。

「暴力は美しくないな。ま、最初から話し合いで済むとは思ってなかったけどな」

「貴様に弁解の機会など与えん。骨も残さず燃やし尽くしてくれる、

【ずる賢い者】よ」

「そうだろうな。こっちも弁解して許してもらおうなど考えてはいないがな、【戦車を駆る者】よ」

雨が降り始めた。風も強くなり、二人の身体は風と水に打ち付けられた。

一方そのころ、実と始は雨の中悠斗の元へ向かっていた。最初は傘をさしていたが、走るのに邪魔なため折り畳んでいた。そのおかげで身体は雨に打たれ濡れていた。それにもかまわずに走り続けた。今行かなければ絶対に後悔する。知リたかったことが全てわかる。そう思ったからだ。始は何も言わずに走り続ける実の横を黙って走っていた。全てが知りたい、それは彼も同じだからだ。

目的の工事現場に着いた二人は、雷が落ちたのを見た。それは何度も繰り返され、頭に響くような大きな音がした。しばらく二人はその音に驚き耳を塞いでいたが、わずかに聞こえた声に耳を傾けた。一人は悠斗のもの。もう一人は知らない誰かのもの。二人は声のする方へと向かった。近づくにつれ、声ははっきりと聞こえてきた。

「貴様はなぜそんな姿をしてまで生きている？」

落雷が止み、声だけがはっきりと聞こえてきた。

「貴様は所詮、巨人族の子だな。誰かを殺して生きなければ気が済まないか」

その言葉は実達にも届いた。

（殺した？ 誰が？ 誰を？ 一体何の話だ）

実の頭に疑問が飛び交った。二人は声の主達の姿が見える位置までやって来た。地面には黒く焦げた場所が数カ所あった。土は抉れ、穴も空いていた。山積みになされた機材の上に悠斗がいた。しかしその表情はいつもの彼と違っていた。彼と対面しているのは金髪の大男だった。実も始も知らない人物だった。

「貴様は邪神以外の何者でもない。災いと不幸を引き寄せるだけだ」
悠斗は何も言い返さない。男はさらに続けた。

「貴様に生きる資格などない。我々神々を裏切ったのだからな」

「トール」

沈黙を通していた悠斗が口を開いた。

「おまえは注意力散漫だな。観客にも気づかなかったのか？」

トールと呼ばれた男は辺りを見回した。そして物陰から自分たちを見ていた実と始に気づいた。トールは舌打ちをした。

「ちっ、人間か。まあいい、今日はこの辺りにしておいてやる」

彼の怒気が退くと同時に雷鳴は止み、時折光っていた雷光も見えなくなった。

「シアルヴィ、帰るぞ」

彼がそう言うと、機材の影からシアルヴィが現れた。

「そちらも出てこい。不意打ちはごめんだからな」

トールは反対側にある機材の山に向かって言った。機材の影から現れたのは長身の青年だった。青年は鋭い目つきでトールをにらんだ。

「相変わらずですね。しかし私に気づいていたことはほめるべきなのではないか？」

トールはまったく気落とされることなく言った。

「相変わらずは貴様の方だな、フローズヴィトニル。今度会ったときは再び鎖で繋いでやろう」

「どうぞ、できるものなら。その時はチュール神のように腕だけでは済みませんよ」

二人はしばらくの間にらみ合った。そしてトールは悠斗の方を向いた。

「せいぜい怪物の息子と残りわずかな時間を楽しむがいい。裏切り者にふさわしい最後を迎えさせてやろう。ロキ」

「それはありがとう。オーディンたちにもよろしく」

そう言った悠斗をにらみつけると、トールはシアルヴィを伴って歩き去った。後には悠斗とフローズヴィトニルと呼ばれた青年、そして事情を全く飲み込めないでいる実と始が残された。

第3話 偽りの兄弟

真の名を呼ばれた悠斗は、少しもあわてる様子もなく、先刻現れた青年の方を向いた。「大丈夫だと言ったのに来たのか。そんなに俺は頼りないか？」

少し寂しそうに言う悠斗に対し、青年は首を振った。

「そういうわけではありません。ただ私は――」

「いいよ、別に」

悠斗は青年の言葉を遮った。

「別に怒っているわけではない。ありがとう、来てくれて」

優しく言う悠斗に、青年は微笑み返した。実と始は事故以来、初めて見る悠斗の顔に驚いた。それはまるで子供を見守る親のようだった。

「さてと、とりあえず帰るか」

「そうですね」

二人はそう言って歩き出した。

「どうした、いつまでそうしている」

悠斗は呆然としていた実達に向かって言った。

「事情は後でゆっくり説明してやる。とりあえず帰るぞ」

実達は我に返り、急いで二人の後を追った。これから知らされる事実が、この生活に終わりを告げるものとは知らずに……。

家に着いた悠斗達は濡れた身体を暖め終え、熱い紅茶を飲んでいった。と、言っても、実際に飲んでるのは悠斗と青年だけで、実と始はとても落ち着いて飲んでいられなかった。つい先ほどまで現実とは思えない光景に遭遇していたのだから、無理もない話である。それに対し、落ち着いている悠斗はゆっくりと紅茶を飲んでいた。「さて」

急に口を開いた悠斗に実と始は驚き、紅茶をこぼしかけた。それ

にかまわずに悠斗は言葉が続ける。

「まず自己紹介しようか」

そう言われてみればこの青年の名前すら知らないことに気づいた二人は、あわてて言った。

「あ、杉崎実です。悠斗の双子の弟です。は、初めまして」

「兄の杉崎始です。初めまして」

青年の方は軽く礼をして言った。

「フェンリルといいます。初めまして」

丁寧に言われ実はぺこぺこ頭を下げた。始は大分落ち着いてきて、軽く礼を返した。「でも、さっき会った奴はフローズ……って」

「ああ、『フローズヴィトニル』は私の別名です」

フェンリルは始の質問を先に読みとり言った。

「それじゃあ、俺も自己紹介しておくか」

そう言った悠斗の方を全員が向いた。

「しかし、よろしいのですか？」

フェンリルが心配そうに言った。

「かまわないさ。どうせそろそろ潮時だと思ってたんだ」

悠斗は一度息を吐いて、ゆっくりとした口調で言った。

「俺の本当の名はロキ。欺瞞と悪戯を司る北欧神だ」

しばらく二人は何も言えなかった。急に言われたことを理解できない二人に対し、フェンリルが落ち着いた調子で言った。

「お二人とも落ち着いて聞いてください。これから話すことは全て事実です」

北欧神話。それはヨーロッパに伝わっていた神話である。この神話にはオーディンという名の神を筆頭に多くの神々が登場する。ロキはその中の一人である。そして彼はこの神話の中で大きな役割を担っているのだ。

この神話に登場する九つの世界は三つの平面に分けられる。頂上

の平面には戦士の神々の領域アースガルド。二つめの平面は人間の住む中央の世界ミッドガルド。三つ目の平面は凍った霧と暗闇の世界ニヴルヘイム。そして三つの世界にはそれぞれ泉があり、そこはユグドラシルの根に繋がっている。ユグドラシルとは世界樹である巨大なトネリコの木のことである。三つの世界はこの世界樹の恩恵を受けていた。オーディンとその兄弟たちが作り上げたこの世界は、何事もなく、永久に続くかのように思われた。しかし、数百年、数千年続いた神々の支配はある時、予言通り終わりを迎える。神々と巨人族の戦い。これが後に神々の黄昏と呼ばれるものである。これにより神々の時代は終わりを告げる。ロキはこの戦いで神々と敵対し、息子たちと共に命を落とした。そして滅びた世界は希望の神バルドルによって再生する。ここまでが神話として語り継がれるものである。

しかし、現実とは違った。神々の黄昏の後、ミッドガルドは別の次元へとばされ、今の人間界が誕生したのである。人間界に逃げ込んだロキは傷ついた魂を癒すために、長きに渡る休息を必要とした。そして新たな肉体を得るために一人の人間の魂と同化する。

「ちょっと待った」

始が話を途中で切った。フェンリルは一度悠斗の顔を見た。悠斗が軽くうなずくのを見ると、始に促した。始はそれを確認すると、ゆっくり言った。

「同化と言ったが、それはつまりどういうものなんだ？」

するとフェンリルは台所へ向かい、卵を二つ持ってきた。

「この二つのゆで卵で説明させていただきます」

家に着いてすぐにまず台所へ行ったのでおかしいと思っていたが、最初からこうするつもりだったのだと、実と始はあきれた。一方悠斗の方は感心したように言った。

「相変わらず準備がいいな」

「そんなことはありませんよ」

フェンリルはそう言っただけで否定したが、本心ではうれしそうだった。そしてゆで卵の殻をむいた。

「このゆで卵が魂だとします。数千年前、ラグナロクの後、肉体を失った我々は新たな器を求めました。そして適正な人間の魂と同化することにしたのです。そして父上を選んだ人間が大杉悠斗。あなた達の兄弟です」

「・・・は？」

しばらくの間、一般人二人は何も言えなくなった。

「何だ。そんなにショックだったのか？ まあ、無理もないが――」

「「父親？」」

部屋中に響いた声と予想していたものと違う驚きに、悠斗は逆に驚いてしまった。

「ちょっと待て！ 父親ってどういうことだ？」

始は震える指で悠斗を指さして言った。

「・・・驚くのはそっちか？ と言うか、おまえら北欧神話をまったく知らないのか」

「「知らない」」

息のあった兄弟の言葉に、悠斗はあきれて何も言えなかった。何も言えない父親が変わって、息子が説明した。

「私は父上の長男になります。さらに二人の弟妹がいます」

「と言うか、そこら辺は自力で調べろ。北欧神話くらい読んでおけ」立ち直った悠斗が、後を引き継いだ。そしてフェンリルが話を進める。

「大杉悠斗は誕生する前に死ぬ運命でした。しかし父上の魂と融合した為、肉体は存命し続けたのです」

そう言いながらフェンリルは片方のゆで卵を半分に割った。中は半熟で黄身は完全には固まっていなかった。

「融合当時、父上の魂は完全には体に定着することができていませんでした。だから大杉悠斗の魂で自分の魂を覆うことで少しずつ定着していくことにしたのです。ちょうどこの卵の黄身と白身のように

なものです」

「そう言いながらさらにもう一つの卵を割った。こちらは完全に固まっている。」

「十数年掛けて完全に定着するはずだったのですが、そこでおもわぬハプニングが起こります」

「二年前の交通事故か？」

始が訊くと、悠斗は何も言わずにうなずいた。

「二年前の事故で悠斗の魂は完全に俺に吸収された。予定よりも数年早かったが、まあさして問題はない」

「じゃあ、二年前までは悠斗だったの？」

実は身を乗り出した。

「表面上はな。だが基本は俺だ。最初から大杉悠斗なんて人間は生まれてないんだよ」

悠斗の言葉は残酷だった。しかしそれは真実だった。大杉家の次男、「大杉悠斗」は最初から生まれてなかったのだ。ロキはあくまでその肉体と魂、そして立場を利用したに過ぎない。

「人間の魂と融合したのはもう一つ理由がある。他の神々に気づかれないためだ。力が戻るまでは人間の振りをする必要があった」

融合したロキの魂は他の神々に気づかれた。そしてその為の刺客が送られてきた。それがツールだ。

「詳しいことは北欧神話を読んで勉強しろ」

悠斗はゆで卵をかじりながら言った。もうこれ以上説明する気はないようだ。すると始が口を開いた。

「一つ聞きたい」

「何だ？」

「おまえにとって、俺達との生活はただ利用するためだけのものだったのか？」

始は滅多に見せない表情で言った。それは怒りを抑えている顔だった。悠斗はそれを嘲るかのように言った。

「人間ごっこも、それなりに楽しかったよ」

始はテーブル越しに悠斗の襟をつかんで乱暴に引き寄せた。怒りに震えている兄に対し、悠斗は謝罪の念をまったく持っていなかった。動こうとしたフェンリルを無言で制し、見下すように言った。「そんなに怒らなくてもすぐに出て行ってやるよ。どうせ潮時だったんだ」

始の手を振りほどき、自分の部屋に向かった。フェンリルもその後を追った。実は立ちつくす始に何も言えなかった。

三十分ほど経った後、悠斗は荷物を持って部屋から出てきた。そしてそのまま玄関へと向かった。

「世話になったな」

ただそれだけを言うと、フェンリルを伴って扉の向こうへと姿を消した。実は始の様子をうかがった。始はうつむいたまま動こうとしなかった。実は悠斗達の後を追った。部屋に一人残された始は、テーブルを力一杯叩いた。テーブルの上にあったティーカップが倒れ、黒い水たまりを作った。

「くそっ・・・」

テーブルに広がったコーヒーは震える手を映していた。

「悠斗！」

実は出ていった悠斗を引き留めた。

「これからどこ行くの？」

「フェンリルが住んでるマンションに行く。前から考えて準備してたしな」

「出ていくことないじゃない」

しかし悠斗はそう言う実を哀れむように見つめて言った。

「今さら一緒に暮らせるわけないだろう。俺は「兄弟」の振りをしていた邪神なんだ」

「だからって・・・」

言葉に詰まりうつむいた実に、悠斗は一枚の紙を渡した。

「住所と電話番号だ。また誰か来たらここに来るよう言え。大杉家

の両親のことは気にしなくていい。事後処理はちゃんとしておく」

何も言わない実の頭を、悠斗はまるで動物の頭を撫でるかのように軽く撫でた。

「じゃあな」

実が顔を上げたとき、悠斗達の後ろ姿が遠のいて行った。実は追いかけることもできず、ただ立ちつくすことしかできなかった。雨はすでに止んでおり、夕日が実の頬から落ちる涙を紅く染めていた。

第4話 静かな変化と永遠の不変

「本当に良かったのですか？」

荷物を下ろしている悠斗に、フェンリルが言った。

「何がだ？」

「あの御兄弟のこと」

「いいんだよ。もう人間ごっこはいい」

悠斗は荷物を下ろし終わると、身体を伸ばした。

本当にそうだろうか、フェンリルは考えた。彼の父は自分の家族を何よりも大切にする。たとえそれが偽りの家族だったとしても、まったく愛情を感じなかったとは思えない。しかしそれを表に出すことは無いだろう。他人に奥まで入られるのを嫌う人だ。何よりも弱さを他人には見せない。自分の子供にも見せはしない。そして、唯一彼が全てを見せられる人は、もういない。

「明日ヘルを迎えに行ってくる」

「ヘルを？ 大丈夫でしょうか」

「どうせ人間の医療では、あの子の身体を治すことはできないよ」

「そうですね・・・」

フェンリルはそれ以上、何も言わなかった。

大杉家の両親は「悠斗」がいなくなったことに、何も言わなかった。悠斗は宣言通り、「事後処理」をしていったらしい。始は夕食を食べ終わると自分の部屋に閉じこもってしまった。夕食の時も、何も言わなかった。実は食事もほとんどのどを通らなかった。

「二人ともどうしたの？ 気分でも悪いの？」

普段よりも暗く見える二人を母親は心配した。父親もそれに同意するようにうなずいた。実はそんな二人を見て怒りが沸いてきた。それはただの八つ当たりだろう。しかし何も知らずにいる両親が憎ましかった。悠斗がどういった事後処理をしたのかはわからない。

しかし、十七年も育ててきた息子がいないのに、平然といられる両親の姿を見ると、八つ当たりでもいいから怒りをぶつけたくなる。しかし実際にはできない。彼らに非はないのだ。

「何でもないよ、母さん」

実はそう言って安心させると、自分の部屋へ帰った。

実の部屋は元々悠斗と共有で、部屋には二人分の机と、二人が寝る二段ベッド、二人分の服が入っているクローゼットが置かれているはずだった。しかしいずれも昨日とは違っていた。ベッドは実の使っている上の段にしか布団が敷かれておらず、クローゼットには実の服しか入っていない。悠斗の机はなく、本来あるべき場所には長年、机が置かれていた古い跡があった。まるで何年も前から「大杉悠斗」がいないかのようなようだった。実は本棚からアルバムを取り出した。分厚いアルバムには埃が被っていた。アルバムに収められた写真は、どれも兄弟のいずれかが写っているものだった。家族で写っているもの、友人と写っているもの、学校行事の時のもの、始と実、そして悠斗が写っている。写真は三人が小学校に入ってからのもが多く、最近だと実の入学式などだ。実はアルバムをめくるうちに、予想していた通りの結果になっていることを確信した。悠斗の写っている写真が、二年前の日付以降のものが一枚もなかった。「大杉悠斗」は二年前に姿を消しているのだ。実はアルバムを持って始の部屋へ向かった。

始は実から渡されたアルバムに目を通し終えると、しばらく黙り込んだ。そしてアルバムを閉じた。

「俺もたぶんそうなんだろうと考えていた」

突然次男がいなくなれば周囲が混乱する。だからといって存在を消してしまつては、様々なところで矛盾が生じてしまう。しかしすでにいない人間ならば問題はない。写真からしても、悠斗が存在していたのは二年前の事故以前まで。実と始はこれから考えられた想像が当たっているかを確かめるために、動き出すことにした。

翌日は昨日の雨が嘘のような晴天だった。子供たちは昨日外出できなかった分を取り戻そうと、朝から外へ飛び出している。

町の一角にある病院。そこは朝特有の静けさに包まれていた。受付を初めてすぐの待合室には、看護婦や医者が行き来しているだけだ。こんな朝早くから病院に来るものは少ない。入院患者も朝の検査や、朝食後の休憩を取っている。見舞いに来るものは少ない。そんな病院の廊下を、悠斗は一人歩いていた。彼は一つの病室の前で足を止めた。その部屋は一人用の個室で、壁に「幸村舞」と書かれた名札が掛けられていた。悠斗はその扉を数回ノックした。返事はすぐに返ってき、悠斗は中に入っていた。病室には青白い肌の少女がいた。ベッドから起き上がっている彼女は、いかにも病人らしかった。顔は青白く、ウェーブのかかった長い髪は、老人のように白かった。右手には包帯が巻かれており、顔の半分は垂れ下がった髪に隠されていた。

悠斗の姿を見ると、彼女は生き返ったように明るくなった。

「いらっしやい、お父様」

自分を父と呼んだ少女に、悠斗は優しく笑いかけた。

「やあ、ヘル」

悠斗が呼んだこの名こそが、少女の本当の名だ。彼女はヘル。邪神ロキの娘だ。

ロキにはシギユンという忠実な妻がいた。しかし、彼は巨人族の女性アングルボダとの間に三人の子供をもうけていた。長男がフェンリル、次男がミドガルズオルム（ヨツムンガンド）、末の娘がヘルだ。この三人は三匹のモンスターと呼ばれ、神々から恐れられたいた。このモンスターたちの存在を知った最高神オーディンは、それぞれを引き離れた。ミドガルズオルムは海に放り投げられ、世界を取り巻くほどの大蛇となった。ヘルは半身が死んでいる怪物で、死者の世界「ヘル」に放り込まれた彼女は、死者たちの女王となった。フェンリルは大地を飲み込むほど巨大な黒い狼で、神々にだま

され、チュール神の腕と引き替えに鎖に繋がれてしまう。

ラグナロクの時、フェンリルは鎖の呪縛から解放され、ミドガルズオルムやヘルの兵士たちと共に父ロキに従い、神々と戦った。この戦いでフェンリルはオーディンを飲み込むが、その息子ヴィーダルによって討たれてしまう。ミドガルズオルムはトールと戦い命を落とした。ヘルも世界の崩壊と共に消滅した。

急いで図書館から借りてきた北欧神話の一部を読み終えると、始は本を閉じ、深いため息をついた。

「・・・あいつ、狼だったんだ」

悠斗に言われたとおりにするのは気に入らないが、自分たちが彼らについて無知に等しいのは本当のことだ。始と実はバスの中で北欧神話関連の書物を読みあさっていた。

「しかしこれを見ると、あいつどう見たって悪者だな」

「あいつ」とは、昨日まで彼らの兄弟だった男のことである。彼らが兄弟と信じていた男の神の名はロキ。北欧神話に登場する邪神だ。

ロキは悪戯と欺瞞を司る邪神だ。彼は北欧神話の中で最も謎に包まれていると言っても過言ではない。彼は神々と敵対する巨人族の出身でありながら、最高神オーディンと義兄弟の誓いを果たしている。彼の悪戯は時に度を超したものとなり、彼自身を危険にさらすこともあったが、彼はその要領の良さと頭脳でことごとく逃れてしまう。そんな彼は他の神々からも嫌われていたようだが、時には神々にすばらしい恩恵を与え、頼りにされることもあった。しかし最終的に神々を裏切りラグナロクの際、戦死した。これが一般に北欧神話に描かれているものだ。これを見るとたいていの人間は彼を悪者と呼ぶだろう。実際に始や実が受けた第一印象はそうだった。彼ら自身、悠斗の矛盾した性格に悪魔のような一面を見てきた。この神話をそのまま鵜呑みにするのはよくないことだが、今までの悠斗を思い返すと、信じてしまいそうになる。少なくとも、彼は善意満

ちた神ではない。悠斗を見ても、それだけは断言できる。

「兄さん、着いたみたいだよ」

弟に言われて、始はバスが目的地に到着していたことに気づいた。二人は本を鞆にしまうと、誰もいないバス停に降り立った。そのバス停は墓地の前にあった。

「ずいぶん早い時間ね」

「ああ、迷惑だったか？」

「ううん、お父様ならいつでも大歓迎よ」

娘の嬉しそうな顔を、悠斗自身も嬉しそうに見ていた。実たちには見せたことがない、父親の顔だ。

「今日は迎えに来たんだ。フェンリルと三人で暮らそう」

ヘルは一瞬、さらに明るさを増したが、それはすぐに消えた。そして逆に悲しそうな顔をした。

「・・・神々が来たのね」

「・・・ああ」

「けがはない？」

「ああ」

「本当に？」

娘の心配する顔に、悠斗はやさしく触れた。

「俺は嘘つきだけど、おまえたちには嘘をつかないよ」

「でも、隠し事はするわ」

悠斗は何も言えなかった。ヘルは悲しそうに父親を見つめた。

「否定してくれないのね」

「・・・ごめんな」

そう言って悠斗はヘルを抱きしめた。それでもヘルは悲しそうだった。

「私達じゃ、代わりにもならないの？」

「・・・代わりが必要だと思ったことはないよ」

人にとっては気が遠くなるほど長く、しかし神にとっては短い時

間が流れた。しかしどんなに時が過ぎようとも、どんなに世界が変わろうとも、心の空白を埋める術は見つからなかった。いや、見つけようとしなかった。代わりになるものなどあるはずが無いと知っていたからだ。たとえ大きく、そして多くのものを得たとしても、まったく同じものを得ることは不可能なのだ。

「行こう、ヘル。俺達の家へ」

始と実是一个の墓の前に立っていた。表面には「大杉家之墓」と書かれている。二人が見たのは墓の側面だ。いくつも故人の名が刻まれている。その中で一番新しい名だけを見た。他の名よりもはっきりと見えやすい字は、この名が刻まれてあまり時間が経っていない事を示している。日付は二年前、享年十五歳、名は大杉悠斗。彼らの兄弟の名だった。悠斗は二年前の事故で死んだ。少なくとも世間、そして自分たち以外の人間の中ではそうなっている。これが悠斗の言っていた事後処理だ。おそらく誰に聞いても、この二年間の悠斗のことを知っている者はいないだろう。

「本当にいないんだ。『悠斗』は・・・」

改めて落ち込む弟に対し、始は冷たかった。

「最初から『悠斗』という人間はいなかったんだ。ただそれだけの事だ」

だが実は簡単には割り切れなかった。今さら「悠斗」と過ごした日々を消すことはできない。それは始にとっても同じだった。弟の存在が嘘だったとしても、弟として生きた人間がいたのは事実だ。しかし、それを全て受け止めることはできない。

「・・・帰ろうか」

始の言葉に、悠斗は黙って首を縦に振った。兄弟の絆は切れたのである。

第4話

静かな変化と永遠の不変（後書き）

第1章「始まりを告げるは裁きの雷」終了です。

第5話

願う故の汚き心

それは比類無い美しい首飾り。神すらも誘惑する美の結晶。そしてそれを持つ女神は、誰よりもそれに相応しいといえる者だった。首飾りは女神の美しさをさらに引き立てた。しかしそれは汚れ無き”美”の象徴ではない。誘惑に負けた女神の汚点でもあったのだ。

雷が走った日から一ヶ月が経った。この地上に生きる大半の人間にとって、今の状況は一ヶ月前と変わらぬものだろう。しかし変わる者もいる。大杉実もその一人だ。周囲から見れば、変わっているものはなかった。確かに彼の肉親の一人は他界した。しかしそれは二年前の出来事だ。この一ヶ月の出来事ではない。ほとんどの人間がその変化の意味もわからず、首をかしげるだろう。もっとも、気づけばの話だが――。

表面上、実は変わっていないかった。最初の数日は、少し元気が無いのではと心配されたが、今は一ヶ月前と何も変わっていないように見える。しかし、それは振りでしかない。実際には普段通りの振りをしているだけであって、心の中は混乱と迷いに満たされていた。確かにその原因は肉親をなくしたことにある。だが彼にとって、二年前の出来事など意味は無い。それが偽りであることを、彼が知っているからだ。彼の兄「大杉悠斗」が消えたのは一ヶ月前のことである。しかしそれは「兄」の振りをしていた人物だった。実際には、「大杉悠斗」は存在していなかった。だから「大杉悠斗の死」は存在していない。彼の名が刻まれた墓標にも、彼の遺骨がないことを、実は知っている。そして彼のもう一人の兄も、それを知っている。

誰が変化しようとも、世界は変わらずに活動する。実の周囲も、例外には含まれない。悠斗がいなくなったことで、実の心境は変わっていた。常にいなくなった自分の片割れを探している。学校で、

街を歩く人混みの中で、川辺で、家で、以前なら毎日見ていた顔を探している。しかしどこにもいない。悠斗が教えた住所に行こうとも思った。しかし会って何を言えればいいのかわからず、それどころか、何をすればいいのかすらわからなかった。そして自分自身でも気づく。自分が探しているのは、「大杉悠斗」なのだと。「ロキ」と名乗った邪神ではない。十七年間、一緒に暮らしてきた「悠斗」だ。求めているのは、一ヶ月前まであった日常なのだ。

実のもう一人の兄、大杉始は何も変わっていないように見える。今までと同じ日常を送っている。実はこの兄が、時々無性に腹立たしく思え、同時にうらやましく思えた。いっそ、忘れてしまえたらと思う。記憶がなければこんな辛い思いはせずに済んだ。しかしそれは叶わないことだ。なぜ悠斗は自分達の記憶だけ消さずに行ってしまったのだろうと思う。頼めば消してくれるのだろうか。そう考えて、何度も電話に手を伸ばした。しかし一定の電気音を聞いただけで受話器を元に戻してしまう。おそらく本心ではそれを望んでいないのだろうと、実は考えた。ならばどうしたいのか。その結論は一ヶ月経った今でも出せていない。

いつもと変わらない平日の午後。実は中庭のベンチに座り込み、ぼんやりとしていた。急な変化に驚き、混乱し、考えるのが疲れると、ここでぼんやりとするのが、実の最近の習慣になっていた。この日の授業は既に終わり、生徒たちが部活動に励んでいる。帰宅部の実家は家にも帰らない。家に帰れば、また悠斗のことを考えてしまふからだ。家には悠斗を連想させる物がたくさんある。家にいても休むことは出来ないのだ。兄の始も、相談に乗ってくれない。唯一の理解者にすら置いてかれ、実の心は疲労を訴えていた。

「最近どうしたの？ 悩み事？」

突然、隣から声が掛かった。実は視線だけを動かし声を掛けた人物を見た。実に声を掛けたのは一人の少女だった。

「何でもないよ。桜」

実は心中を悟られないよう、振る舞った。しかし桜はだまされなかった。

「嘘つきなさい。最近おかしいよ。何かあったんでしょ」

桜の問いつめに、実は身を引いた。しかし桜はさらに詰め寄ってくる。

「何かあったんでしょ？ 言いなさい、さあ」

昔から桜には頭が上がらない実は、黙ってうなずいた。桜はそれに満足し、身を引いた。実は今までためてきた疲労を、ため息にして吐き出した。

「桜は、悠斗のことを覚えてる？」

「悠斗？ 当然でしょ」

実はその言葉に一瞬、期待を持った。しかしすぐにわかった。彼女の覚えている「悠斗」は、二年前までの悠斗だということが。

「まだ二年しか経ってないんだもの。あんまり実感がないのよね。もう、あいつがいらないなんて」

桜はそう言って背もたれに体重をかけ、空を見上げた。青空を雲が漂い、鳥が悠然と視界を横切る。

桜は、大杉家兄弟とは小学生の頃からのつき合いだ。世間一般で言う幼なじみである。最初に関わりを持ったのは実だった。同じクラスになった実は、隣の席だった桜と自然に仲良くなった。さらに家が同じ町内で、中学年までは毎日のように一緒に遊ぶようになった。実はまず最初に悠斗に桜を紹介した。クラスは違ったが、悠斗も自然に桜と仲良くなった。家に遊びに来ることも多かった桜は、始とも仲良くなれた。始終二人で行動していた双子とは、一番多くの時間を過ごしたと言ってもいい。中学や高校も同じように通い、そのつき合いは今も続いている。二年前、悠斗が事故に遭ったときも、桜は実を励まし、悠斗の見舞いに來た。悠斗の急な変化に驚いたが、それも受け止め、なるべく前と同じ態度を取っている。それでも以前とは別人の悠斗にとまどいはしたが、それが理由で離れたりはしなかった。数少ない理解者である。

しかし今の彼女は二年間の悠斗を知らない。彼女にとって悠斗は、死んだ存在なのだ。実はそのことを言おうか迷った。言ったら桜はどう思うだろうか。喜ぶか、悲しむか。そもそもその話を信じるか。実は迷った。本当のところ、言ってしまういたかった。言って、少しでも楽になりたかった。しかし信じてもらえなかったら、さらに惨めになるだけだ。だからこそ迷った。ひどく自分勝手な考えだ。桜の気持ちなど考えていない。だが、実は一人でも多くの理解者が欲しかった。自分の痛みを知ってくれる人間が欲しかった。兄の始はあれ以来、悠斗のことを何も言わない。あつさりしすぎている。始も悠斗のことを忘れてしまったのではとさえ思える。唯一の理解者となりえる人間から見放された実は、誰でも良いから、助けて欲しかった。しかし誰も気づいてくれない。それが辛かった。

「ねえ、桜」

しばらく考えた末、実は決めた。そして口を開いた。

「何？」

桜はそんな実の気持ちもわからず、実の顔をのぞき込んだ。実は顔を上げないまま言った。

「・・・悠斗は生きてるよ」

「・・・へ？」

桜は聞き間違いだと思った。しかし実はもう一度同じ事を繰り返した。

「悠斗は生きてるよ」

今度こそ桜は、実がおかしくなってしまったのかと思った。悠斗の死は自分もよく知っている。葬式の日、その死に顔も見た。眠っているようにしか見えない、安らかな顔だった。だからこそ、実の言葉は信じられなかった。心配する桜をよそに、実は言葉を紡いだ。
「桜は・・・神様って信じる？」

神は偶像だと、人間界の誰かが言った。誰だったかは覚えていない。その時は、そう思えることはどんなに幸せなことなのだろうと

思えた。それは天に救いを求めない、強さを持った者の言葉。そして、今ならこう思える。それが本当なら良かったのにと――。

事後処理は問題なく済んだ。二年前の事故を利用し、「大杉悠斗」は二年前に死んだことにする。これから住む場所は大杉家から駅三つほど離れた町にある。生前の知人に会うこともほとんどないだろう。特に心配することはない。「大杉悠斗」の人生に未練はない。人間としての人生が悪かったわけではない。もし自分が人間として生まれていたら、こんな人生を送るのも悪くなかっただろうと思う。しかし、所詮それは幻想。人生に「もしも」は存在しない。後戻りできる道は存在しない。それがたとえ神であっても――。娘の注いだ紅茶を飲みながら、悠斗はぼんやりと物思いに耽っていた。

「どうしたの？ お父様」

ヘルは心配そうに父親の顔をのぞき込んだ。

「もしかして、おいしくなかった？」

「いや、おいしいよ。ただ、ちょっと考え事をしていただけだよ」

悠斗はそう言って娘を安心させた。

「考え事って、これからの事？」

ヘルは自分のカップには口を付けず、悠斗の向かいの席に腰を下ろした。

「私、これ以上お父様に神々と付き合ってほしくない」

悠斗はカップをテーブルの上に置き、不思議そうに娘の顔をのぞき込んだ。

「どうしてだ？」

「だって、お父様また危ない目にあったら嫌なもの。ラグナロクの前もそう。お父様が縛られたって聞いたとき、すごく不安だった。時々でも会いに来てくれたお父様が来なくなって、すごく寂しかった。今までの時間に比べたらたいした時間じゃなかったのかもしれない。でも、冥界の空気がいつもよりずっと寒く感じられた。ひと

りぼっちになってしまった気がした」

ヘル之眼から涙がこぼれ落ちた。悠斗はヘルの隣りまで行き、膝をついた。そしてヘルの顔をのぞき込んだ。涙は止まらない。

「・・・ラグナロクの時、私も・・・一緒に・・・行きたかった。死ぬならお父様達と一緒にの方がよかった。・・・でも、行かしてもえなかった」

嗚咽混じりで話す娘の涙を、悠斗は指で拭き取った。

「ヘル・・・」

「私ね・・・このまま人間界で生きたいって思ってる。・・・これ以上お父様が傷つくのは嫌・・・家族みんなで暮らせるなら・・・どんな形でもいいの・・・」

悠斗は泣きやまない娘を優しく抱いた。ヘルは悠斗の服を涙で濡らした。

「私・・・悪い子？ 独りが怖いから・・・お父様達の気持ちを・・・無視してる・・・いけない子？」

悠斗は首を振った。

「ヘルはいい子だ。俺の自慢の娘だ」

ヘルの頭を撫でながら悠斗は言った。

「お前には特に寂しい思いをさせてしまったのかもしれない。すまなかった。確かにこのまま人間として生きるのもいいだろう。それは幸せなことなのかもしれない。だが、俺にはやらなければならないことがあるんだ」

「何を？」

「それはまだわからない。だけど、それがわかるのはそう遠くはない」

悠斗はヘルから離れ、ハンカチをヘルに渡した。

「お前はいい子だ。お前だけじゃない。フェンリルも、ミドガルズオルムも、みんないい子だ。悪いのは俺だ。悪い父親だ」

「そんなことは――」

ヘルの言葉はチャイムの音で止められた。フェンリルは出掛けて

いるが、わざわざチャイムを鳴らしたりはしない。と、いうことは客だ。しかし、ここに客が来るのは珍しい。来るとしたら。あまり良い意味の客ではないだろう。悠斗は警戒し、神経を研ぎ澄ませる。ドアの向こうから殺気は感じられない。しかしよく知っている気配だ。悠斗は直接ドアを開けた。重い鉄の扉の向こうにいたのは、血の繋がりだけはあるが、自分よりもはるかに年下の兄だった。

始は一通の封筒を差し出した。悠斗はテーブルの向かい側からそれを受け取り、宛先と差出人を確認した。宛先は彼が十七年間使っていた「大杉悠斗」の名。差出人は書かれていなかった。悠斗は封筒を振るなどして危険ではないかを確認し、封筒を開けた。ヘルはその様子を心配そうに見ていた。一方の始は出されたコーヒーを黙って飲んでいた。まるで何も関わらないと決めたようだ。封筒の中には手紙ではなく、数枚の券とパンフレットが入っていた。

「それは何？」

ヘルは恐る恐るのぞき込んだ。悠斗は封筒の中をさらに調べ、券の表と裏を見比べていた。

「これは・・・」

悠斗が質問に答えようとしたとき、再びチャイムが鳴った。始はここに来て初めて悠斗の顔を見た。視線だけで「誰だ」と訊いているようだった。悠斗は両手を上げ、「わからない」と示した。やはり外から敵意は感じられない。そしてまたよく知っている気配だ。ヘルはその相手に気づくと、玄関の方へ向かった。悠斗も相手に気づき、止めなかった。そして盛大なため息を吐いた。外にいるのは一人ではないとわかっていたからだ。

自宅があるマンションの前で出会った人物に、フェンリルは驚きながらも、あきれていた。しかも相手は一人ではなかった。同じ年頃の女子高生だ。二人とも制服姿のままだということや、今の時間帯からして、学校帰りに来たようだ。

「何をなさってるのですか？」

答えなど聞かずともわかっていたが、一応決まった文句を言った。
答えは予想通りのものだった。

「ええと・・・その・・・悠斗は？」

やはり悠斗に会いに来たのだ。フェンリルは一緒にいる少女の方を見た。「誰だ」と訊いているようだ。実はそれに気づき、紹介をした。

「ああ、彼女は倉本桜。僕たち兄弟の幼なじみ」

「こんにちは」

桜が挨拶すると、フェンリルもそれに返した。

「初めまして、黒川影行です」

「黒川？」

初めて聞く名前に疑問を持った実に、フェンリルはすぐに答えた。
「私の現世での名前です。私も父とは違いますが、この世界に実在する人間ですよ」

「はあ・・・」

つまり彼も他人に成り代わっているということだろうか。少し文句を言いたかったが、実は耐えた。ここで言い争っても仕方ないからだ。一方のフェンリルも、少し文句が言いたかった。悠斗がした事後処理の結果はわかっているはずなのに、悠斗の生前の知人を連れてきた。この少年は一体何をしたいのだろうかと考え込んでしまう。

元々フェンリルは誰にでも親切にできる人間ではない。彼が敬意を払うのは彼の父一人だ。父に敵対する者は誰であろうと容赦しない。本来なら家族以外など眼中にないのだ。それでも実や始に対して適当な態度を取らないのは、彼らが十数年だけとはいえ、父の家族だったからだ。たとえ仮初めだったとしても、彼らが父と共に生きてきたということに変わりはない。しかしなぜだろうか、彼らが父と一緒にいることがフェンリルには少々気分が悪かった。理由は彼自身にもわからない。ただ、父が自分たち以外の、それも人間を

家族と呼ぶのを見たくなかった。それでもそれを表に出すことはなかった。実達はもちろん、悠斗にもだ。その感情の答えを彼が知るの、少し後の話となる。

第5話

願う故の汚き心（後書き）

第2章 【罪人は鎖を引きずり歩く】 開始です。

第6話 裏切り者への招待状

悠斗は不機嫌だった。無理もない。招かれざる客が、さらに招かれざる客を連れてきたのだから。正面に座る実はばつが悪そうな顔をしたまま黙り込んでいるし、始は我関せずという態度を取っているし、ヘルはフェンリルの後ろに隠れながら様子をうかがっているし、フェンリルは半ばあきれているようだった。肝心の桜はというと、信じられない現実を見せつけられ、実達が話されたのと同じ話をされ、頭を整理しているのか、呆然としている。

「それで？ どういうつもりだ？」

悠斗は実をにらみつけた。

「この状況をわかっているのか？ そんなに自分たちの記憶を消されたいか」

悠斗の怒りがひしひしと伝わり、部屋中に満ちていた。実は黙り込んでいたが、意を決して口を開いた。

「いけないことをしたっていうのはわかってる。でも、悠斗だって何もわかってないじゃないか」

「？」

実の言葉に、全員が首を傾げた。

「どういう意味だ？」

悠斗の怒気のこもった言葉にひるまず、実は話を続けた。

「勝手に死んだ振りして、姿を消して、記憶を消して、勝手すぎるよ」

「そのの何が悪い。こちらにとっても、そちらにとっても有益な事じゃないか」

「それが勝手だって言ってるんだよ！」

まったく反省の色を見せない悠斗に、実は初めて強きの言葉を発した。悠斗を含め、その場にいた全員が驚いた。実は構わずに続けた。

「一番勝手なのは悠斗じゃないか。そんなこと、誰が頼んだんだよ。死んだ振りなんかしなくなたって、そのままでも良かったじゃないか。勝手すぎるよ！」

実の怒声が止むと、しばらく部屋に沈黙が降りた。悠斗はちらりと息子の顔を見た。フェンリルは一見平然としていたが、父親には怒りが爆発しそうなのを押しとどめているように見えた。自分を見る父にフェンリルは気づいた。悠斗は視線で息子を制した。フェンリルはそれに黙って従った。

悠斗は実の前に一通の封筒を差し出した。

「？」

首を傾げる実には、悠斗は見るよう言った。実は言われたとおり、すでに封を切られた封筒から中身を取り出した。桜もそれをのぞき込んだ。中に入っていたのは数枚の券とパンフレットだ。

「これ、何？」

「見ての通り、ファッションショーの招待状だ。さっき始が持ってきた」

実の質問に、悠斗はコーヒーを飲みながら簡潔に答えた。始は実に肯定の意味で首を縦に振った。

「そうじゃなくて、これがどうかしたの」

「パンフレットの裏を見てみる」

実は言われたとおり、パンフレットを裏返した。そこには赤い手書きの文字が一行だけ書かれていた。しかし、それは実の読める字ではなかった。

「何？　これ」

「ルーン文字だ。北欧神たちが好んで使っていた」

『北欧神』という言葉に不安を覚えたが、内容はわからない。

「なんて書いてあるの？」

実が訊くと、悠斗は嘲るかのような目をした。それが実に対してなのか、それとも手紙の送り主に対してなのかはわからなかった。

【罪深き邪神に死の鉄槌を】

単純明確な言葉だった。ほんの一例だけの文字から憎しみの怨念がひしひしと伝わってくる。これは間違いなく悠斗を憎む北欧神からの招待状だ。

「実にくだらん」

実の不安を知ってか知らないでか、悠斗は吐き捨てるように言った。

「わかりやすすぎて面白みがない。これでも自分の正体を隠してるつもりか？　こんなの名刺を送りつけるようなものだぞ」

「父上はこれが誰からの招待状かわかるのですか？」

悠斗の後ろに控えていたフェンリルが、ようやく口を開いた。――彼は家に帰宅してから一言も言わなかったのだ。悠斗は実の手からパンフレットを奪い、一ページ目に描かれている写真を指差した。

「ああ、なるほど・・・」

悠斗の言う意味がわかったフェンリルは、一人納得したようにならずいた。その後ろにいるヘルも、その写真を見て何かに気づいたようだった。しかし、彼女は何も言わなかった。おびえるようにフェンリルの後ろに隠れていた。そんなヘルに悠斗は心配ないと言うように笑いかけた。しかし、実達には見えないようである。そしてフェンリルからパンフレットを受け取ると、パチンと指を鳴らした。するとパンフレットは一瞬の内に燃え上がり、燃えくずとなった。実達は驚き、その様子を凝視していた。それに対し悠斗は、何事もなかったかのように、紅茶をすすった。

「もっとも、隠していないのかもな」

「行かれるのですか？」

顔をのぞき込むようにして訊くフェンリルに、悠斗は楽しげに笑って見せた。

「美人からの誘いを断るわけにはいかないだろう？」

実達には意味のわからない会話だったが、悠斗の言葉でこの招待

状の主が女性であることはわかった。いや、女性とは限らないが――。

「では、私もお供します」

まるで従者のような振る舞いの息子に、悠斗はあきれたように言った。

「心配性だな」

「何があるかわかりませんので」

「俺はそんなに頼りないか」

「それはありません」

即答する息子に悠斗は嬉しく、実達はあきれていた。こんな親子の会話は見たことがない。外見は当然親子とは言えない。悠斗はここ数年で身長は双子の弟より高くなっているが、それでもまだ日本人高校生の平均に入る身長だ。顔はまだ幼さが残り、少年と大人の間と言える。これに対しフェンリルは長身で、悠斗よりも頭一つ分以上違う。顔から判断しても、始より年上に見える。しわ一つないきっちりとした服に身を包んだその姿は、入社したての新入社員に見える。もしくはなりたての教師だ。教科書を片手に持ち教壇に立っている姿が容易に想像できる。そしてあまりにも似合いすぎている。見た目はまじめな好青年といった姿だ。どう考えても親子より兄弟の方が通る。さらに言えば、実の親子であるにもかかわらず、顔はあまり似ていない。親子共々整った顔をしているが、似た特徴は持っていない。しかし、フェンリルの真の姿が本当に狼なのなら、今の人間の姿は成り代わった人間の姿ということだろうか。

「あの・・・訊いてもいい？」

実が一人で考え込んでいると、今まで出なかった声が聞こえた。その場にいる全員がそちらを振り向いた。視線の先にいたのは、ここに来てから一度も口を開かなかった桜だった。悠斗はどうぞと言わんばかりにうなずいた。悠斗の許可を得た桜は、一度深呼吸をしてから言い出した。

「ここにるのが実はロキっていう邪神の悠斗で、後ろにいる黒川

さんがその息子のフェンリルさんだということはわかった。けど・
・」

「けど？」

「その後ろにいる女の子は・・・誰？」

実と始は今になって気づいた。フェンリルの後ろに隠れている少女のことは、何も聞いていないことに。考えてみれば、今までほとんど動かず、悠斗やフェンリルの後ろに隠れていた少女は背景のようで、その存在を問うことすら忘れてしまっていたのだ。

「悠斗・・・そういえば僕たちもその子のことを何も聞いてないんだけど・・・」

実に言われ、悠斗も、今気づいたようだった。

「そういえば紹介してなかったか？　したつもりになっていたな。お前達も訊けば良かったのに」

訊くのを忘れていたなんて言えない。そんな心中を知ってか知らないでか、悠斗は悠々としていた。

「しかたない、紹介してやる。俺の一人娘で一番下の子供、ヘルだ」
そう言われて実達も納得した。先日調べた本の中に、その名はあった。

ヘルはロキとアングルボダの間に産まれた娘で、半身が腐っている怪物だ。彼女はオーディンによって他の兄弟と同じように親と引き離された。彼女は霧の国ニヴルヘイムにある死者の国ヘルに飛ばされ、その国を治める女王となった。死者を支配する彼女の国には神々も近づこうとはしない。かつて、バルドルが死んだとき、彼女の了承を得なければ彼を生き返らせることはできなかった。そして、その願いは叶わなかった。ヘルが出した条件は「全ての者がバルドルの死を悲しむこと」だった。神々はもちろん、皆が彼の死を悲しみ、蘇生を願った。しかし、一人の老婆は悲しまなかった。その為バルドルの復活は叶わず、彼はラグナロクの後までヘルに居続けた。そして、バルドルの復活を妨げた老婆こそが、ロキの変化した姿だ

った――。

実達が納得する中、悠斗はなぜか実達をにらんでいた。

「行っておくが、俺の娘に手を出したら殺すぞ」

「……………誰も何も言えなかった。しかし、落ち着いてくると何かがおかしかった。先日は悪魔のような顔をしていた悠斗が、どこにでもいる親バカな父親に見えたのだ。そう思ったのは実だけではなく、始も同様だった。ただし、始はおかしいと言うより驚いているようだ。気づくと、実達を睨む悠斗の目が厳しくなっていた。

「なんだ、その顔は」

言われて二人はあわてて顔を元に戻そうとした。しかし悠斗の不機嫌そうな顔は変わらない。

「まあいい、次の日曜は空いてるか？」

「？ 空いてるけど、何？」

実の返事を聞くと、悠斗は立ち上がり、窓を開いて風を部屋の中に迎え入れた。

「チケット持って会場に来い。お前等にいいかげんわからせてやるよ。俺とおまえ達の世界の違いを」

悠斗の言葉は冷たく、窓から入ってくる風よりも冷たいものだった。

第7話

家族という名の鎖

一度目と違い、神との二度目の邂逅は晴天の元で行われた。しかし、その内容は一度目の雨よりも冷たく、暗いものだった。

晴天の元、ファッションショーの会場となるホールの前に集まったのは六人だった。邪神一家の三人と現大杉家兄弟二人、そして幼なじみの桜だ。

会場には多くの人が集まっている。このショーは個人が開催したものだが、ファッション関係者以外にも関係者の身内などが集まっている。なので、悠斗達が会場にいても違和感はなかった。

しかし注目はされていた。本人達はほとんど気にしていなかったが、実達は気になりすぎていた。仕方がないと言えば仕方がない。この親子はモデル並かそれ以上に美形なのだから。長身のフェンリルは人混みに紛れても見つけやすく、礼儀正しく大人びた印象は性別や年齢を問わず好感を持たれる。顔もちろん整っている。俳優やモデルと間違われることも多いそうだ。妹のヘルは顔の半分を長い髪で隠し、厚手で長袖のブラウスとロングスカートで身体全てを覆い隠している。手には手袋もしており、露出部はほとんど見えないう。実達はそのことを直接訊いたことはなかったが、神話の記述が正しければ、そうするのも仕方がないことだと思える。ヘルは暗い印象を出しているが、決して人に劣るような顔ではない。むしろ美少女と呼んでも良い。しかし彼女はフェンリルや悠斗の後ろに隠れた状態で歩いているので、なかなか顔を見ることはできない。悠斗は常にヘルをかばうような位置に立っている。どちらかというと悠斗に目が向いてしまって、ヘルには目が届かないのも理由の一つだ。さらに誰かがヘルをじろじろ見ようとすれば、悠斗に睨まれ追い払われてしまう。そして悠斗は二人に負けず劣らず整った顔立ちをしている。どこか日本人離れした顔立ちとは思議に黒髪黒目と似合い、長身ではないがすらりとした体型には全く無駄がない。堂々とした

態度は、嫌みよりも高貴さを出していた。この三人はどこへ行っても目立つ。本人達は気づいているのかいないのか、周りにほとんど目を向けない。ヘルはおどおどしているが、これは常のようだ。そんなヘルを悠斗は気遣っている。常に他人からヘルを隠している。その姿は恋人か兄妹に見えるが、実は親子なのだということを周りが知るわけもない。知っている者からもわかりづらい。それは仕方がないことだ。何せ外見は数歳しか離れていないように見えるのだから。

ようやく人混みを出て席に着いた六人は、一息つけてショーの始まりを待った。

「このショーに北欧神が現れるの？」

実が不安そうに悠斗を見た。

「ああ、よく知ってる奴だ」

悠斗は退屈そうにあくびをしている。ショー自体に興味はないようだ。実達はファッションショーを見るのは初めてなので、始まるのをまだかまだかと期待していた。しかしその一方で不安もあった。先日のトールの来訪は人気のない場所で行われた。しかし今回は人が大勢集まる場所だ。もし、こんなところで先日のような騒ぎを起こせばどうなるだろうかという思いがあった。そして現れる北欧神がどのような人物なのか、考えた。ファッションショーを再会の場を選ぶ理由は何なのだろうか。答えが考えつかないまま、ファッションショーの始まりを迎えた。

進行役のあいさつから始まったショーは、順調に行われた。華やかな衣装を着たモデル達が人々の視線を奪い、その姿に実達は感嘆を抱いた。ショーが始まれば悠斗達の容貌を気にする者もいなくなる。桜は初心を忘れ、モデル達に視線が釘付けになっている。実や始は、ショーに視線を向けながらも、会場のどこかにいるであろう北欧神に警戒していた。しかし肝心の悠斗はというと、警戒心などないかのようにあくびをしている。ほっとくと居眠りまでしそうだ。

時折フェンリルに揺り起こされるが、それでもショーには全く関心を向けていない。なぜそんなに悠長にしてられるのかと、不思議に思うほどだ。

ショーが休憩に入り、人々が各々くつろいでいる頃、一人の男性が悠斗に声をかけてきた。

「大杉悠斗様ですね？」

悠斗はようやく目の覚めたようにはつきりとした目で相手を見た。

「そうだが」

「こちらを」

そう言って男は一枚の紙を悠斗に手渡した。悠斗はしばらくその紙を眺め、あきれたような顔をした。

「女の考えることはわからないな」

そう言っつてその紙をくしゃくしゃに丸め、乱暴にポケットに突っ込んだ。そして何も言わずに立ち上がった。

「何処へ行くの？」

実が悠斗に訊いた。

「所用だ。お前らはショーでも見てろ」

そう言っつて男の後について行ってしまった。

「何なのかしら」

愛想のない悠斗の態度に、桜は憤慨していた。

「以前の悠斗とは全然違うのね。別に今の悠斗の性格が嫌いな訳じゃないけど」

「え？」

桜の意外な一言に、実は驚いた。桜は覚えてないだろうが、桜は以前、ほとんど同じことを言っているのだ。悠斗が事故に遭い激変した頃、親しかった人々が彼の元から去っていく中、桜は悠斗に文句を言いながらも、決して見捨てたりはしなかった。見捨てるという表現はおかしいかもしれないが、家族以外では唯一今の悠斗を受け入れていた。

家族は当初、悠斗の記憶を取り戻すことだけを考えていた。記憶

さえ戻れば、元の彼に戻ると信じたからだ。今なら無駄な苦労と言えるが、当時の家族はそのことだけを考え、今の悠斗の存在を認めることはなかった。そんなこと誰も考えなかったのだ。悠斗自身、それを訴えることはなかった。もしかしたら四苦八苦する家族を心中ではあざ笑っていたのかもしれない。そんな生活が三ヶ月ほど続いたある日、桜が言ったのだ。

「あたしは今の悠斗の性格は悪いと思うよ、でも嫌いじゃない。以前の悠斗が戻ってくるかはわからない。だけど今の悠斗はここにいるんだよ。中身が変わっても家族でしょう？ だったら今の悠斗も見たらどう？」

この時以来、家族の悠斗に対する態度が変わったのだ。以前の悠斗の影を求め続けることをやめ、今の悠斗を見始めた。以前の悠斗を忘れたわけではない。しかし家族ならありのままを受け入れなければならぬ。両親は未だに悠斗に対しぎくしゃくとした態度を取るが、それは悠斗の性格に順応できないからだろう。実や始とて順応しているわけではないが、それでも以前のような他人行儀な態度や、以前の悠斗を見るような目で見たりはしない。桜のおかげで家族になれたのだ。

しかし今と二年前は事情が違う。あの時は記憶がなくなっても家族だと信じられた。しかし今の悠斗は家族ではない。家族のふりをしていた邪神なのだ。彼には自分たちとは違う家族がいる。以前の関係には戻れないのだ。それでも二年前と同じことを言える桜が、実はうらやましく、尊敬した。しかし家族と友人では事情が違う。簡単に以前の関係には戻れないのだ。

男に案内される悠斗は、途中で始に遭遇した。――始は休憩に入っただけトイレに行っていたのだ。始は何処へ行くかも訊かず、立ち去ろうとした。

「そんなに俺が嫌いかな？」

悠斗の言葉を背に受けた始は歩みを止めた。悠斗は案内役の男が

促すのを気にもせず、始に話し続けた。

「何が一番気に入らない？　俺がおまえ達を騙し続けていたことか？　悪人だからか？　人間のふりをしていたことか？」

「全部だ」

最初の一度以来正面から悠斗に話しかけなかった始が、一ヶ月ぶりに声を出した。一度出された怒りは、せき止める術を忘れ、あふれ出した。

「お前がやってきたことも、お前の言うことも、お前の存在全てだ」

幸い周りにはほとんど人がおらず、その声を聞き驚いたのは案内役の男だけだった。悠斗自身は、始をまっすぐ見ている。

「おまえが言う俺のやって来た事とは、神話に語られている出来事も入っているのか？」　まったく表情を変えない悠斗は始は真っ正面からにらみつけた。

「そんな昔のこと、俺には関係ない。俺が言っているのはこの十七年間のことだ」

そう言うと、始は悠斗を押しつけて会場に戻って行った。突然の出来事に飲み込まれていた男は自分の役目を思い出し、話が終わったと見て、悠斗に歩くよう促した。しかし悠斗は動かなかった。後ろの柱にもたれかかり、その場に座り込んだ。男は何度も立ち上がるよう促すが、まったく眼中に入られていなかった。悠斗は天井を見上げ、手で顔を覆い隠した。そしてつぶやくように言った。

「どこが全部だよ……。全然じゃないか」

始は悠斗がやって来た非道をまったく責めなかった。人間は過去のことと異常に執着したかと思えば、自分が生まれていない頃の過去に見向きもしない。もちろん民族や宗教心も影響するのだろうが、少なくとも悠斗の中で人間の過去に対する意識は理解できていない。長い時を生きる神にとって、過去がどれだけ昔のものなのかかわからなくなる。昨日も百年前も彼らにとっては同価値なのだ。しかし忘れはしない。少なくともロキは忘れなかった。特に犯した罪だけは

忘れられることがない。それが自分のものでも、他人のものでもだ。どれだけの月日が経とうとも、その価値が変化することはないのだ。

始は悠斗が人間として生きた十七年間の事を怒った。彼が犯した過去の罪に比べたら、とても小さく見えるものだ。始は世界を滅ぼしたことよりも家族を壊したことを怒った。彼の中の秤では世界よりも家族の方が大きいのだろうか。悠斗とて同じだ。世界よりも大切なものがある。自分の血を分けた子供達、そして一番大切な人。失った時は辛かった。世界なんてどうでもよかった。神の座なんて意味もなかった。決して多くを望んだ訳ではない。家族と一緒に生きたかった。ただそれだけだった。しかし運命はそれすらも許さなかった。憎かった。彼女を奪った全てが。神も、世界も、運命も、全てを壊したかった。結果的にそれを叶えたことになるが、空いた心の空洞は元に戻りはしない。

家族を奪った気はしなかった。なぜなら奪うものが最初から無かったのだから。「大杉悠斗」はこの世に生を受けることなく死んだ。ロキからしたら、肉体と立場を借りただけだ。彼がいなくなれば何もかもが本来の形を取り戻す。なのに、現実違った。実や始にしてみれば、家族である「悠斗」は存在している。そんな偽りの幻想を断ち切り、彼らが信じていたものを壊したのはロキだ。何もうまくいっていない。

《そんな自分たちの記憶を消されたいか》

なぜ最初からそうしなかった。正体がばれた時点で記憶を消しておけば良かったではないか？ いや、そもそもなぜ神々のことを説明した？ 適当な言い訳で押し黙らせることはできたのではないか。虚言を司る自分には充分できたことだろう。なぜあの時まったくそのことを考えつかなかった？ したくなかったのか？ これ以上偽りたくなかった？ 自分は欺瞞を司る邪神だった。人を騙すのが仕事だ。なのになぜ？ 家族以外になぜそんなことをしたかった？

忘れて欲しくなかった？　自分が人間として生きたこと、家族だったことを忘れて欲しくなかった？　なぜだ。必要と思うのは自分自身と家族だけだ。なのに自分は彼らを家族と認めたのか？

自問を続けても答えは出なかった。今すぐ答えを出すことを諦めた悠斗はようやく立ち上がり、歩き出した。

満足いく答えが出ないのは誰もが同じだった。ただ周りもそうだとは気づかず、一人悩み苦しむのだ。家族という絆は一度繋がれば簡単に切れるものではない。時にはその強い絆が重い鎖となって苦しめるのだ。

悠斗はモデル達の控え室に案内された。中には出番を控えた数人のモデル達がいた。モデル達の中にも悠斗の容姿は目立った。無駄のない顔と身体の造形は神が作ったものようだった――悠斗自身が神なのでおかしな話だが。悠斗の出現にモデル達はざわめいたが、すぐに静かになった。むしろ悠斗の顔をしっかりと見ようと首を伸ばしている。悠斗はそれをまったく気にせず、男に案内された席に座った。鏡台に並べてある物は何一つ悠斗にはわからない。そして興味も持たない。悠斗が席に着くと、それを待っていたかのようメイクを始めた。悠斗はされるがままにしている。こんなことをして何になるのだろう。そう思っていた。自分が憎いのならさっさと出てこれば良いのに、わざわざまわりくどいことをする。長い時を生きていても、他人の考えなど百パーセントわかることはないのだ。特に女性はいのだ。特に女性はいのだ。

第8話 流す血の意味

小人達はすばらしい首飾りを作った。それを見た女神はそれを譲ってくれるよう頼んだ。小人達は首飾りを譲る代わりに自分たちと一緒に寝て欲しいと条件を出した。女神は悩んだ末、小人達と一人ずつ一夜を明かした。そして首飾りを手に入れた。それを見ていたイタズラ好きの邪神はそのことを大神に報告した。怒った大神は邪神に首飾りを盗んでくるよう命令した。邪神はその変身能力を使い見事首飾りを盗み出した。首飾りが無くなったことに気づいた女神は、すぐにその犯人を知り、大神の元に現れた。そして罪を追求され、それを認め首飾りを返してもらった。このことは女神の大きな汚点となった。邪神はその様子をおもしろそうに見ていた。

ショーが再開されても悠斗は戻ってこなかった。始はトイレから戻ってから、ずっと不機嫌そうな顔をしていた。実は悠斗を心配していたが、しばらくして悠斗は現れた。ただし、客席からではなく舞台からである。ショーの終盤、モデル達が順番に出てくる中悠々と現れた。実を始め、皆が驚いた。

「何で悠斗が舞台にいるのよ？」

「さあ、何でだろう？」

桜の問いに答えられる者がいるはずもなく、ショーは何事もないかのように進んだ。終盤になって突然現れた悠斗に驚いた客はいたが、誰も不思議には思わない。衣装を着た悠斗の姿は舞台でさらに輝いていた。

そしてクライマックス、スーツを着た悠斗共に舞台の終わりを飾

ったのは、今まで出てこなかった金髪の美女だった。その美しさに会場の誰もが息を飲んだ。赤いカクテルドレスから伸びた細い手足は白く、人形のようなだった。長い金髪は照明の光を受けまぶしいほどに輝いている。アクアブルーの瞳は澄んだ水のように美しく、身体全体が気品さを醸し出していた。そして胸元を飾る首飾りは、彼女の白い肌に映え、さらに美しく見せている。彼女を美の女神と言えど誰もが賛同するだろう。

実や始、桜はこれほどまでに美しい女性を初めて見て、他の客と同様見とれていた。しかしフェンリルは彼女を険しい顔で見つめていた。ヘルはフェンリルの腕に抱きつき、動こうとしない。

舞台の中央まで歩いてくる二人は全ての視線を奪っていた。そして舞台の中央の一步手前で悠斗は突然立ち止まった。急に動かなくなった悠斗に、客はざわめき始めた。実達も驚いていた。フェンリルは腰を浮かせ、すぐにでも飛び出せるよう準備していた。

悠斗は一つため息を吐くと、冷めた眼で美女を見据えた。

「こんな茶番のどこに意味があるんだ？」

美女は驚くわけでもなく、悠斗を見つめ返した。

「意味？ 意味もないことをするのはいつも貴方の方だったでしょう？」

彼女が言い終えた直後、会場を埋め尽くしていたざわめきは消え、人々は棒のように倒れ始めた。

「え？ 一体どうしたの？」

桜が心配して隣にいた客の顔をのぞき込んだ。そして短い悲鳴を上げた。

「どうしたの？」

実は桜が見ていた客を同じようにのぞき込み、青ざめた。さっきまで動いていた客は、ただのマネキンと化していたのだ。

「どういうことだ？」

他の客を見ていた始が、傍にいたフェンリルに尋ねた。フェンリルは辺りを見回し、舞台に立っている美女を見て言った。

「どうやら彼女のルーンによる幻術の一種だったようですね。ここには最初から我々しかいなかったのですよ」

ルーンは文字だけではない。字そのものに意味を持ち、力を持つ者ならあらゆることができる。ルーンは大神オーディンがミールムの泉の傍にあった木に首を吊り、死に近づいたことで手に入れた。

そしてルーン魔法を操る彼女の正体は、当然人間ではない。

「また北欧神か？ 今度は誰だ？」

仮にも神に対し、始の反応は冷たい。始の問いに今度は悠斗が答えた。

「彼女の首元を見ればわかるさ」

そう言われ、始達は彼女の首に光る首飾りを見た。その美しさはどんな宝石を集めても届くことはないかのように思われるほどで、彼女の美しさを際立たせている。始はしばらく思案した後、北欧神話に登場する首飾りとそれを持つ女神のことを思いだした。

「もしかして・・・フレイヤか？」

「正解」

悠斗は褒め称えるように軽く手を叩いた。

北欧神話に登場する神は二つに分けられる。一つはアースガルドに住むオーディンを始めとしたアース神。そしてもう一つはヴァナヘイムに住む豊饒神の一族、ヴァン神である。二つの神々はある時、和平の証として仲間をそれぞれお互いの地へと送った。その時父や兄と共にアースガルドへ移ったのがフレイヤ神である。北欧神でも

最も名が知られていると言っても良い女神だ。豊饒を司る彼女の美しさは巨人族に知れ渡るほどのもので、その為巨人族に狙われることも多々あった。そして彼女が大切にしているのがブリーシングの首飾りだ。小人達が作り上げた首飾りはある条件の下、フレイヤに渡された。

「そう、美の誘惑に負けた愚かな女神だ」

悠斗はフレイヤをあざ笑うかのように見ている。

「トールに続き今度はお前か。相変わらず暇人だな、神々も」

悠斗がそう言うのとフレイヤはにらみつけた。

「あなたが全ての元凶でしょ。そう思うならおとなしく死んでくれないかしら？」

「残念ながらお断りするよ」

「なら、私が殺してあげる」

そう言われると同時に悠斗はその場から飛んだ。フレイヤの手には細身の剣が握られていたからだ。あれもおそらくルーンで作られたものだろう。フレイヤは剣の切っ先を悠斗に向けた。

「お前が戦いで俺に勝てると思っているのか？」

悠斗はまったく動じていない。

「人間のふりをしているあなたが、全盛期のままだと思ってるの？」
フレイヤはしなやかな動きで剣を振った。爆風が舞台を越えて客席まで吹き上がった。吹き飛ばされるほどではなかったが、客席にいた実達からは舞台の上が見えなくなった。悠斗は爆風の中、風を切って向かってくる刃を楽々とかわしていた。

「お前もツールも何でいちいち派手にするんだ？」

悠斗の言葉に聞く耳も持たないかのようにフレイヤは刃を振り下ろす。爆風が起こったのは最初の一撃だけで、後はただの斬撃だ。次第に視界が戻り、剣が風を切る音が聞こえ、照明に反射した剣が光っているのが見える。フレイヤがどんな攻撃を仕掛けても悠斗は余裕でかわし、自分からは何もしない。

「何で攻撃しないのよ」

いきり立つフレイヤに対し、悠斗はあきれするような顔している。

「勝負にならないから。無駄なことはしない主義なんだよ」

その言葉はさらにフレイヤを怒らせるには十分なものだった。フレイヤの怒りは頂点に達し、それを表すかのように爆風が吹き荒れた。爆音が轟き、客席にも無差別に攻撃が与えられる。さすがの悠斗も余裕を見せられなくなった。光の矢が飛び、触れたものを破壊し、爆音と爆風を生む。刃が肌や服を切り裂く。

「ちっ、だから女ってやつは」

悠斗はフレイヤと同じように手の先から剣を生み出した。その剣で飛んでくる刃や剣を打ち払う。客席ではフェンリルがヘルを抱きかかえ、実達を守っているが、ルーンが使えない彼には辛いことだ。守りきれぬわけもなく、爆風で飛ばされた実が客席に叩きつけられた。

「実！」

始がフェンリルの制止を振り切って弟に駆け寄る。悠斗はフェンリルの声で二人に気づいた。

「あの馬鹿！」

フェンリル達は攻撃から身を守るので精一杯で、始達の方へ向かえない。始が矢の雨をやり過ぎ、実の元に辿り着いたとき、桜の聲が爆音の隙間を抜けて届いた。

「逃げて！」

気づいたときにはもう遅かった。始と実の視界いっぱい光の雨が降り注いだ。二人は動くこともできず、目を閉じるしかなかった。

桜とヘルの悲鳴が爆音を消し去り、会場中に響き渡った。

痛みはほとんどなかった。最初は煙で何も見えなかった。何が起ったかがわからなかった。なぜか二人はほとんど無傷だった。なのに血のおいがする。そして何か液体が地に落ちる音がしている。次第に煙がはれ、視界が広がっていく。しかし目の前には影がある。何かが目の前にいる。手から流れる血が手に持っている剣を伝って地に落ち、紅い水たまりを作っている。目の前の何かはゆっくりと後ろを振り返った。

「何やってるんだ。馬鹿ども」

穴と傷だらけの服には光の矢が何本も刺さっている。そこから血が止まることなくあふれ出ている。服から出ている手や顔は傷だらけで紅く染まっている。

「・・・悠斗？」

実は気を失いそうになった。これほどまでの血を見たことはない。そして何よりそれを流しているのは悠斗だったからだ。なぜ悠斗がそうになったかはすぐにわかった。自分たちをかばったのだ。自分たちのせいだ。自分がドジを踏んだからこうなったのだ。罪悪感が実の心を埋め尽くした。一方の始は信じられない光景を目の当たりにしたかのようだった。悠斗が自分たちを助けるなんて、思っていなかったのだ。

「悠斗・・・」

実の震える声は、名前を呼ぶだけで精一杯だった。悠斗は顔についた汚れや血を袖でぬぐっているが、血は再び顔を紅く染める。一

見、平気そうな顔をしているが、その顔色は悪く、地に刺した剣で身体を支えている。受けたダメージは決し小さくない。

「父上！」

フェンリル達が血相を変えて走り寄ってきた。悠斗は青ざめた息子を見て何事もなかったかのように言った。

「何だフェンリル、ぼろぼろじゃないか。大丈夫か？」

確かにフェンリルも傷だらけでぼろぼろではあったが、悠斗に比べたらかすり傷にも等しい。

「ぼろぼろなのは父上です。大丈夫ですか？」

そう言いながら自分の服を破り、悠斗の傷を縛っている。桜がそれを心配そうに見つめている。

「心配ないよ。ところでヘルは？」

悠斗に言われてフェンリルは先ほどまでいた場所を振り返った。

ヘルが涙顔でこちらに向かっている。足場が悪くなっているので、ヘルは他の二人に遅れてしまったのだ。

「お父様！」

必死にこちらに向かってくるヘルを、悠斗が心配をかけまいとした笑顔で迎えようとしている。しかしつかの間の静寂はあっさりと打ち切られた。なぜか一時止んでいた攻撃が再開されたのだ。光の矢が再び悠斗達に襲いかかってきた。

「ヘル！」

ヘルが爆風に吹き飛ばされたのが目に映った。悠斗とフェンリルが顔色を変え、全力でヘルに駆け寄る。地に叩きつけられたヘルはよろよると自力で起き上がった。しかしその時、その彼女の顔を隠していた髪が横に流れ、その顔があらわになった。

「きゃっ」

桜が短い悲鳴を上げた。始と実も目を見張った。予想していたこ

ととはいえ、驚きは隠せなかった。手の包帯もほどけ、素肌があらわになっている。それは神話が語り継ぐとおり、死んだ肉体。目を背きたくなるような腐った身体だった。それが冥界の女王ヘルが忌み嫌われる理由、彼女が化け物と呼ばれる理由だった。ヘルは自分の姿を見て、今までにないほどの悲鳴を上げた。悲鳴は途切れることなく響き渡り、黒い風を生み出した。

第9話

美の仮面

あれはずっと昔のこと。まだ彼女が生きていて、家族みんなで生きていた頃のこと。あの頃のヘルは今以上に泣き虫で、よく自分の容姿のことで泣いていた。その頃暮らしていた巨人の国ウドガルドには、お世辞にも普通とは言い難い容姿の巨人族が少なくはなかった。しかしそんな中でもヘルの容姿は話題に上った。二人の兄もモンスターと呼ばれる身ではあったが、女性であるヘルには酷なことだったのだろう。誰よりも容姿の事を気にし、鏡を見ては泣く始末だった。その日もヘルは暗くなった森の池の畔で一人泣いていた。俺はいつも通りそんなヘルを探しに行き、慰めていた。

「どうした、また泣いているのか？」

それまで泣いていたヘルは、父親の声を聞いて立ち上がり、抱きついてきた。しかし泣くのはやめなかった。そしていつもそのまま泣き止むまで抱きしめてやった。

「今日は池の鏡像を見て泣いていたのか？」

ヘルは声を出さず、顔を服に埋めたままうなずいた。俺はそのまま池の岸边に腰を下ろし、ヘルの髪を撫でていた。

「お前の姿がそうなのはお前の責じゃない。そういう風に生んだ俺の責任だろう」

ヘルは今度は頭を振った。

「じゃあ、何だ？」

それまで嗚咽だけ上げていたヘルは、ようやく声を出した。

「お父様もお母様も綺麗なのに、娘の私はすごく醜くて、でもそれはお父様達のせいじゃなくて、自分の顔を見ると、この世で自分が一番醜い気がして・・・」

あまり答えになってないなと思った。つまり他人より自分が醜い

気がするのだ。

「ヘル」

俺はヘルを促し立ち上がらせ、池をのぞき込んだ。

「よく見てろ」

そう言って水面に石を投げ込んだ。水平だった水面は波紋を立て、それに映る俺達の顔は歪んだ。

「ほら、俺もお前も同じくらい醜いぞ」

「お父様は醜くないわよ」

「お前が醜いなら俺も醜いさ。しかしそれなら一体何が美しいと言えるんだろうな。俺やお前以上に美しい者がいるなら是非見てみたいね」

「・・・お父様って、ナルシスト？」

ヘルはあつけにとられたような顔で見上げてきた。

「さあな。だけど俺が美しいと言うなら娘のお前だった美しいはずだ。それにな、ヘル。上辺の美しさなんて大した意味は持たないぞ。そんな無駄なものを気にするより、もっと他のことを気にしろ。それにな、お前が下手にモテると俺は嫌なんだけどな」

ヘルはようやく笑顔を見せ、クスクスと笑った。

「お父様ったら」

それからはヘルの泣く回数が減った。しばらくしてウトガルドからニヴルヘイムへと住居を移した後もだ。しかし神々によって引き離され、ヘルに閉じこめられてからは再び泣くことが多くなった。なのに子供達は誰も俺を責めたりはしなかった。全ての原因は俺にあるというのに、俺が会いに行けば素直に喜んだ。だから、絶対に失いたくなかった。初めて手に入れた家族。自分の血を分けた子供達。彼らを傷つける者は許さない。それが誰であろうとも――。

黒い風がその場を埋め尽くした。照明の明かりは役に立たない。全ての光を喰らい尽くすように闇は広がっていく。

「何だ、これは？」

予想もしなかった状況に皆慌てた。

「この風に触れるな。死ぬぞ」

悠斗はそう言いながらルーンを空に刻んだ。光の壁が悠斗達を風から守るように覆った。しかし完全に防いでいるわけではない。冷たい空気が壁を通り抜け肺の中に入り込んでくる。

「何これ・・・すごく気持ち悪い・・・」

気分が悪くなった桜はその場にしゃがみ込んだ。実も始も同様だった。膝を地に着き、襲ってくる吐き気を必死に止めようとしている。身体体温はどんどん奪われ、力が抜けていく。悠斗とフェンリルも決して無事ではなかった。特に悠斗は先ほどの傷に響き、顔は土の色となっていた。フェンリルは自分の体調の不具合より父親の身を心配した。

「大丈夫ですか？」

「ああ、それよりもヘルが・・・」

気力で立っていた足も保てなくなり、悠斗は膝をついた。それでも眼光是衰えず、風を中心にいる娘の姿を捕らえていた。

「おい、一体どうなってるんだ」

吐き気を抑えながら始はようやく口を開くことが出来た。しかしすぐに上げた顔を地に向けてしまう。悠斗はちらりと始達の方を向いた。

「要するに、このままだと俺達が先にくたばるか、ヘルが力尽きるのが早いかのどちらかだ」

もちろん悠斗はどちらも望んではない。自分たちが死ねばヘルは暴走は永遠に止まらないだろう。何より今ここで死ぬわけにはいかない。そしてヘルが力尽きるのを待つのも却下だ。力尽きるまで力を暴走させれば、ただでさえ虚弱体質のヘルはただではすまない。

生命に関わるかもしれない。一刻も早く暴走を止める必要がある。

悠斗は決心したかのように顔を引き締めた。

「フェンリル、ここを少しの間だけ任せられるか？」

父の言葉の意味をフェンリルは理解していた。

「お任せを。・・・お気をつけて」

悠斗はそれに満足するかのようになずくと、一人光の壁の外へ出た。

「悠斗、危ないよ！」

実や桜が止めようとする。しかし悠斗はかまわず歩み続ける。黒い風はその歩みを止めようとするかのごとく吹き荒れる。それでも悠斗の足は止まらない。少しずつ風を正面から受けながらも、風の中心へと向かっていく。身体はすでに限界だった。それでも眼光是衰えず、闇の中心にいる娘の姿を捕らえていた。

「ヘル・・・」

父の言葉は娘には届いていないのか、ヘルは顔を上げようとしている。両手で顔を覆い、その場に座り込んでいる。

黒い風は触れた者の生気を奪い、腐らせる。その中を悠斗は無防備なまま突き進む。もはや自分の身を守るだけの力もないのだ。それでも娘の名を呼びながら歩き続ける。

「ヘル」

ようやく娘の元へ辿り着いた悠斗は、膝を折り、ヘルを優しく抱きしめた。

「ヘル、俺の声を聴け。ヘル」

耳に直接語りかけられた言葉はようやくヘルに届いた。

「お父・・・様・・・？」

「ヘル、もう大丈夫だから。気を落ち着かせて」

優しい声は少女の心の奥底まで届き、母が歌う子守歌のように、彼女の乱れた心を解きほぐしていった。それと同時に黒い風は弱ま

っていき、やがて消えた。悠斗は眠った娘の顔を見て張りつめた息を吐き出した。そして娘を抱きしめたまま後ろに倒れ、冷たいコンクリートに身体を預けた。

「悠斗！」

慌てて駆け寄る実達に、悠斗は心配すると言わんばかりに笑った。

「大丈夫だ。これくらいじゃ死にはしない」

フェンリルの手を借りて身を起こした悠斗は、ゆっくりと辺りを見回した。何かを探しているようだ。そしてその視線はある一点で止まった。

「悠斗？」

実達は悠斗の視線の先にあるものを見つけた。それはがれきの中でうごめいていた。悠斗はフェンリルにヘルを預けると、その方へ歩いていった。

「父上、危険です」

近づこうとする息子を押し止め、悠斗は引きずるような足取りでそれに近づき、冷えた眼でそれを見下ろした。

「それがお前の本当の姿か？・・・無様だな」

それはうめき声を上げながら悠斗を見上げた。すでにその姿は元の美しい姿を残してはいなかった。剥がれた皮膚の下には醜い顔。黒く焼けただれたその顔には元の姿を思わせるようなものは何も残っていなかった。

「黄昏の時の傷が消えなかったのか？　その美しさで有名だったフレイヤ神も、これでは形無しだな」

そう言って悠斗は哀れな女神を見ていた。

「なるほど、そのための恨みか。元の顔の面影も残ってないな」
「・・・誰のせいだと思ってるのよ」

剥き出しになった眼球でフレイヤは悠斗をにらみつけた。

「あなたがバルドルを殺したためにこうなったのよ。その責任どう取るつもり？」

そう言われた時の悠斗は、いつもの顔と違っているのを実達は気づいていた。その顔はいつもの悠斗らしくなく、遠い何かを見ているような、どこか切ない眼だった。しかしその表情もすぐに消えた。「最初から責任など取るつもりはない。むしろそのために神の世界が滅んだのなら、その方がいい。それよりも――」

それはすでに冷たい眼をした邪神の顔だった。悠斗はそばにあったガラスの破片を手に取り、それをフレイヤに向けた。

「今責任を取るべきはお前だろ、フレイヤ。神ともあろう者が人間を傷つけ、さらには俺の娘を傷つけた。その罪は重いぞ」

先ほどまでのものとは違う冷たさが会場中に広まっていた。怒りと憎しみが出す張りつめた空気。暖かさなどひとかけらも感じさせはしない。

「美しい顔を切り刻んでやろうかと思ったが、その必要もなさそうだ。その醜い顔をケースに入れて飾っというてやろう」

悠斗は自身の手が傷つくことも構わず、自分の血が流れるガラスの破片をフレイヤの首に近づけた。ガラスが触れたところから血の玉が作られ、やがて流れる血となった。実達は制止することもできないまま見守るしかなかった。この張りつめた空気の中では息をすするのすら困難なのだ。フェンリルは当然止める気もない。黙って父と哀れな罪人を見つめている。

息苦しさの中、実は思った。彼らは家族を傷つけられることを最も嫌う。今彼の心にあるのは家族を傷つけられた怒り。しかし彼は誰を家族と見ているのだろうか？ 娘や息子は当然だろう。だが、彼はそれだけで怒っているのではない。

《人間を傷つけ――》

それは誰でもない、実や始、桜のことを射している。彼は自分たちのことをどう思っているのか。目の前にいる彼は、自分たちにとって何なのか。それを改めて考えさせられた。

実の心中を知るわけもなく物事は進んでいる。悠斗は刃でフレイヤの首を少しずつ切り裂いていく。恐怖で染まった女神はまるでギロチンに首をかけられた死刑囚のようで、悠斗は今まさに刃を落とそうとする処刑人のようだった。

「苦痛に満ちた死を再度与えてやろう」

処刑人は情け容赦のない眼で哀れな咎人を見下し、手にした凶器を振り払った。実達は思わず顔を背けた。閉じられた瞼の裏には吹き出した血が映り、視界を赤く染めた。

第10話 消えた問い

どうして人はまっすぐ進めないのだろうか。いつだってよそ見して、寄り道をして、気づけば思った通りの道を歩めていない。

きっと人は片眼の生き物なのだ。もしかしたら片耳かもしれないけど。だからまっすぐ歩けないのだ。だから探すのだろう。自分の片眼になってくれる人を。きっと二人で三つの眼を使って、またその人が誰かの眼を求めて、そうやってつながっていくのだろう。

だから人は独りで生きていけないのだろう。だから人を求めるのだろう。

ふらふらと歩いて、自分の眼になってくれる人に会えて、そしてやっと人はまっすぐ歩くことができるのだろう。

晴れ渡る空が見渡す限りに広がっている。人によって管理された緑は風に揺らされ、その首を左右に振る。人工的に作られた自然でも、都会に住む人々には十分なものだ。この町でもかなり大きめの部類に入る公園。

そこで悠斗はぼんやりとベンチに座ったまま空を眺めていた。直接受ければ熱い日光も、優しい木陰が遮ってくれる。木々の間から見える空を白い雲が漂っている。白と青のコントラスト。それは一枚の絵のようで美しい。無理に美を求めなくても、世界には美がこんなにもあふれている。そんなことすら気づかなかったのだろう、神は。自分だって気づいていなかった。いや、忘れていた。心の汚さばかり見て、それ以外にはないと思ってしまっていた。人と違って自然は美しい。本当の美は求めて手に入るものではない。当たり前のように転がっているのだ。

「隣、いいかい？」

悠斗はちらりと声の主に視線を向けた。そこに立っていたのは一人の男性だった。赤褐色のスーツをルーズに身に纏い、赤いネクタイを適当に結んだだけの服装。しかしそれを身に纏う人物は飾りなどいらぬほど美しい顔をしていた。光の加減によっては黒にも見える紺色の髪は男性にしては長く、肩まである。長い睫毛と象牙のような白い肌。高い身長から生み出される長い影が、木陰の隙間から通り抜けていた光すら悠斗から奪う。

「勝手にどうぞ。予約は入ってないんでな」

そう言って悠斗は視線をそらし、今度は正面を見た。男は「それでは遠慮無く」と言って、悠斗の隣にゆっくりと腰を下ろした。そして当たり前のように言葉を紡ぐ。

「妹が迷惑をかけたね」

「まったくだ。あまり甘やかすな」

「他人のこと言っていられるのかい？　自分だって自分の子供を甘やかしてるくせに」

「可愛がるのと甘やかすのは別だ。お前は嫉がなってない」

「もう今更無理だよ」

「それもそうだ」

鳥が空を横切った。子供達が笑いながら目の前を通り過ぎていく。しかし二人にはそれもただの背景としか見えていない。しばし沈黙が続く。

「それで？　お前はどうするんだ？　オーデインに言われて来たんじゃないのか？　それとも妹の敵討ちか？」

沈黙を破ったのは悠斗だった。もしそうなら今すぐ殺すとも言

い出しそうな雰囲気だ。しかし相手はそのどちらとも否定する。

「違うよ、今回はこの間でできなかった挨拶と詫びを言いに来ただけ」
この間とは、先日彼の妹が起こした事件のことである。

悠斗達の眼の前でフレイヤは姿を消した。実達は驚いていたが悠斗は気にせず、気を失ったヘルを抱えたフェンリルを伴って帰って行った。

悠斗の傷は一番ひどく、普通の人間よりも回復能力がある身体でもすぐには癒えなかった。一週間経った今でもまだ服の下から包帯をのぞかせている。

ヘルは翌日には眼を覚ましたが、ようやくベッドから出ることができるようになった。

フェンリルは父以上の回復速度で傷を治し、いまでは少し跡を残しているだけである。

実達三人は軽傷だったが、ヘルの力を受けたのが悪かったらしく、二・三日熱を出したらしい。しかし今ではすっかり回復していると連絡が悠斗の元に来た。

連絡が来たとき、心のどこかで安心している自分に悠斗は驚き、苛立った。あの一件で突き放すつもりだったのに、ちっともうまくいっていない。それどころか彼等の心配をしている。自分らしくない思いに戸惑いを隠せなかった。

なぜ彼らの心配をしている。もう何も関係ないはずだ。自分から縁を切ったんだ。なのになぜだ。

あの時もそうだ。なぜかばった。放っておけばよかったのだ。な

のになぜだ。思考するよりも身体が動いた。そうならば後から理由を付けても何の説得力もない。勝手に身体が動いた。そうとしか言いようがない。今までの自分としては考えられないことだ。家族以外の者のためにそんなことするなど、神だった頃からはまず考えられない行為だ。自分らしくもない。

しかしああしなければ、今頃自分は後悔していただろうということがわかっていた。彼らの屍を前にして思うこと、それは大切な人を失ったあの時のものに似ている。彼女と彼らを比べるなどあり得ない。しかしこの想いはそう、《悲しみ》というものだろう。もうあのような想いをするのはごめんだ。未だに消えていないその想いは、彼女への愛情と共に浮かび上がってくるモノ。

「どうした？」

男は心配そうに悠斗の顔をのぞき込んだ。

「何でもない」

敵にまで心配されたらおしまいだ。

「そうには見えないけど・・・、そういうば君と一緒にいた人たちはどうだい？」

「別に・・・」

「別について・・・具合はどうか訊いたんだけど・・・」

「・・・もう元気だと」

「そう、それなら良いんだけど」

言い終わってから悠斗は後悔していた。自分の心中の一部を見られた気がしたからだ。男はそれに気づいているのかいないのか——いや、間違いなく気づいている——、優しい微笑みで言った。通りがかった女子高生達がキャーっと何か叫んでいるようだが、そこは無視する。

「彼ら、君の家族なんだろう？」

どうしてそんなこと知っているんだと訊きたくなるが、そこは神様はすごいからだということでおいておく。

「俺のじゃない。『大杉悠斗』のだ。俺とあいつらは最初から何も関係ない」

それはどこか自分自身に言い聞かせるような言葉だ。

自分で断ち切ったはずの縁を、まだ失いたくないと握りしめている。その糸の先にもう何も繋がっていなくても、確かに繋がっていた証を捨てきれないでいる。無意識にそうしている自分がとてもかっこわるくて、惨めに思えてしまう。こんな自分、自分じゃない。そう叫んでいる自分があるのに、どこかに未練がましく切れた糸を握っている自分がある。矛盾している。わかっているのにできない。

悠斗の心中に気づいているのか、男は微笑みを絶やさない。

「でも『大杉悠斗』は最初からいない。なら『大杉悠斗』として生きた時間は君のものだろう？ 関係ないはずない。彼等の家族は君だ」

悠斗の息が一瞬止まった。

『兄弟』を奪った。『家族』を壊した。それが『悠斗』の罪状。『希望』を奪った。『世界』を壊した。それが『ロキ』の罪状。

どちらも自分。どちらも自分の罪。それを償おうと思ったことはない。いくら責められようとも、そんなものは自分を傷つけはしない。そう思っていた。罪の重さにツブされることなど無いと思っていた。しかしあの時、始の言った言葉が今も心に突き刺さっている。その存在すら許さない、ならば最初からなければよかった。

そもそも自分はどこから来て、どこへ行くのか。どこへ行けば、彼女に会えるのだろうか――。

「意地を張る必要は無いんじゃないか？ 絆を求めることの何が悪いと言う？ 人肌恋しくたってかまわないじゃないか。プライドばかり護っていると、他の大切なものを無くしてしまうよ」

まるでこちらの心を見透かしているような言いぐさだ。しかしそれを笑って捨てることができない。もう気づいているのだ、自分の本心に。それを認めたくないだけなのだ。高すぎるプライドがそれを邪魔する。

何かを捨てなければ護れないものもある。一つのものだけしか見ていなければ、他のものを失ってしまう。そんなこと、よくわかっているのに――。

「さて、僕はそろそろ行くとするか」

そう言って男は腰を上げ、立ち上がった。

「帰るのか？」

「いや、しばらく人間界こうちにいるつもりだよ。神界に帰るよりもこっちの方が楽しそうだしね」

明るい調子で言う彼には、さっきまでの真剣な雰囲気はもう見えない。

「神としての使命より娯楽を選ぶのか？ そんなんだから女にうつつを抜かし死ぬことになるんだ、フレイ」

悠斗の厳しい言葉もフレイは笑って受け流した。

豊饒神フレイ。女神フレイヤの兄で、父や妹と共にアースガルドに移ったヴァン神である。最高位の豊饒神である彼は、見初めた女性・ゲルドを手に入れるために従者・スキルニルを説得に向かわせた。スキルニルは彼女と父親を説得するために贈り物をするが、彼は間違えてフレイより護身用に預かっていた宝剣を渡してしまふ。

そのためにラグナロクの際、彼は鹿の角で戦うしかなく、結果命を落とすこととなる。

「まあ、済んだことは仕方がない。やり直せるわけでもないんだし」

「やり直すか・・・できるはずないよな・・・」

「？ 何か言ったかい？」

「いや、何でもない」

過去はやり直せない。それは真理だ。たとえ神であろうとも。

しかし何か引かかった。今の人間世界、そして神界は神々の黄昏以前と違う姿だ。だがバルドルが蘇らせた世界は人間界も神界も同じ世界にあるはずのものだった。それはまったく同じ世界を作り直すということではないか？ そしてなぜミッドガルドは神々の支配下から離れた世界となったのか。どこかが間違った？ 何が原因だった？ そもそもなぜ同じ世界を再び創造する必要があった？

過去をやり直す？ 誰が何のために？

何か大切なことを忘れてはいないか？

そこに答えが、あるはず――――。

《——考えるな——》

「神としての使命より娯楽を選ぶのか？ そんなんだから女にうつ
つを抜かし死ぬことになるんだ、フレイ」

悠斗の厳しい言葉もフレイは笑って受け流した。

「まあ、済んだことは仕方がない。やり直せるわけでもないんだし」
「それもそうだな」

そこで会話は終わり、フレイは手を振って去っていった。悠斗は
それに答えることもない。そして自分自身も立ち上がり、帰路に着
いた。

先ほどまであった疑問は既に無く、それを考えるに至った工程も
最初から無かった。

世界は静かに時を刻む。流れる運命を知るものはいない。

「お帰り、悠斗！」

家の扉を開けて悠斗が聞いた第一声だった。

そして目の前にいたのは血の繋がった偽りの弟だった。

「ほら、早く上がって。ご飯の用意できてるから」

なぜか自分の家に上がることを勧められなければならないのか。そもそもなぜここにいるはずのない人間がいるのか。

思考している間に悠斗は実に引っ張られる形で部屋に押し込まれた。

「あ、お帰り」

「お帰り・・・」

キッチンにはいるはずのない人間その2・その3がいた。

眉間にしわを寄せている悠斗に気付かないのか、その2はテーブルに作ったばかりの昼食を並べていく。ご飯に味噌汁、鶏の唐揚げ、サラダ、刺身、酢の物。さらにデザートのもりかグレイプフルーツまである。

部屋の入り口で立ったまま動かない悠斗を見て、その2・桜は不思議そうに言った。

「どうしたの？　悠斗好き嫌いあったの？」

メニューに異論はない。ここで何か言いたいとすれば、なぜお前達がここにいるかということであり、なぜ昼食を作っているのかということだ。

「お帰りなさいませ」

丁寧な父親を迎えた息子に、悠斗はようやくここに來てからずっとあった疑問をぶつける。

「ただいま。フェンリル、今の状況がなぜ作られたかを説明してくれないか？」

父親の眉間にあるしわの数が増えていることに気付いている息子は、やはり丁寧な説明する。

「父上が出かけられてすぐ後、昼食の材料を持った三人がいらっしゃり、昼食の準備はまだかとお訊きになり、「そうです」と答えると、「では作りましょう」とおっしゃられ、調理にかかれて三十

分ほど後に完成。それから現在に至ります」

状況の過程は説明された。だが肝心の知りたい部分には到達していない。

「そうか、ありがとう」

フェンリルもそれ以上知らないのだ。悠斗はリビングで今朝届けられた新聞を読んでいるその3こと年下の兄に向かった。

「・・・なぜここにいる？」

悠斗の質問に年下の兄・始は簡潔に答える。

「どうせろくなものを食ってないだろうから飯を作りに来てやっただけだ。あと全快祝いだ」

単純明快な答えである。その答えが納得するものかは別として。

「まだ関わるつもりか？ 俺と神々の争いに」

もう二度と関わらせないためにわざわざ自分と神の戦いに連れて行った。それで懲りたかと思った。だが――――。

「別に北欧神とおまえの喧嘩につきあうつもりはない。ただ俺たちは弟に関わっているだけだ」

悠斗は驚きで何も言えなかった。

ふとキッチンから笑い声が聞こえた。桜と娘が楽しそうに昼食の準備をしている。実はつまみ食いをしようとして桜に怒られている。家族の風景だ。二度と戻らないと思っていたものがそこにあった。

それを眺めていた悠斗に始は年長者のように言い聞かせた。

「おまえがどんなに俺たちから離れても、最初から繋がっていなかったとしても、俺たちが兄弟として過ごしたことに変わりはない」
振り返った悠斗に、始はさらに続けた。

「元々おまえは兄弟もいないんだろ。だったら別に俺たちが兄弟でもかまわないだろ？」 瞬くことさえ忘れている悠斗を見ることもせず、始は新聞で顔を隠してしまった。どうやらさすがに恥ずかしかったらしい。

「・・・俺を許すのか？」

ようやく口を開いた悠斗に、始は赤くなった顔を新聞の隙間からわずかに見せた。

「・・・兄弟じゃなかったらな。最初から兄弟なんだから怒る理由もないだろ」

また顔を隠した兄に、悠斗は笑いをとめることはできなかった。

笑う悠斗を恥ずかしそうに見ている始と、複雑そうに、しかしどこかほっとした顔で見ているフェンリル。

心の底から笑える日など二度と来ないと思っていた。彼女を失った日からずっとそう思っていた。

「ほら悠斗、早く座って。ご飯冷めちゃうよ！」

自分を手招きする実。既に座って自分を待っているヘルと桜。そこには自分の居場所があった。

「ああ、今行く」

絆がないなら作れば良い。どんなに細く短くても良いから。

第10話 消えた問い（後書き）

第2章【罪人は鎖を引きずり歩く】終了です。

第11話 祭の前日

雲一つ無い青空。それを泳ぐ鳥たち。夏の暑さが去り、色づく木の葉が秋の訪れを示している。

夏休みも終わり、学業を中心とした生活に戻った子供達は、過ぎた長期休みを恋しく思いながらも、徐々に元の生活ペースを取り戻していった。

今日はいつもと違う雰囲気が学校中を覆っている。本来今の時間は授業が行われている時間だ。しかし部活動や授業に使われているはずのグラウンドは鉄材やテントが積み立てられ、それを運ぶ生徒や教職員達であふれている。校舎にはカラフルな飾り付けが付けられ、教室には展示物が置かれたり、店の準備が整えられている。生徒達は学校の敷地内を行ったり来たりしている。すべて、明日に行われる学校祭のための準備だ。

大杉実にとってこの数ヶ月は緊張の中にあった。今年の春から始まった北欧神たちの復讐劇。一度は袂を分かった彼の双子の兄・悠斗は、その復讐の刃を向けられる裏切り者としてその舞台に立っていた。様々な想いが行き交う中、その絆を取り戻した兄弟。しかし神々の復讐が終わったわけではない。悠斗の罪が冤罪ではなく有罪である以上、その劇は必然的に行われ続ける。彼の首が絞首台に掛けられるその日まで――。

しかしその戦いも、この数ヶ月は静かなものだった。いつ次の刺客が現れるかもわからない緊張感を破る者はなく、去年の今頃と変わらない平穏な日々が過ぎている。

悠斗は「放っておけば向こうから来る。それまで待てばいい」と言っていたが、実達はそう悠長に構えることもできず、常に緊張していたが、数ヶ月も経てば緊張感も溶け、このまま何も起こらないのではないかとさえ思ってしまう。

そして今、実は学校祭の準備の中、一人廊下で自主休憩をとっていた。

実の高校では年に一度、学校祭が行われる。夏休み前からその準備は始まり、一週間に渡る祭りとなる。それぞれのクラスや部活が出店や展示、教室での飲食店、劇などを行う。この祭りには近隣の協力もあり、PTA主催のバザーも行われている。明日になれば学校は今日以上の人で賑わうだろう。実の学校では、学校祭の前日は丸一日学校祭の準備に当てられる。

ゴン！

脳天を叩くいい音がした。音を出したのは実の頭だった。

突然襲った痛みのため頭を押さえ、しゃがみ込みもだえている実になじみ深い声が降ってきた。

「何さぼってるのよ」

実の後ろにいたのは彼の幼なじみ・倉本桜だった。手には今実の頭を殴ったのに使われたであろう辞書があった。

「痛いなあ、ちょっと休んでただけだよ」

そう言って殴られた頭をさすった。

「それを人はさぼるって言うのよ」

そう言って自分の持っていた荷物を実に押しつけた。

「それ、中庭まで運んで。それと、この辞書図書室に返しておいて」
実の手に乗せられた辞書は両手で抱えるほど大きなもので、さらにそれが三冊・四冊と次々に乗せられていった。

「こんなもの何に使ったの？」

至極当然の疑問である。

「何でもいいでしょ。さっさと仕事をしなさい」

結局疑問は解決されないまま仕事を押しつけられる。これなら真面目に仕事をしていた方がましだったのではないかと思う。

「そういえば」

歩き出そうとした実の耳に桜の声が届いた。

「悠斗達は来るの？ 学校祭」

「うーん、どうだろう」

実はまだ言っていなかったのだ。実の長兄・始は行くと言っていた。始に言わせると大学生は日本中でもっとも暇な人種だそうだ。

しかし次兄・悠斗は来るか自信がなかった。元から祭りなどの賑やかなことに興味のない悠斗は、「面倒くさい」の一言で終えてしまいそうだ。

今日の帰りにダメ元で誘いに行くつもりだった。

「一応、今日誘いに行く」

「ダメだったら？」

「その時は諦める」

その確立の方が高いのだが・・・。

しかし桜は突然実に詰め寄った。

「あんたね、まだそんな遠慮ばっかしてるの？」

「いや、だけど、嫌なら・・・」

「もう少しわがまま言ってもかまわないじゃない。兄弟なんだから。赤の他人じゃないんでしょ」

桜の言っていることも、もっともだ。

フレイヤとの戦い以来、兄弟としての関係を取り戻したつもりだが、どうしても以前通りとはいかない。

悠斗は相変わらず自分の子供達と一緒に暮らしている。既に死んでいることになっているのだから当然なのだが、それがなくとも本人は戻るつもりがまったくくないらしい——記憶を改ざんすることくらいできるはずだ——。

離れて暮らしても家族だと思うのだが、どうしても遠慮がちになっってしまう。実や始が訪ねていっても機嫌の良い顔は見せないし、何かと文句を言う。来るのが本当に迷惑なら追い払っているはずなので、本当に嫌がっているわけではないのはわかる。

しかし一度縁を切ってしまうと、つなぎ直しても完全に元通りとはいかないものだ。

故に遠慮してしまう。

ここでもう少し、歩み寄るのも良いのかもしれない。

「行かない」

その一言で悠斗の意志は告げられる。

「どうして？」

実が一応訊いてみる。

「面倒くさい」

予想とまったく違わぬ言葉だ。

「どうしても？」

それでも実は引き下がらない。

「どうしても」

それでも悠斗の返事は変わらない。

「それに最近ヘル具合が良くないんだ。置いていけるわけないだろ」

ここで娘の名を出されて実は引いてしまった。

彼の双子の兄は子持ちだ。その中でも末っ子のヘルは生まれつき病弱で、熱が出ることもしょっちゅうだ。数ヶ月前は力を使った為に倒れ、この数ヶ月でも熱を出すことが何度もあった。

だからそのことが理由として出されると実もそれ以上強要できなかった。

実の心に諦めの文字が現れ、悠斗もそれ以上会話を続けようしない。そしてこれ以上は進まないと思われた話。しかしそれは意外な形で進行することになる。

「お父様」

良家のお嬢様のような雰囲気を見せ、リビングの扉を開いて現れたのは、今話題に上ったヘルだった。顔の半分を長い前髪で隠し、青白い肌は病的なことを示している。

「ヘル、寝てなくていいのか？」

寝室で寝ているはずの娘が現れたので、悠斗は驚き立ち上がった。

「大丈夫、今日は具合が良いの」

そう言うヘルの姿はけっして元気そうには見えない。

「それよりお父様、せっかく誘っていただいたのだから、お兄様と一緒に行ってきて」

「けど、おまえを置いていくわけには・・・」

「私は大丈夫だから。たまには息抜きもしてきて」

「・・・」

かなり悩んでいる。しかしそれを打ち切ったのもヘルの言葉だった。

「それにそこで何かある気がするの。誰かと再会するような」

それはまた北欧神達との戦いがあることを意味しているのだろうか。そもそもなぜヘルにそんなことがわかるのか。実は二人の会話

の続きを待った。

続きは数十秒後に訪れた。

悠斗は悩んだ末、結論を出した。

「わかった。行ってくる」

それは実にとっては良い返事なのだが、本当にそれで良かったのかとも思えてしまう。「だけど何かあったらすぐに連絡するんだよ。いいね？」

「ええ、わかってる。だからお父様達も楽しんできてね」

「ああ」

そう言っただけでヘルの顔をなでる悠斗の姿は、間違いなく父親だった。実はその姿に、自分たちの家族ではない悠斗の姿を見たようで、少し複雑な気分だった。

独占したいわけではない。けど思うことは止められない。どうして心はこんなにも難しいのだろう。

「本当に良かったの？ 悠斗」

珍しく見送りに出てくれた悠斗に、実は訪ねた。

「おまえから誘ったんだろ」

「それはそうなんだけど・・・」

実はヘルから父親を奪ってしまった気がしてならないのだ。罪悪感が消えない実は顔を上げない。そんな実を、悠斗はあきれたように見ていた。

「・・・ヘルの為にこうした方が良いんだ」

実は顔を上げた。悠斗は実から視線を外して言った。

「あいつは俺の重荷になるようなことにはなりたくないんだ。それに心配ばかりしてもあいつが惨めになるだけだ」

それはそばに居るだけが愛情ではないということだろうか。時には離れるのもその人の為になるのだろうか。

生まれつき身体の弱かったヘルは、自分の弱すぎる身体に劣等感をもっていたらしい。それはヘルのせいではないのだが、それでも周りに心配ばかりかける自分がいやだったのだ。

それは悠斗や実にも理解できる。だからこそ同情してはいけない。哀れんではいけない。それは彼女の為にならないから。彼女を傷つけることになるから。

「おみやげ、何か買っていこうか」

「そうだな・・・」

空が赤く染まり太陽が別れを告げる。そんな中での会話だった

第11話 祭の前日（後書き）

第3章 【舞台の上で子供じみた愛憎劇を演じる】 開始です。

第12話 分かれた血筋

人間の大半は祭好きな生き物だと悠斗は思っている。

暖かな日差しの下、老若男女関係なく人々のほとんどが笑い、その日が平和であることを喜んでいる。

元神である悠斗には理解できないものだ。それは当然と言えば当然である。神は崇められる存在であり、祭は彼らへの感謝と祈りを捧げるためのものであるのがほとんどだ。この祭は何かを崇めるものではないが、神には祭を行う風習があるわけもなく、祈りが届くと信じている人間達をたまに上から眺めていただけだ。

もともと現代の、特にこの国での祭は宗教的なものでもその意味を知る人間も少なくなっているし、集まってくるのはただ楽しみたいだけの人間がほとんどだ。

宗教的な祭ですらほとんど関心をもっていなかった悠斗にとって、宗教的な意味すらもたない祭はまったくの無縁のものであった。

そしてそんな悠斗にとって祭はただの騒がしい行事でしかない。だから行きたいとは思わなかった。

しかし悠斗は今、その祭の中にいる。

実の高校で行われている学校祭。生徒のほとんどが楽しみにしている一年の中で最も賑わう行事。神ではなく人が楽しむための祭。

しかし今日、その祭は神の為の祭となる。神の愛憎劇。血は供物として神に捧げられる。罪深き神の胸を貫くのは復讐の刃か、それとも愛するものを磔刑に処す断罪の刃か――。

「うるさい」

不機嫌なその言葉が最初に発せられた言葉だった。

「うるさいんじゃない、これは賑やかだと言うんだ」

その隣で始が意味もない訂正を行う。

「どっちも変わらん」

尊き元・神様には日本語の訂正(?) など関係ないらしい。

「悠斗、祭は賑やかなものだよ」

悠斗談・うるさい場所に誘った実は少しでも双子の兄の機嫌を直そうとする。しかしその兄は弟の努力などまったく労らない。

「うるさい。脳天気な騒ぐ行事など何の意味がある」

静かな学園祭は逆に侘びしいと思えるが・・・。

あいにくその場にいた人間達には学園祭を開く意味を知る者はいなかった。誰一人、不機嫌な邪神に論じようとはしなかった。もつとも欺瞞を司る邪神様に口で叶う人間がいたらお目にかかりたいと、実達心の中で呟いた。

とにかく、このままでは本当に帰ってしまいそうだ。何とか引き留めようとする実と、どうしても良さそうに出店を覗いている始。その様子を観察している桜は、悠斗に対しての二人の接し方の違いを見つけた。

実は以前のように兄弟として対等に話そうとしているが、やはり以前と同じようにはいかず、うまく悠斗と積極的に接しようとしている。それに対し始は、悠斗の性格をだいたい熟知し、いちいち合わせようとしても疲れるだけだと悟ったらしい。悠斗は他人の言うことなど聞くはずもないのだから、好きにさせておいて、注意はほとんどにしておくつもりらしい。そういった点では、実よりよっぽど今の悠斗に順応している。やはり大人だ。――ちなみに始は今年二十になったばかりだ。

不機嫌な悠斗を実がなだめていると、出店で昼食の焼きそばを買いに行っていた邪神の長男が帰ってきた。

「どうされたんですか？」

状況がわかっていない故の質問だが、その答えは悠斗の顔を見た彼自身の中ですぐに出た。

（父上は明るかったり賑やかな場が嫌いだからな）

しかし下手になだめても火に油を注ぐだけだと、親子としての数百年が物語っているの、何も言わなかった。

触らぬ神に祟りなし。

「じゃあ、行ってくる」

行き先は告げない。でもあなたがどこへ行くつもりなのか知ってたわ。

「いってらっしゃいませ」

絵に描いたような忠実な妻。だけど顔の裏側では行かないで叫んでいたのを俺は知っていた。

「今度はいつ頃戻って来られるの？」

早く帰って来て欲しいとは言わない。あなたは私の願いなど聞いてはくれない。

「さあな」

嘘でもなるべく早く帰るなどとは言わない。そんな俺をあいつは泣いて止めることもしない。

「それでは道中お気を付けて」

優しくなかった。でも偽善で相手を喜ばすことの無意味さを知っていた。

「ああ」

そばに置いてても不愉快にはならない女。でも素直じゃなかった。俺たちに会話など何の意味も持たない。

冷たい人。

つまらない女。

それでも俺たちは夫婦だった。あの最後の一瞬まで――。

「父上、どうされました？」

気づくと目の前に息子がいた。

「いや、何でもない」

悠斗達は今、二年生が開いている野外喫茶店にいた。簡単な軽食とお茶を楽しめる憩いの空間だ。素人が作ったものなので本職のようにはいかないが、それでも味や装飾はなかなかのものだ。なんでも生徒の一人の実家が喫茶店で、そこに協力してもらったらしい。一ヶ月以上指導を受けて、お菓子もすべて生徒の手作りらしい。しかしそんな裏事情、悠斗には関係ない。ただうまいかまずいか、食えるか食えないかのみである。ちなみにまずいものと食えないものは彼の胃袋に収まることなく、ゴミ箱か犬の胃袋行きとなる。

目の前にあるスウィーツの誘惑と格闘する桜――ダイエット中らしい。女という生き物はやせたがるものらしい――。そんなことに気にせず甘い手作りのクレープを次々と口に放り込んでいる実。その様子を見ながらクッキーをかじっている始。それすら見ずにブラックの珈琲を飲むフェンリル。

どれもロキが神であった頃には見なかった光景だ。

確かに家族との団欒の時間はあった。月が優しく降り注ぐ野原で走り回る子供達。それをほほえましく見守る自分と彼女。そこには人も神も関係ない家族の絆と空間があった。しかしそれはあくま

で彼女とその子達だけの話だ。

もう一つの妻子との間にはそんな機会もなかった。ただ形だけの家族を演じていた。

不思議なもので、自分と血の繋がった子等であるのに彼らに対して愛情をもてなかった。愛情を与えない父に彼らが懐くはずもなく、何日も会わないのが普通だった。

妻とも良い夫婦関係ではなかった。悪いとも言わないが。

夫婦であることに不満はなかった。そもそもなぜ一緒になったかすらよく覚えていない。ただ彼女は確かに妻であった。問題もなく、夫に逆らわない妻。愛してはいなかったが嫌いでもなかった。一緒にいても問題はなかった。特別な感情も持たなかった。

あの時までは――。

また物思いに耽っていた悠斗は新たな騒ぎによって再び現実に戻った。

なぜ、今頃昔のことを思い出すのだろう。絆もないもう一つの『家族』のことなんて――。

騒ぎは実達だった。食べ終わった食器を誰が片付けに行くかでもめているようだ――ここはセルフサービス制なのだ。話し合いで決まらない議題を、最終的にじゃんけんで決めることにしたようだ。乗り気じゃない始を巻き込み――悠斗達に言っても無駄だとわかつているので――三人が各々の手を前に突き出す。勝負は1回で終わった。哀れな敗者は実だった。五人分の食器を持ち運ぶ姿は気の毒にも思えるが、勝負の世界に情けもやり直しもない。

代わってやる気などさらさらない悠斗達はその後ろ姿を見送る。

家族の絆もここには意味のないものらしい。

食器と言っても紙製のものなのでそれほど重くはない。しかしそれでもそんな役を押しつけられた――勝負で負けたので押しつけられたとは違いかもしれないが――ことに変わりはなく、憂鬱な気分になる。

実は人々が楽しそうにおしゃべりをしている中、一人さびしく歩いていた。食器はカウンターに客自身が持っていくシステムになっている。実の他にも食器を片付ける人々がおり、実は返却口に並ぶ人の列に入った。列はそれほど長くはなく、すぐに実の番がやってきそうだ。

実がぼんやりと自分の順番が来るのを待っていた時、それは来た。

「お父さん！」

それはそう言って体当たりするかのように実に横から飛びついてきた。

周りが騒然とした。実自身、最初はそれが他人事かのように思えた。しかし当事者は自分だった。

それは少年だった。実よりも小さく、そして数才は幼いだろう。顔を実の身体に押しつけているため黒くて短い頭しか見えないが、髪から覗く首や、実に巻き付く腕の先にある手を見ても、適度に焼けた肌は健康さを出している。

十秒ほどして自分の状況を飲み込んだ実は、慌てて少年を引き離そうとする。すでに周辺の人々は二人の様子を遠巻きに見ながらざわざわと騒ぎ出している。当然だ。父と呼ばれたのはこの学校の制服を着た高校生なのだから。

「ちょっと、人違いだよ。離れて」

実がそう言って話そうとしても、少年は離れようとしなない。

「嘘だ。父さんのおいがする。父さんのおいを間違えるなんて

ありえない」

混乱している実を置いてけぼりにし、少年はさすがのように実の腰を力強く抱きしめる。

「俺ずっと探してたんだよ。なのに何でそんなこと言うの？ 俺こんな姿だからわからないの？ それとも俺のこといらなくなっちゃったの？ だから無視するの？ 俺が弱いから？ だったら強くなるから、フェン兄みたいにお父さんの役に立てるようになるから。だから捨てないで！」

騒ぎはますます広がるばかりだ。少年は「捨てないで」と人目も憚らずに叫び続けている。仕舞いには泣き出す始末だ。

非難するような目を周囲から向けられ、実まで泣き出したくなってきた。

その時、神の救いの手がさしのべられた。正確には声かけられたのだが……。

「おまえ達、何してるんだ？」

実が振り向けば、そこにはまさしく神様・悠斗の姿があった。しかし悠斗の方は今の状況をおもしろそうに眺めている。

「親子感動の再会にしてはへたくそな演技だな。『父を求めて三千里』なんだぞ。子役はともかく父役がいまいちすぎる」

不滅の名作のタイトルが変えられている。というか何の話をしているのだ。

よく見ると悠斗の手には丸められた冊子がある。タイトルは『父を求めて三千里』脚本のようだ。さらにその後ろにはなぜかビデオカメラを持った始の姿がある。

「時間がない。時間を改めて撮り直すぞ」

そう言うとは無を言わず実と少年を引き離すと、少年の手を握ったまま店の外へと出て行った。始達がその後続く。

「何だ、撮影だったのか」

「どっかの部活の？ いつ上映するの？」

周りは適当なことを言っているが、不思議にも映画の撮影ということで収まってしまったらしい。

実も慌てて皆の後を追いかけた。

しかしこの映画が上映されることは一度もなく、不思議にもこの場にいた人間全員が撮影のことどころか、この時見たはずの役者や監督の顔も思い出すことはなかった。

人気のない校舎の裏。そこに悠斗達はいた。さっきまであったはずの台本やビデオカメラはいつの間になくなっていた。そこは神の御技ということにしておく。

ようやく落ち着いてきた実と少年を、悠斗はあきれたように見ていた。

「あんなところで騒ぎを起こすなよ。目立つだろう」

実からすればただ巻き込まただけであり、説明して欲しい位なのだが、悠斗に反論する気は起こらないので黙っておく。

「それにしても、その子誰？」

しばらく静かになっていた桜が少年の涙をハンカチで拭きながら当初の疑問を口にした。

実はここで改めて少年の姿を見る。

歳は十二才ほど。フード付きのパーカーと半ズボンという姿は普通の子供の姿だ。大きくはっきりとした瞳が印象的で、今は泣きすぎたため真っ赤になっている。実にはまったく覚えのない顔だ。しかし始の方は実ではなく悠斗の方をじろりと見る。

「おまえの方の関係者じゃないのか？」

悠斗の虚言に始が付き合ったのも、困っている弟を助けるためと、悠斗が子供の方に心当たりがあるように見えたからだ。

始の言葉は当たっていたようで、悠斗は桜をどかせ、涙をぬぐっている少年の前にかがんだ。

「オルム、間違えるのもわからなくはないが、捨てるというのは聞き捨てならないな」

その言葉に少年はうつむいていた顔を勢いよく上げた。

「俺がおまえを捨てる理由なんてどこにある？　あるわけないだろう。それにおまえが弱くないことくらいよく知っているよ」

ゆっくりと本を読み聞かせるようなその声は、暖かな父のものだった。

「・・・お父さん？」

少年が驚いたように見開いた瞳に映った悠斗は、こくりとうなずく。

「久しぶりだな、オルム」

少年の顔は喜びに満ちたものとなった。

「お父さん！」

今度こそ、その小さな身体は父の腕の中へと迎えられた。

第12話 分かれた血筋（後書き）

第10話までは本編のための準備といったところで、これからが本編です。

現在は第3部といったところ。まだまだ続きそうですができれば最後までお付き合い願います。

第13話 咎人たちの再会

その怪物は海に捨てられた。邪神の父と巨人族の母を持つ彼は巨大な蛇の姿をしていた。神々は彼を他の兄妹と同様、親から引き離し、兄は鎖で繋がれ地中深くに、妹は光のない死者の国・ヘルに、そして彼自身を暗く冷たい海に捨てた。

海に落とされた彼は次第に成長し、世界を取り巻くほどの大蛇となった。

ラグナロクの際、彼は父達と共に神へと戦を仕掛けるが、雷神・トールとの死闘の末、相打ちという形で命を落とす。

その彼の名は―――。

「ミドガルズオルム、またの名をヨルムンガンドか」

三人目の子供の登場に、始はもはや驚きもしない。むしろすつきりする。二人まで登場すれば三人目が登場するのはお決まりだろう。ただそれを望んだことはないが・・・。

また騒がしくなるなと考えながら、始はもはや傍観を決め込んでいる。

「紹介をする手間が省けるな」

悠斗もかなり気楽そうだ。自分の腕の中で泣いている息子の頭をよしよしとなでているが、自分の正面から発せられる強い視線には気付いていた。

「お久しぶりですね、ミドガルズオルム」

冷たく、しかし威圧感あふれた言葉が少年の背に刺さった。

ミドガルズオルムは泣くのも忘れ、後ろを振り向く勇氣もないまま、固まっている。

しかしそんなこと氣にも留めず、というかしてくれるはずもなく、兄は久方ぶりに会った弟に優しく声をかける。

「どうしましたオルム。久しぶりに会えたというのに、兄には再会の言葉もかけてくれないのですか？」

夏の暑さがまだ少し残る今日の気温が、数度下がった気がした。

弟の顔を流れる汗は熱さの為ではないだろう。

実達は初めて見るフェンリルの姿に、彼が怪物だったことを思い出し、口を挟むこともできずに凍り付いていた。

悠斗も少し気の毒に思ったが、下手にかばえば自分も巻き添えを食らうのをわかっていたので、これも教育だと長男にまかせることにした。

長男が怒ると一番怖いことをよく知っているからである。

次男に残酷にも後ろを向くよう促す父。次男も諦めたような、しかし恐怖が張り付いた顔をゆっくりと、おそろおそろ後ろへ向ける。そこには予想通り、冷血な魔王がほほえんでいた。

「お、お久しぶりです・・・お兄様」

その声は身体と共に震えていたが、だからといって情けをかけてくれるような相手でもない。

「本当に久しぶりですね。私もこの十数年探し続けましたがまったく見つからないのでとても心配していたんですよ

（訳／十数年も今まで何してたんだ。人に迷惑かけやがって、出てくるならもっと早くに来てってんだ。肝心なときにいないでこの役立たずが）」

氣のせいかな、言っていることと違うものが聞こえたような・・・。

フェンリルがほほえんでいるというのも珍しいことなのだが――彼は家族以外に愛想を振りまかない――それを好奇心から見続けようとする人間は誰もいなかった。始は傍観を決め込んだまま近くの堀に寄りかかり話が終わるのを待っているし、無責任な父親は巻き

込まれないよう、息子達からこっそりと離れていった。実と桜は衣替えもしていない夏服から見える二の腕に鳥肌を立てていた。

もちろん一番気の毒なのは魔王の前に立たされている哀れな囚人なのだが、誰もそれを助けようとする者はこの場にいなかった。

「えっと・・・ごめんなさい」

まず言い訳もせずに謝罪したのは最善の選択肢だったのだが、残念ながらそれで怒りが収まるのなら苦労はいらない。

「オルム、ごめんで済めば警察はいらないって言葉、知ってますか？」

「・・・・・・・・」

もはや警察を通り越して死刑執行人自らやってきたような気分だ。そもそも神やその息子が警察を気にするのかと思うが、ここでそれを突っ込む勇氣のある者はいるはずもない。

ミドガルズオルムが魔王の説教から解放されたのはそれから三時間後のことだった。

高いところの方が風が強いというのは当たり前のことで、地上では髪を揺らすのがやっとだった風も、ここ屋上では髪だけではなく服さえ手にとって遊んでいる。

風に遊ばれうっとうしそうに前髪を横に流す悠斗は、自分の身体の変化について考えていた。

力のほとんどが全盛期に近くなっているというのに、それ以上近づこうとしない。まるでせき止められたダムのように。自分の力の回復に歯止めがかかっていることに悠斗は正直とまどっていた。何

かが邪魔をしているような気がしてならなかった。

しかしそれを誰がするというのだろう。敵対する神々にそんな力があるはずもない。ましてや自分や彼女の意志でもない。ならば誰なのだろうか。

回復が遅いのは外見も同じだ。

黒い髪と同じ色の瞳は日本人である両親や兄弟と同じもので、彼本来の色ではない。肉体も高校生ほどの体格と身長しかない。悠斗の予想では今頃は既に外見の変化は終わっていたはずだ。

変化の遅行は悠斗自身の命にも関わることだ。戦闘力が特別高いわけでもない自分では、トールのような戦神に真っ向から向かって勝機はない。

今まではまだ運が良かった。しかしこれから先、正面から神々と戦えば、悠斗の命はないだろう。

死ぬために蘇ったわけではない。ましてや償うためでもない。それは彼女の意志と、自分自身の願いのため。そのためには再び神々に刃を向けることも厭わない。

悠斗が思考に耽っていたのはそこまでだった。

屋上の重い戸を開ける音が彼の背後からした。彼の待ち人が来たのだ。いや、待たされていたのは彼の方だ。彼にしか気付かない合図により呼び出されたのだ。

悠斗は不思議にもそれを不快に思わなかった。いずれこうなることを予測していたからだ。神々と再び戦うことになれば、こうなることはわかっていた。

しかしそれが彼の行動を止めることはない。もう決めていたからだ。あの日決めてしまったから。芝居じみた恋愛劇はもう終わりにしよう。これはただの愛憎劇なのだ。屋上に新たな人影が

生まれる。悠斗よりも背の低く細い、髪の高い女性。かつての悠斗の髪よりも濃く、光具合によっては茶髪にも見える金髪。北欧神の中には世界中にその名が轟くほど美しい髪を持った女神がいる。しかし彼女の髪はそこまで美しくない。象牙のような肌も、さらさらと流れる髪も、細長い指も、どんなに美しいと人が言おうとも、悠斗には響かない。彼自身が美しいからではない。彼は外見の美しさがたいした意味を持たないと知っていたからだ。

何年ぶりの再会かはわからない。神々にとって年月などほとんど感じるものではないからだ。それは神であった悠斗も同じだった。ここ十数年を長く感じたことはあるが、それよりも前の数百年、数千年を長いと感じたことはない。

しかしそれがどんなに長く感じようとも、短く感じようとも、今ここにあるのは懐かしさだ。それを感じる悠斗自身、不思議に思っていた。自分が懐かしいと感じることに。

それは彼女も同じなのだろう。悠斗を見る目には懐かしさがにじんでいる。そしてあるのは愛情と憎悪。いつしかそれが当たり前となっていた。

それを放っておいたのがそもその始まりだったのだろうか。しかしどんなに後悔しても、落ちてしまった砂を元の器に戻すことはできない。

神にはこんなにも不可能なことが多い。なのになぜ人は神を崇拝するのだろうか。救ってくれと祈るのだろうか。

救いを求めたのはどちらなのだろうか。

魔王の説教が終わる頃、すでに日は沈みつつあった。

哀れな弟は体中の水分を汗として流してしまったのか、干上がったミイラのようになっていた。

一方、怒りを静めた魔王こと兄は、ようやく満足したのか周囲を見渡し、自分の説教が思ったより長引いてしまったことに気付いた。「せっかくの祭でしたのに、無駄に時間を使ってしまったね」誰が使わせたんだとその場にいた全員が心の中で叫んだが、現実に響くことはなかった。「そろそろ一般客は帰る時間よ」

携帯に表示されている時刻を見て桜が言った。

「じゃあ、そろそろ帰るか」

始の言葉を合図にそれぞれが帰宅準備を始める。

実と桜は一度教室に戻り、始は先に帰宅することにした。フェンリルはひからびた弟の首根っこをつかんで引きずるように帰って行く。

しかし実達に見送られ学校の門を出たところでフェンリルが立ち止まった。

「ところで・・・父上は？」

その場にいた全員が一瞬固まった。

本来いるべき人間・悠斗の姿がどこにもなかったのだ。

「今まで・・・いたよね？」

自信なさげな桜の言葉に、誰もが首を縦に振ればいいのか横に振ればいいのかわからなかった。そもそも最後に彼を見たのが何時なのかさえ誰一人覚えていないのだ。

「喫茶店を出たところまでは確かにいたよ」

「でもそのあといつまでいたんだっけ・・・」

考えられるとすればフェンリルの説教中に消えたということだが、誰一人今まで気付かなかったのはおかしい話だ。実達はともかく、そばにいただけでその気配を察知できるフェンリルが気付かないのもおかしい話だ。

うんうんと皆がうなっているとき、フェンリルが実の方を見てい

た。

「あの・・・何か？」

「少しじつとしていてください」

言われるままにその場で直立する実に、フェンリルはくんくんと鼻を近づけにおいを嗅いでいる。

そういえばあいつ狼だったんだよなどどこかのんきなことを考えている者もいたが、そんなことお構いなしにフェンリルは実の体中を嗅ぎ回る。そして背中まで来てその動きをぴたりと止めた。

「背筋を伸ばして、動かないでください」

フェンリルの指示に従う実の背中を見ていたフェンリルは、しばらく狙いを定め、思いつきり実の背中を叩いた。

バッシーーーーーン！

すさまじい音がその場に響き、人の少なくなっていた校門にまだ残っていた人たちが、何事かと見を集まってきた。

「痛ったーーーーー！」

音と同じくらい実の悲鳴が響いた。

「ちよつと、何するんだ！」

詰め寄ろうとする始に見向きもせず、フェンリルは地面から何かを拾い上げた。

「逸れ、何？」

見ればフェンリルの手の上には淡い光を放つ文字のようなものが浮かんでいた。

「これはルーンですね、もうほとんど消えかけてますが」

確かに手の上に浮かぶ文字はほとんどその形を失いつつあった。

「で？　こんなものできるのは一人しかいないから誰がやったかは訊かないが、何でこんなものが実の背中に付いてるんだ？」

まだ怒りが収まらないのか、眉間に皺を寄せたままの始の姿があった。しかしフェンリルは誤るそぶりも見せない。

「付けたのは言うまでもなく父上でしょうね。今まで不在に気付かなかったのはこれのせいでしょう。彼に自分の存在感を映していたんでしょう。たぶんここに来た頃には付けられてましたよ。付けてすぐに消えれば私が気付くから、時間をかけてなじませていったんですね」

「そうだよ、これのせいで俺も最初間違えたんだよ」

フェンリルが淡々と説明する中、割り込むようにミドガルズオルムが会話に加わった。

確かに人間の姿をしているとはいえ、父親の気配を間違えるのも変な話だ。

しかしそれもフェンリルからすれば、言い訳にしか聞こえないわけだが。

「それはあなたの情けなさも原因の一つだと思いますよ。とにかくそんなことは放っておいて、父上はどこに行ってしまったのでしょうね？」

かなりひどいことを言っているようだが、ここでそれに反論している暇はない。優先すべき問題は悠斗だ。

「まさかまた神様とやらが来てるんじゃないだろうな？」

皆が危惧することを最初に言ったのは始だった。

「可能性は十分にありますが、しかし我々を置いていく必要もないでしょう」

確かに力が戻りきっていない悠斗が息子達を置いていくのも妙だ。たとえそれが心配させまいとした行為であったとしても、黙っていた方が心配するということを父親である悠斗がわからないはずもない。

ならば、息子達にも黙っておきたいことだと考えるのが適切だろう。

だが、彼が息子達にも隠したいこととは何だろうか。

しばらく考え込んでいたフェンリルの耳に、弟の愚痴が飛び込んできた。

「あゝあ、せっかく苦勞して会いに来たのに、父さんどこに行っちゃったんだよ。あいつらのこともまだ言っていないのに」

「あいつら？ オルム、あいつらとは誰のことですか？ 何があったんですか？」

聞き捨てならないとばかりに訊くフェンリルに、ミドガルズオルムは大きなため息をはいた。

「やっと訊いてくれた。俺だって何も遊んでた訳じゃないんだぜ？ 父さん達を探そうとしたらいつも邪魔してくる奴らがいたんだよ。今日はなぜか邪魔されなかったけど・・・」

「奴らって、誰ですか？」

「あいつらだよ。フェン兄も知ってるだろ？ あのむかつく兄弟と母親」

そこでフェンリルも気付いた。悠斗が自分たちの前から姿を消した訳を、そして誰と一緒にいるのかを。

掌の中にあったルーンが握りつぶされた。

「オルム、父上を捜しますよ。おそらく彼らと一緒にです」

「嘘！？ マジ！？」

話しについて行けない実達を置いてけぼりに二人は校舎へと走り出す。ルーンが消えた今なら、悠斗の気配もわかる。

「おい、どうしたんだよ！？」

慌てて二人を追いかける実達と話している暇などない。そもそもこれは自分たち家族の問題だ。

いや、置いて行かれた現状では、自分たちはこの問題に関係ないと考えられたのかもしれない。確かに血のつながりこそあっても、彼らとの間に絆というものはなかった。むしろあったのは自分たちの父を奪うかもしれない憎らしい存在という認識だけ。

そしてその想いは、今実達に対して持っている名も知らない感情に似ているということを、フェンリルはまだ気付いていない。

第14話 断頭台のサロメ

それは舞台の上で演じる劇のようなものだったと悠斗は思う。

役者は役にはまると自分が見えなくなると言うが、自分たちの”

劇”に感情なんてなかったと思う。ただ形だけがそこにあり、愛をささやく時間も、互いのぬくもりを求め合うこともなかった。

ただそれでも自分たちは夫婦だった。それだけが事実。その事実だけが収まる場もないままふわと漂っていた。

自分にとってはそれだけだった。そこに不満も不幸もないまま変わらぬ日々を送っていた。

あの時までは――。

悠斗は腕の中の存在に対し、何の感情もなかった。燃えるような熱さも、凍てつくような冷たさもそこにはなかった。

自分よりも小さく細い身体。柔らかく暖かなそれは確かに腕の中にある。しかし名にも感じない。自分が驚くほど何も感じなかったのだ。

このまま放っておいてもいいのかもしれない。そんな考えが悠斗の中によぎった。しかし幕はいつか下ろさなければならぬ。観客もいない、役者だけが棒読みのセリフを並べるだけの劇だとしても、この劇は終わりにしなければならぬ。

もうとうに終わっていたのだ。あの時、存在するだけだった夫婦の絆は切られたのだ。彼女自身によって。ならば終わらせるのは自

分の役目だろう。カーテンコールすらない最終章。それは始まりと同じく、誰にも気付かれないまま終わるのだろう。

ただ自分にできるのは一つだけ。閉幕のベルを鳴らすだけだ。

秋の初めを告げる夕暮れの冷えた風が二人の髪を揺らしていた。

夕日に照らされる二人の影は重なり合い一つとなって屋上の端まで伸びていた。

抱き合う姿はまるで愛し合う恋人が互いのぬくもりで暖め合っているように見えるが、二人の心は決して温まっていない。その心の中にあるのは懐かしさと憎悪、そして一方には愛情、もう一方には虚無が広がっていた。

「どうした？」

相手の髪に顔を埋めながら悠斗は言った。

「何もしないのか？」

相手の女性は彼の背にまわした己の手を彼の背に食い込ませた。

それでも悠斗には痛みもなかった。

彼女は何も言わない。

「早くしたらどうだ」

悠斗の声は秋の風よりも冷たく彼女の耳に響いた。手が一瞬震えた。それでも彼女は何もしない。背にまわされた銀色に光るナイフは行き場もなく夕日を映していた。

「じゃないと・・・」

彼女の背にまわっていた悠斗の手が内側にまわされた。

「俺が殺してしまうよ」

その言葉が彼女の耳に届いたときには、その背には夕日より紅い花が咲いていた。花の中央に紅く染まった手を生やして・・・。

実達の目に飛び込んできたのは夕日を背にした一つの影だった。
いや、重なり合って一つとなった影だった。

抱き合う影の向こう側に彼等の探し人はいた。そしてその手前で
抱かれているのが誰かはわからない。背格好から女性だとわかるが。
夕日を背にした二人の顔は暗く見えにくかったが、女性の背にあ
る何かだけははっきり見えた。

手だ。紅く染まる手。聞こえるのは何かが地に落ちる水音。鼻に
入ってくるのは鉄のにおい。見える色は紅だけ。

沈黙だけがその場を支配していた。誰も動かない。思考も停まっ
てしまった。ただ開け放たれた屋上への扉が風にあおられゆらゆら
と揺れていた。

「あ……悠斗……？」

ようやく実の口から言葉が出たのは、ここに来てから何分後だっ
ただろうか。女性の髪に埋められていた悠斗の顔が上げられた。

そして視界が割れた。夕日に亀裂が入り、ガラスが割れるような
音が響いた。

「……あれ？」

次の瞬間にはむせかえるような血のにおいも、夕日よりも紅い血
もそこにはなかった。いるのは夕日を背に立つ悠斗と、その足下で
うなだれている女性の姿だけだった。その背を貫いていた手はいつ
もと変わらぬ色をしていた。

「悠斗……？」

実が双子の兄の名を呼んだときには、既に息子が父の元へと走り
寄っていた。

「父上、大丈夫ですか？」

「お父さん、大丈夫？」

息子達の心配に悠斗は全く無傷のまま答えた。

「大丈夫だよ。俺はな」

そう言っただけでうなだれている女を見下ろした。女は青ざめた顔を地に向け、ぶるぶると震えていた。

「さっきのは・・・？」

桜が言ったさっきのとは、つい先ほどまで彼らの目の前にあった光景のことだ。確かに彼らの前で、悠斗はこの女の身体を貫いた。しかし今この場には血の一滴すらない。

「あれは俺がルーンで見た幻だ。幻と言っても五感全てを騙すものだから、ただの幻というわけでもないがな」

悠斗はそう何でもないように言った。つまり先ほど刺された側は、下手をすればショック死すらありえたのだ。

もっとも、悠斗にはそんなこと関係なかった。別に死んでもかわなかった。自分が少しでも彼女を殺さないようにした方が不思議だった。一時は憎しみだけが彼女に対してあった。しかし今は何も感じない。ただ虚無だけが心の中に広がっていた。

「ところで、彼女は誰なんだ？」

始には既に彼女が今までと同様、北欧神の一人であることが予測できていた。しかしそのことに今更驚かない。それにしても女の恨みをよく買っているなと心のどこかであきれていた。

悠斗も今更彼女が神の一人であることを説明したりしない。

「名はシギユン。俺の妻だった女だ」

これには始も含め、その場にいる人間皆が驚いた。平然としているのは悠斗とその息子達だけだ。

その名は実達も北欧神話を調べたときに見たはずだ。

邪神ロキの忠実な妻・シギユン。彼女は夫との間にナリとナルヴィという二人の息子をもうける。しかしロキには既に巨人族の愛人と、その間に三人の子供をもうけていた。それでもシギユンは彼の妻であり続けた。ロキがバルドルを死に追いやり、神々を敵に回しても、ロキを捕縛するため息子の一人を狼に変えられ、もう一人が殺されその腸でロキが縛られても、彼女は邪神の妻であり続けた。神々の黄昏まで拘束されたロキは、その頭上に毒蛇を置かれ、その口から滴る毒液に苦しめられるが、シギユンはその毒液を洗桶で受け止めていた。しかし桶が一杯になるとシギユンはそれを捨てに行かなければならず、その間に滴った毒液でロキは苦痛にもがく。それが地震になるのだという。

「俺ずっとそいつらに邪魔されてたんだよ。だからお父さん達を見つけるのこんなに遅くなったんだよ」

次男の弁明に悠斗は耳を傾けていた。

「ということは愚息どもも人間界に來ているというわけか。まあ氣配も感じないし、ここには來てなさそうだな」

三人の子供達に対しての態度とずいぶん違うことだ。単純に血のつながりがあればいいわけではないのだろうか。

「今日邪魔しなかったのは・・・」

「俺に会うためだろ。オルムに氣を取られている間にと思ったのか」悠斗が何を言っても、シギユンは動かなかった。やはりさっきのショックが大きかっただろう。

「ところで彼女は何しに來たんだ？」

神話からすれば、彼女は今までの北欧神のような敵とは思えない。仮にも妻であった女性だ。なのに悠斗の態度は妻に対しても、味方に対してでもない。彼は先ほど彼女の身体を貫いていた。幻とはいえ、死んでもおかしくないことをしたのだから、彼が彼女の出現を

好意的に考えているということはないだろう。

始の質問に、悠斗はさも当然のように答えた。

「俺を殺しに来たんだろ」

再びその場が凍り付いた。

妻が夫を殺しに来る。そして夫はその前に妻を殺そうとする。一体どうすればそんなことになるのか。決して他人には理解できない問題がそこにはあった。ある意味絆とも呼べる血みどろな関係。

どうしてそうなったのか。悠斗が語った過去は決して甘い恋愛話ではなかった。血と憎悪で築かれた愛憎劇。神々は血まみれの舞台で子供じみた愛憎劇を演じる。

彼らの物語はそこから始まり、そこで終わりを決めていた。

第14話 断頭台のサロメ（後書き）

少し短いですが切りがいいのでここで切りました。
次は少し過去の話となります。

人物紹介1

とりあえずロキ一家（メインキャラクター）がそろったので、かなり前から要望を受けておりました簡単な人物紹介を掲載しておきます。これからまた登場人物が増えますのでまたしばらくしたら改めて紹介したいと思います。

なお、シギユンは登場したばかりなので次回にまわさせていただきます。また年齢は人間界でのものです。

大杉家

大杉悠斗 17歳 男

主人公。大杉家次男。その正体は北欧神話に登場する邪神・ロキ。身内には愛情を注ぐがそれ以外に対しては冷徹。人を傷つけることも騙すことにも罪悪感を感じない。美形。

大杉実 17歳 男

大杉家の末っ子で悠斗の双子の弟。高校2年生。悠斗の正体を知った後も家族としての態度を崩さない。家族思い。

大杉始 20歳 男

大杉家長男で悠斗・実の兄。大学2年生。弟思いの良き兄。時に激情にかられるが、普段は冷静沈着。

3匹のモンスター

フェンリル 22歳 男

ロキと巨人族の女性との間に生まれた子供。長男。真の姿は大地を飲み込むほど巨大な黒狼。常に敬語で丁寧な態度。しかし北欧神に対してははっきりと敵意を見せる。父親を誰よりも信頼し、彼の言葉には絶対に従う。

ミドガルズオルム 12歳 男

ロキと巨人族の女性との間に生まれた子供。次男。フエンリルの弟でヘルの子。真の姿は世界を取り巻くほど巨大な大蛇。外見同様精神的にも幼く子供っぽい。兄を苦手としており、彼には頭が上がない。

ヘル 16歳 女

ロキと巨人族の女性との間に生まれた子供。長女で末っ子。フエンリル・ミドガルズオルムの妹。半身は美少女だが残りの半身は生まれながらに腐っており、長年のコンプレックスとなっている。なおこの兄弟は全員がファザコンである。

それ以外の人間

倉本桜 17歳 女

大杉兄弟の幼なじみ。高校2年生。実と同じ学校に通っている。過去に頓着せず、現在のことを重視する。明るく少し乱暴などがある。

北欧神

トール ? 歳 男

主神オーディンの息子。雷神。【戦車を駆る者】などの異名を持つ。北欧神最強の神で、最強の武器・ミョルニルという鎚を持つ。現在はアメフト選手のような姿。好戦的で乱暴。短気。

シアルヴィ ? 歳 男

トールの従者。ロキを極端に恐れている。

フレイヤ ? 歳 女

ヴァナヘイム出身の豊穡神。その美しさは世界全土に知れ渡るほど。しかし現在はラグナロクの影響で傷が残ってしまっている。

フレイ ? 歳 男

ヴァナヘイム出身の豊穡神。フレイヤの兄。妹同様美形。意中の女性を手に入れるため大事な宝剣を手放してしまい、それが原因でラグナロクで命を落とす。楽観的な性格で、ロキに対しての恨みもない。現在人間界を満喫中。

第15話 愛なき世界より愛を込めて

どうして夫婦になったのかなんて覚えてはいない。気づいたらそうだった。そうなるべくしてなっていたのだ。それが誰かの意志であらうと俺には関係なかった。『夫婦』という名のレッテルを貼られた二人がそこにいた。ただそれだけだ。

ロキは神となってからも巨人族の国・ウトガルドへと通っていた。そもそも彼は巨人族を両親に持つ異端の神だった。彼はその頃から一人の女性と心を通わし合い、神となってからも会いに行った。それはシギユンという妻を持ってからも変わりなかった。

彼にとって『妻』は愛情によって築かれた関係ではなかったし、たとえ子供ができててもその関係に変化があることはなかった。常に暖かくも冷たくもない鎖が二人を結びつけていた。それは相手も同じだと思っていた。だが、違った――。

鏡のように磨かれた大理石の床を、汚すのもかまわずロキは歩いていた。カツカツとブーツは彼の心境を語るように荒々しい音を立てていた。歩くよりも速く、しかし走らず怒りをその背に背負い、ロキは止められるのも聞かず廊下を進む。

彼がここにいることは間違ったことではない。神の一人であり主神の義兄弟である彼がこの宮殿に足を踏み入れることは許される行為だ。しかしこの日は違った。突然の思いも寄らない彼の来訪に宮殿の使用人達は慌て、入られては困るが止めることができない有様だった。ロキはそんな使用人達に目も向けず、ただ一つの目的地へ進んでいた。

ドン！

重厚な扉が一気に音を立てて開かれた。

中にいた者達は突然の来訪者に驚き、ただ一人だけがその中で平静を保っていた。そんな彼らなど眼中にも留めず、ロキは部屋の中へと向かう。

人がゆうに数十人入れるほど広いその部屋で、神々に囲まれているのは黒い獣だった。鎖に繋がれた獣は彼の姿を見つけると、それまでの興奮を消し去り、しかし申し訳なさそうな瞳をした。

ロキはそんな獣を優しく撫で、その呪縛である鎖を引きちぎろうとした。しかし鎖は細く脆そうに見えるにも拘わらず、まったくちぎれる気配を見せない。ロキはすぐにこの鎖がただの鎖ではないことに気づいた。そしてこの場でそれを何とかすることもできないのもわかった。

「どういうつもりだ」

今まで獣の方しか見なかった彼が、ようやく周囲へと声を掛けた。いや、正確にはこの場でただ一人平静を保つ、この宮殿の主にだ。

声を掛けられた人物はやはり落ち着いた調子で答えた。

「見ての通りだ。そなたの息子を捕縛した。他の子達もそれぞれ別の場所へと捨てた。その息子もこれからニヴルヘイムへ送るつもりだ」

「答えになっていない。俺はなぜこんな事をするのかと訊いたんだ」
ピリピリとした空気がその場に張り詰めていた。それを見守る神々は、その空気がいつ破裂しまいかとおびえていた。それでも彼だけは静かだった。

「貴方の息子が将来オーディン様を殺すとノルンが予言しました」
周囲にいた神の一人、ヘイムダルが代わりに答えた。

ノルンとは人や神の運命を司る三人の女神である。長女ウルズは過去と運命を、次女ヴェルザンディーは現在と必然を、そして三女

スクルドは未来と存在を司る。

彼女たちの予言は絶対であり、それは神に対しても同様である。

「だからといって父親である俺に何も言わずにか？ 主神ともあるものが殺されるのが恐くて礼儀を守る暇もないくらい動揺しているのか」

それでも彼は黙って義兄弟の辛辣な言葉を聞いていた。また代わりにヘイムダルが言った。

「言ったところで貴方がおとなしく息子を渡すわけないでしょう。それよりもロキ、貴方が巨人族と繋がりにあることに問題があるのです」

確かにヘイムダルの言うとおりだ。神ともあろう者が、巨人族との間に子供をもうけるなどあってはならないことだ。神々への裏切り行為だ。

だからこそロキは今まで彼女との関係を誰にも明かさなかった。言えば子供達は捕縛され、彼女もどうなるかわからないからだ。しかし彼が明かさないうちに事はいつの間にか進んでしまっていた。

「貴方にも何らかの罰が必要です。それともこの場で息子を殺すことができますか？」

できるはずがなかった。そんなこと自分が死ぬよりも辛い。

何も言い返せなくなったロキをたたみかけようとするヘイムダルを止める者がいた。

「ヘイムダル、そのへんにしておけ」

主にそう言われればどうしようもない。ヘイムダルはおとなしく引き下がった。

ようやくロキとの対話を始めるこの人物こそ、アース神を統括する主神・オーデインである。

「我が義兄弟、そなたの子らを黙って連れ去ったこと、またそなたと関係を持つ巨人族の女を傷つけたことはわびよう。しかし私がそなたの息子に殺されるのを避けるのも、またそなたの息子に神殺しの罪を背負わさずに済むのもこの方法しかなかった」

「結局死ぬのが怖い。それが運命ならそれに身を任せるのがお前達神のやり方じゃなかったのか？」

運命にあらがうのは川の流れに逆らうようなもの。あらがえばそれだけその身は傷つき、先へすら進まなくなる。ならば自分が上流でせき止める岩となろう。汚れた水を濾過するように流れてくる石や流木は自分がその身で受け止めよう。そして川下にいる仲間達に穏やかな流れを与えよう。

そう言っていたのはお前だろう。ならばここで死という名の流木を身に受けるのは当然ではないか。その流木を胸に刺し、それでもなお不幸をせき止める岩となればいい。俺はそれを岸から眺め、気が向いたときにお前のために花を添えよう。そうあの時言ったはずだ。

しかしお前はもうそんな花では満足できないのか。川下で他の者と同様幸せの海に浸かりたいのか。そのために俺や俺の子供達を代わりの岩とするつもりなのか。

しかしそんな叫びの前で、あの時と変わらない姿で義兄弟は言った。

「予言とは未来のためにあるものだ。より良い未来を手にするため今を動かす。私が死んでは巨人族が好機とばかりにこの地へ攻め入り、世界は破滅へと向かうだろう」

「そんな大義名分が通じると思っているのか」

「そなたには通じまい。しかしこれは神々全ての同意の下に行われたことだ」

そう言われればロキは黙るしかない。生まれはどうであれ、今彼はアース神の一人である。ロキは決して他人の都合のために自分の意志を曲げたりはしない男だが、今ここで神々すべてを敵に回すのが得策ではないこともわかる頭の優れた者でもあった。もしここで自分がこれ以上神々に敵意を抱かせれば、自分だけではなく子供達の命もないだろう。彼の力が強大なものであっても、自分一人で神々に勝てるはずもない。結局ここは彼に従うしかないのだ。

握りしめられた拳がぶるぶる震え、掌に刺さった爪が皮膚を突き破り血が流れていた。「そなたが巨人族と関係を持っていたことは罪に問うまい。すでに子と引き離されたそなたに罰は必要なかう」そう言ってオーデインは義兄弟の脇をすり抜け、部屋を出て行った。他の神々もどこか不満げではあったが、しかしそれに黙って従い部屋を出た。

息子と二人部屋に残されたロキは、心配する息子の顔すら見ることができず、怒りと憎しみ、そして自分の無力さを呪う気持ちで心がいっぱいだった。

そんな彼の後ろに彼女が立ったのはどれだけの時間が経ってからだっただろうか。もしかしたらほとんど時間など経っていなかったのかもしれない。しかしロキにはそんなことを考える心の隙間さえなかった。

彼を労るように近づいた彼女の顔を見たとき、ロキは悟った。この事態の立役者の正体に。

今までロキと巨人族の關係に気付く者はいなかった。スパイではないかと当初は疑われもしたが、それでも巨人族との間に子供を設けていることは誰も知るはずはなかった。ならばなぜこのような事態となったのか。

ロキの度重なるウトガルドへの遠出、真に愛する女性の存在、その彼女との間にできた愛しい子供達。その存在に気付きえる者がただ一人いる。長年彼に付き添い、彼の行き先も言わぬ旅の出発を見送ってきた一人の女性。夫婦という名の關係にある者。彼女なら気付いてもおかしくはない。

そして同時に気付くのは彼女の中にあり彼にはない想い。それは愛、そして嫉妬。ロキには他人の心を読むような力はないが、そんなものなくとも彼を見る彼女の顔がすべてを物語っていた。

そんな彼女を見たロキの中に生まれたのは憎悪、そして何ものにも勝る哀れみ。

それは彼が神々に捕らえられ、鎖に繋がれた彼を世話する間も変

わらぬもの。

二人の絆は『夫婦』というものの以外に確かに強い鎖で縛られた。愛と憎悪の鎖。

それが今、断ち切れようとしていた。

「以上だ。つまらない話だろう」

今、大杉悠斗が語り終える。しかし誰も口を開かない。

ようはそういうことだ。夫の愛人に嫉妬した妻がその愛人を陥れるために神々に密告した。ただそれだけだ。人の間にも行われるつまらない愛憎模様。ようはそれだけの話だ。今時フィクションでもノンフィクションでも語り尽くされた題材。

しかしこの二人にとってはそれだけのことで済まなかった。こうして殺し合いに発展するまでの愛憎。

だが悠斗の心は冷めていた。かつて心を支配した憎しみは姿を消し、残ったのは哀れみ。

悠斗は自分の足下でうなだれているかつての妻に言った。

「シギユン、俺はなぜお前が俺を愛したのかすらわからない。そして今お前に憎しみすらない」

それまでうつむいていたシギユンが、初めて顔を上げた。それは驚いているような顔で。

「どうして？ 私はあなたの愛する女を殺したのに」

「ならば俺も訊こう。なぜ彼女を殺した？ 彼女がいなくなったところで俺がお前を愛するわけないだろ」

それはこの長い年月、考えてきたこと。その答えがようやく出される。

「わかっていたわ。あの女がいなくなったところであなたは私を愛してはくれない。それでも私はあなたと繋がっていたかった。形だけではなく、特別なつながりを持っていたかった。あなたのそばに

いるのが私でありたかった」

そのためなら憎まれても構わない。殺されても、殺してもかまわない。彼の隣に立つのは自分でありたい。常に自分のことを思っていてほしい。たとえそれが憎しみであってもかまわない。

ロキには、悠斗には理解できない感情だった。決して報われない想いを抱くことの無意味さ、そして自分を愛した故の哀れみ。今更彼女が自分を愛した理由など知る気もない。ただ愛した故の結末。それ以上を欲してしまったが故の破滅。

ならば、今こそこの愛憎劇に閉幕の鐘を鳴らす時。

「シギユン」

ただ一言、悠斗は妻の名を呼んだ。おそらくこれが最後となることを知っていて。

「お前が俺にとって忠実な妻であったこと、そして俺が捕縛された時俺のそばにあり続けたこと、それには感謝している。たとえそれすらもお前の意図したことだとしてもだ」

悠斗は知っていた。彼が捕縛された時、それを止めようとしなかったのは彼のそばにあり続けるという願いを叶えるためだと。そのために何も知らない息子が殺されるのも承知していたことも。ただ夫のそばにあり続けるという願いのために彼女がどれだけの犠牲を払ったかなどわかりはしない。それでもこれ以上彼女を責めることはしない。

「シギユン、俺がお前を愛することはない。そして罰もしない。強いて言うならこれが俺の罰だ。俺はもうお前に何の感情も持たない。お前の願いが叶うことは永久にない」

呆然とする妻であった女の横を通り過ぎ、屋上を後にする悠斗。彼はただ一言、妻であった女にすべての終わりを告げる。

「さらばシギユン。我が忠実な妻よ」

最後に過去形で言わなかったのは彼女への最初で最後の配慮かもしれない。

階段を下りていく悠斗に続き実達もその場を後にする。後ろから

聞こえたのがシギユンの鳴き声なのか、それとも風の音だったのかはわからない。

こうして愛憎劇は幕を下ろす。拍手も歓声もない劇は静かに終わりを告げた……。

「どうしたの、お父様？」

家に帰った悠斗はほとんど口を開かなかった。そんな父を心配し、娘が近寄る。

「何でもないよ」

ヘルにはシギユンのことを話さなかった。今更母の死の真相など知らせたところで彼女の心を傷つけるだけだ。

心配する娘の頭を優しくなでる。その髪には今日学園祭で買ってきた手製の髪飾りがあった。

「それよりもお茶が飲みたいな。入れてくれるか？」

そう悠斗が言うとヘルはまかせてと台所に姿を消した。

ヘルが台所に向かうのを見送ると、悠斗は彼の向かい側のソファに座る息子に向かい合った。

「不満か、フェンリル」

「父上が決めたことなら従います。しかしなぜあの女を殺さなかったのですか？」

自分たちを引き離し、母の死ぬ原因を作った女。母は神々に連れ去られそうになった自分たちを助けようとし傷つけられ、その傷が元で亡くなった。本来なら決して許されざる存在だ。なのに父は殺さなかった。

「俺も不思議だな。なぜ殺さなかったのか」

ふむとあごに手を添え、悠斗は言った。

「人は時間が経てば変わるものだというが、俺も変わったのか」

神であった頃には考えもつかないことだ。もし自分たちが最初か

ら人であつたのなら、あのような形で分かれたることはなかったかもしれないと、悠斗はもう二度と会わぬであろう妻と、何千年経とうとも忘れることはない義兄弟を思った。しかし所詮は夢物語。自分がこのようなことを考えることもおかしい。

ただ今はしばし昔の夢を見よう。二度と見ることはないであろう夢を心に刻みつける。狼と化したナルヴィが悲しみの咆哮を響かせたあの日から、二人で見た世界の終わりまでの日々を。

第15話 愛なき世界より愛を込めて（後書き）

第3章【舞台の上で子供じみた愛憎劇を演じる】終了です。
ようやくこの話を書けたかと自分に感心しています。

第16話 カミサマの退屈処方

「やあ、こんにちは」

そう彼は笑顔で言った。

彼に向かい合って座る悠斗はいつもと変わらず何事もないかのよう
に珈琲を飲んでいる。邪神の長男はその後ろでやはり無表情のま
ま立っており、妹はその後ろに隠れるようにして顔だけを覗かせて
いる。次男に至っては部屋にすら入らずリビングの扉から様子を窺
っている。

その光景を見回し、実は固まり始はため息を吐いた。笑顔で迎え
るその客人が、普通の人間であるはずがない。人間離れた美貌と
日本人にはありえない髪や目の色。そしてその顔は以前に会った誰
かに似ている。

何よりこの家に普通の人間がやって来るはずもない。

なぜこんな状況となっているのか、誰も説明しないだろうが、話
は二時間ほど前に戻る。

学園祭が終わると学校はその後に待ち受けるテストを前にうなだ
れる顔を上げることはできない。楽しかった祭やその準備が夢に現
れてはシャボン玉のようにはじけて消えた。これでテンションの高
い人間がいたら見てみたい。とにかく、祭の後には燃えかすが残る
だけだ。

しかしそんな気分を味わっているのは学生だけで、それ以外の人
間にとってはいつも通りの日常が目の前に存在する。大杉悠斗にと
っての日常とは他人から見ればうらやましい限りで、いわば食って
は寝、食っては寝を繰り返す日々だ。もちろん彼には常に命の危険

にさらされているという事情もあるわけだが、そんなこと、一般人には関係ない。最も悠斗から言わせれば戸籍上死んでいる人間がどうやって学校や働きに行けるのだということだ。そういえば神様のお仕事って何だ。

一般人から見れば常と変わらない日常。悠斗にとっては緊張感が解けたつかの間の休息期間だ。先日の事件が嘘のような平和だ。

一般人から見ればうらやましい限りだが、悠斗にとっては退屈な時間ではない。昔から退屈を嫌っていた。昔の自分からすれば数日なんて一瞬のことに感じられた。とにかく神という者があまり余るほど持っているものが時間だ。時の呪縛にほとんど囚われない彼らは、その余った時間に何をしていたのか。悠斗からすれば不毛な時間消費にしか見えなかった。もちろん彼らは自分の役目を果たし、人間界を始めとする世界の統治や、巨人族との戦いを使命として行っていた。

しかし悠斗にとって時間の使い方はいかに退屈しないかだ。他人が慌てふためく姿は何度見ても飽きないものだ。時にそれが自分の身の危険に繋がることもあったが、遊びに危険はつきものだ。またそのスリルを味わうのも悪くない。他人も自分自身さえも、彼にとっては遊びの駒だ。そもそも神となったのだって退屈だったからだ。巨人族の中で過ごした退屈な時間。既に考えられる退屈しのぎはほとんど飽きた。強大な力も権力も彼の退屈を紛らわすことはない。そんなときに見つけた新しい遊び。こいつと一緒になら退屈しないと思った。だから神になった。

きっと退屈を感じていたのは自分だけではないのだろう。今、目の前にいる男もそうだ。

「しかし人間界は楽しいね。僕たちの百分の一も生きないのにこんなに娯楽を開発できるなんてすごいね」

「時間の感じ方が違うからだろ。人間からすれば数十年は充分長い」
する必要もない説明をするのは退屈だからだろう。

「いろんな所に行ったよ。ここ日本はもちろん、アメリカ、中国、

フランス、イギリス、イタリア、インド、ロシア、ブラジル――」

「お前の観光記録を聞くために会ってるわけではないんだがな」

もつとも、よっぽど暇だから話を聞いているのだが。暇でなければとつくに帰っているところだ。

しかし相手は聞いてやいない。

「だけどやっぱり日本が一番楽しいね。ご飯はおいしいし。東京タワーにもものぼったし、大阪でたこ焼きやお好み焼きも食べた。沖縄のひめゆりの塔や北海道のキタキツネ牧場にも行った。UFJやデイズニールランドにも遊びに行った。でもやっぱり本場の方が良かったなあ。お決まりの奈良・京都は見るものが多くて一日では見きれないね。金閣寺や清水寺はもちろん、東大寺はすばらしかったね。あと新撰組や義経ゆかりの場所も廻ったよ。明石海峡大橋から渦を見たり、神戸の中華街も行った。

他にもカラオケや遊園地、動物園、テーマパークにもいろいろ行った。京都の漫画ミュージアムにも行った。それに圧巻だったのは秋葉原だね。メイドや執事が迎えてくれる喫茶店があってね」

「いい加減にしないとそのよくしゃべる舌を抜いて犬のえさにするぞ」

ピタリとおしゃべりが止まった。

「これが世を統べる神の一人だなんて誰も想像しないだろうな」

これ呼ばわれた男は止まった口をもう一度動かし始めた。

「君だって元はそうだろう。それにせつかくの人間界を満喫しなければ来た意味がないじゃないか」

「お前は秋葉原に行きたいがために人間界に来たのか？」

「それもある」

それもあるのか……。

「だけど今特別忙しくもないんだよ。オーデイン様は何も命令しないで君のこともほったらかしだ」

「…オーデインが？」

悠斗はこの日初めて男の話に真剣さを感じた。

「そう、先日ツールや僕の妹も、君の奥方だって自分の意志で君の所に行ったんだ。そしてそれをとがめることも何もしないんだ。ヘイムダルあたりが君に報復なりするべきだと言ってるがそれにも答えない。何を考えておられるのかさっぱりわからないよ」

それは悠斗自身も驚いた。確かに今までに來た神々は皆ロキに何らかの私情が交じった念を抱いていた。しかし妻はともかく、先の二人まで命令を受けてやってきたのではないということに驚きを隠せなかった。

なぜ、彼は自分を罰そうとしない？

悠斗の脳裏に初めて彼と出会った日の光景が横切った。

『おもしろいな、お前。神とはこうも強欲なものか』

『そなたは何を欲する？ 名も知らぬ巨人族よ』

『お前は力、俺は退屈を紛らわす為の娯楽。欲するものは違えど利害は一致している』『そなたの名は？』

『俺は——』

ユグドラシルの樹の下で行われた邂逅。自分の眼を対価に、そして死の淵に立ってまで力と知識を得た彼を、滑稽と思いつながらも声をかけずにはいられなかった。

彼の傍にいればこの退屈な時間を終わりにしてくれるのではないかと直感した。今思えばそれが正しかったのかはわからない。後悔しているのかと訊かれたら、しているのかもしれないと答えるだろう。

う。彼に会わなければ彼女を失うことはなかった。神に命を狙われる日々もなかったかもしれない。しかしあの出会いはい偶然だったとも思えない。必然だったと今も昔も思えるのだ。

それがたとえ何かの意志であったとしても、その頃はかまわないと思えただろう。

何かの――

《――忘れろ――》

「そう、先日のツールや僕の妹も、君の奥方だって自分の意志で君の所に行ったんだ。そしてそれをとがめることも何もしないんだ。ヘイムダルあたりが君に報復なりするべきだと言ってるがそれにも答えない。何を考えておられるのかさっぱりわからないよ」

「それでお前は暇をもてあまして観光か？」

一部に観光ではないものも混ざっているが。

「まあ、せっかくできた時間は有意義に使わなくてはね」

メイド喫茶で過ごす時間が有意義なのかは知らないが、とりあえず暇つぶしをすることには同感する悠斗だった。

かなり本心は嫌がってるが。

「ところで」

話を変える。

「今日、君のお宅にお邪魔してもいいかな？ 話したいことがあるんだ。君だけでなく、君のご家族にも」

以上、回想終わり。

「それで、いったい何のようだ？」

始はこの神が嫌いらしい。というより北欧神全体に良い印象を持つていない。当然と言えば当然であるが。

「やだなあ、まずは挨拶でしょう。君たちと会うのは初めてなんだし」

「あんたの名前はだいたい想像がつくし、俺達の名前を教える義務も必要性もない」

かなり辛辣な言い方だ。

「僕はフレイ。この間君たちが会ったフレイヤの兄。豊饒を司る神です。妹がいろいろご迷惑をおかけして申し訳ない」

やはり他人の話など聞いちゃいない。

「……他人の都合を考えないところは妹そっくりですね」

「ああ、妹は美人だったろう？ 妹に似ているのなら僕も美人というのかな」

毒舌も効いてやいない。

「それを言うなら妹に似ているのではなくて、妹が似ていると言うべきではないのか？」 悠斗のつつこみどころもおかしい。

「やだなあ、双子なんだからどっちでもいいんだよ」

もう帰りたい、心底そう思った始達だった。

「それで話とは何だ？」

悠斗がようやく本題を口に出す。というか話してさっさと帰れと言っている。

「ああ、そうだった。実は妹が迷惑をかけたお詫びがしたくてね」

「あの女の首を差し出してくれるのか？」

それ以外では許さないという意味だろうか。

「さすがにそれは無理だよ。お詫びはこれ」

そう言ってフレイが差し出したのは旅行券と観光ガイドブック。

差し出す物もどこか妹に似ている。だからそこから嫌な感じがするのは仕方がないことだ。

「これは……？」

「旅行券」

それは見たらわかる。

「知る人ぞ知る秘境。温泉にご招待」

なぜ温泉？　　というかカミサマってどうやって金を手に入れているんだ？

様々なつつこみが一同の中に飛び出したが、実際につつこむ者はいなかった。しても無駄だとわかっているからだ。

「そういうわけで出発は明後日。連休だしちょうどいいだろ？　足は用意してあるし、費用もすべてこちら持ちだから心配なくて良いよ」

すでに決定事項か。

「というわけで、ぶらり温泉ツアーへレッツゴー！」

どこで日本文化を覚えてきたんだこの男は。

そしてやはりそれをつつこむ者はいない。

とりあえず一同はぶらり温泉ツアーへ。ただし殺人事件も恋愛ドラマも起こらない。

第16話 カミサマの退屈処方（後書き）

しばらくシリアス続きだったのに対し、しばらくはのんびりとした雰囲気で行きたいと思います。

またこれが終わったらシリアス続きとなるでしょうが。

第四章 【短き平穩に身をゆだね】
開始です。

章末座談会 1

実「何、この座談会って」

悠斗「作中がシリアスだから少しコメディ感を出そうと作者が出した企画」

始「それにしても何でこのタイミングなんだ？」

フェンリル「作者が思いついたのが十六話を書いた後だったからですよ」

始「いいかげんな…」

フ「この話自体、作者の気分で書かれているのだからかまわないのでは？」

悠「とりあえず、作者が飽きない限りは続くだろ」

始「そういえば桜とお前のところの娘と次男はどうした」

悠「ヘルは病欠、オルムはそこらへん。桜は委員会」

実「それで何をすればいいの？」

悠「適当に作中の愚痴を話しとけばいいんじゃないか？」

題目 1 さらば、未登場人物達よ

フ「とりあえず今まで座談会ができなかった分もまとめてとのことですよ」

実「と言われても…」

始「いいかげんだな」

悠「作者がいいかげんなんだろ。それより適当に話して、適当に切り上げたらいい」

実「ここにもいいかげんというか、やる気がないのが」

始「作者からネタが届いてる。執筆秘話らしい」

悠「興味ないね」

始「なくても言わなきゃ始まらないだろ。まず、前回の第3章についてだが、他にも数人新しい登場人物が出るはずだったらしい」

実「そんな人いるんだ」

始「物語の進行上、出番が無くなってしまったらしい」

悠「単純に作者が面倒くさくなっただけじゃないのか？」

フ「ありえますね。何しろいいかげんですから」

始「いいかげんな作者は置いておいて、桜の友人の女子高生が一人と、ロキとシギユンの息子二人が登場する予定だったらしい」

フ「ほう、残念でしたね。出てきたら是非挨拶したいと思っていますしたのに」

部屋の気温が三度ほど下がった気がした。

悠「まあ、出ても出なくてもどっちでもいいような奴らだな。登場の機会はなさそうだ。哀れだな」

実「哀れなんて思っていないくせに……」

悠「何か言ったか？」

実「ううん、なんでもない」

始「まあ、確かにこの後登場する機会はなさそうだ。かわいそうだが登場はあきらめてもらおう」

題目2 親ばか父とファザコンの子供達

悠「何だ、このふざけた題目は」

実「ふざけてるも何も……」

始「事実だしな」

フ「ファザコンは否定しませんがね」

実・始「……………」

フ「？」

実「まあ、とりあえず、昔から家族仲が良かったの？」

悠「そうだな、基本的に大きな喧嘩もしたことがないしな」

始「息子の反抗期とかは？」

悠「ないね。フェンリルは俺に逆らう事なんてしたことがないし、オルムは甘えたがりだったから」

フ「本当にウザイくらいに父上や母上に甘えてましたからね」

悠「基本的な躰はほとんどフェンリルがやってたなあ」

始「父親もしろよ」

フ「かまいませんよ。父上の性格からしても期待してませんから」

悠「フェンリル……不満があるなら言っていいいんだぞ？」

フ「ありませんよ。父上に不満なんて」

実「……悠斗がこういう性格になった原因の一端はこれかな？」

始「……かもな」

題目3 神様って何ができるの？

悠「また意味のわからん題目を」

始「今まで見たのって破壊活動と人を欺くらかすやつぐらいだろ」

実「始兄さん……それはちょっと」

悠「失礼な奴だな。ルーンだ。それに欺すのは俺の専売特許だぞ」

始「そういえばそうだったな」

実「（それで良いのかな……）」

フ「ルーン魔法は刻む文字によって効果が違います」

悠「最近デザインとして使われることもあるから、それほど珍しいものではないな」

実「霊能力とか超能力とは違うの？」

悠「全然違う。そもそも霊能力や超能力が存在するかすらわからん」
始「そういうものなのか？」

悠「そういうものだ。魔法が存在するファンタジー小説に超能力や霊能力が必ずしもあるとは限らんだろ」

始「それもそうか」

実「じゃあ、幽霊とか見えないの？」

悠「？ 変なこと訊くな」

フ「死んだ人間は冥界に行くものですよ。だからそこらへんにいるわけではありません」

実「なーんだ。じゃあ幽霊はいないんだ」

悠「そうだな。ヘルの話では、たまにさまよう奴もいるそうだが」

実・始「！」

フ「でも見たことはありませんね」

悠「俺も。いるのなら見たい気もするけど」

実「良かった……じゃあ、ここに僕達四人以外はいないんだね」

悠「？ 何言ってるんだ？」

フ「さっきから五人でしょ」

実・始「!？」

フ「さっきからあなた方の足下に一人――」

二人の足下のテーブルクロスが揺れる。

実・始「ギャーーーーー!!!!」

実と始が走り去る。

悠「…何してるんだ、あいつら？」

フ「さあ？」

ミドガルズオルム「どうしたの？」

ミドガルズオルムがテーブルの下から出てくる。

フ「あなたも何でテーブルの下に入っているんですか」

ミ「だって狭くて暗いんだもん」

悠「相変わらず暗くて狭いところが好きだな…」

フ「蛇ですから」

ミ「ところでお父さん達何してたの？」

悠「どうでもいいことだよ」

フ「二人がいなくなってしまったので今日はお開きですね」
悠「帰りにヘルへのおみやげを買っていくか」

章末座談会1（後書き）

ただ気が向いたから書いた話です（笑）
次は第4章が終わってからです。

第17話 不安は湯気にかき消されて

白いワゴンカーが高速道路を走る。運転手は旅の発案者である豊饒神。同乗しているのは二十にも満たない未成年が七人。

それなりの広さをもつ車の中を占める割合は男女比率が六対二。人間・神・人外が四・二・三の割合となっている。

とりあえずこの車はレンタカーなのか自家用車なのかとか、運転免許をどうやって取ったのか、そもそも免許を持っているのかを問う者はいない。不毛だからだ。

とにかく神が二人と人間が四人、人外が三人で温泉へ向かっている。それだけわかればいい。わかる必要もない気がするが……。

元々発案者以外乗り気ではない旅だ。車内が最初から良好な雰囲気ではなかったのも当たり前。

しかし人間というものは適応力に優れているというか、単純というか、だんだん旅らしくなってくると、乗り気になってくるらしい。何しろ保護者同伴でない旅行は初めてだ。鬼の居ぬ間に、ではなく親の居ぬ間にしたいことはたくさんある。そもそも旅行など一年に一度行ければ良い方だ。なんだかんだ言っても、旅行は嬉しいものだ。しかも旅費は発案者持ち。楽しまなければ損というものだろう。

旅費が一体どこから出てきているかとは誰も突っ込まない。そこそ神の御技ということにしておく。

トラブルもなく、止まることを忘れたかのように車は走り続ける。正確な行き先は聞いていないが、秘境というのだから山奥かどこかなのだろう。

今朝、予告通り現れたフレイに押し込まれるように車に乗りそれから既に三時間。途中で休憩を挟み昼食をとる。

目的地にはまだ到着しない。

他の車を追い抜き、追い越される様子をぼんやりと眺めていた悠斗の所へ、始が後ろの座席から乗り出して来た。

「おい、あの男は信用できるのか？」

これは北欧神達の仕掛けた罠ではないかと、始は疑っていた。

何しろこの数ヶ月足らずの間に会った神々との三度の出会いは、どれも決して良い思い出にはならなかった。北欧神というだけで悠斗達の敵と言ってもかまわないくらい、彼らは暴力的で、敵意に満ちていた。

だから突然現れたこの陽気な男を信用できるかと言えば、できないと答える。

しかし悠斗の態度は意外にもものきなものだった。

「心配するな。こいつは元々神の使命だとかを重んじるタイプではないし、恨み言を延々と抱えるような陰険でもない。単純に現状を楽しむことだけを考えているだけだ」

第一この年中春のようなこの男に他人を騙し通すような演技ができるはずもないと、悠斗は言った。

それで良いのかと聞く始に、悠斗は良いんだと答える。

すると、よほど耳が良いのか、地獄耳なのか、運転席からフレイが会話に乗り出してきた。

「そんなに警戒しなくてもいいよ。ツール達はずいぶんと彼のことを憎んでるみたいだけど、僕はあんまり人を恨むようなことはしないし、だいたい僕が死んだのはほとんど自業自得だったしね」

フレイの死に様は北欧神話に語られているものとそう変わりはないと悠斗も言っていた。にしても仮にも神がこんなにお気楽でいいのかと疑問視するところだ。

フレイは今まで会った神々とはまったく違ったタイプで、悠斗を見るなり殺気を表した連中とはずいぶんな違いだ。

人間界に来たのもほとんど観光のためではないかと思うほどだ。そしてその予想はおそらく当たっているのだろうと口にせずとも思

っていた。

そんなフレイに警戒する必要もないと言わんばかりに、悠斗も気楽なものだ。この旅行も決して乗り気ではなかったが、本当に嫌なら相手を殺してでも拒否するだろう。それをしないのは、悠斗なりの理由があるのかもしれない。

「ほらほら、せっかくの旅行なんだから深く考え込まない。もっと気楽に楽しいことだけ考えればいいよ。君達の言葉でもあるじゃないか。友は道連れ旅は情けって」

「……？」

その場にいた人間全員の頭の上にクエスチョンマークが出た。

「フレイ……それを言うなら旅は道連れ世は情けだ」

「あれ？ おかしいな」

微妙に間違っている。

「無駄に中途半端な知識を披露しようとするのがお前の欠点だ」
ついでに使い方も微妙に違う。

「まあ、気にしない気にしない。とにかく楽しめればいいのさ」

誰か、この男の口を縫い止めてはくれないだろうか。

とにかく車は行く。まだ見ぬ温泉へ。

目的地に到着したのは一同が出発してから五時間ほど経った頃だ。コンビニすら見あたらない田舎景色、そのさらに山の中に温泉はあった。

このような秘境に来る人間は少ないのか、悠斗達以外に客は見えなかった。フレイの話だと、ここはそれなりに歴史ある民家を民宿にしたのもで、建物自体も既に百年以上前に建てられたものらしい。泊まれる客の数も限られており、完全予約制の宿だということだ。

元々はそれなりの資産家が別荘として買い取ったものらしく、温泉もその時掘られたそうだ。

「まあまあ、こんな遠いところまでよく来て下さりました。どうぞゆっくりしていただくさいね」

宿を経営する老夫婦に暖かく迎えられ、一同はそれぞれの部屋に入った。

民家を元に行っているだけあって、宿全体が旅館と言うよりも田舎の家に泊まりに来たような雰囲気満ちている。

都会ではなかなか味わうことができない雰囲気に、長旅の疲れを癒された。

「あゝ気持ちいい。来て良かった」

畳の上をゴロゴロと寝転がりながら、実は満足そうに言った。

窓の外には日本らしさを表す庭が広がり、夕日と共にねぐらへ帰る鳥たちの鳴き声が聞こえる。

「まあ、確かに良い宿ではあるな」

荷物の整理をしながら始も同意した。

二人とフレイがいる部屋の隣では襖をはさんで悠斗とその息子フエンリル、ミドガルズオルムがいた。まあ、部屋割りに文句は言えない。一つの部屋に三人寝るのがやつとだ。そしてフエンリルはやたら父以外の北欧神を嫌っている。

ちなみに壁をはさんだ隣の部屋には桜とヘルがいる。父や兄達と別れることに不満を表していたヘルだったが、寝るとき以外は一緒にいたらいいと父に説得され、現在に至っている。

今は皆、荷物を整理して各々くつろいでいるところだ。

「じゃあ、せっかくだし温泉に入ってくるか」

荷物を整理し終えた始は、浴衣とタオルを実に手渡す。

「うん。悠斗達は？」

「入らなきゃ何しに来たことになるんだ？」

温泉に来て温泉に入らなければ意味がない。

「悠斗ー。温泉に行こう！」

襖越しに声を掛けるが、向こう側からは誰の返事もない。それどころか人の気配すらない。

「…あれ？」

「あちらの三人ならとつくの昔に部屋を出たよ」

自身の浴衣とタオル——始は用意してくれなかった——を手に抱え、そう言い残してフレイもさっさと部屋を出て行った。

「いつのまに…」

道理で静かだと思った。先に温泉へ向かったのだろうか？

結局三人で温泉に向かう。

小さい旅館でありながら、ここには二つの温泉がある。一つは数人が入れる露天風呂——といっても四・五人が入れる程度のもの。もう一つは一人か二人が入れるくらいの大きさの屋内小浴場。何でもここを別荘として使っていた資産家の妻が、二つの風呂を使い分けて入っていたらしい。

悠斗の気に入ったところはそこで、娘のことを考えると他人と一緒に入れるわけにはいかなかった。しかしせっかく来たのだから温泉を味わってもらいたい。そんな中、今回の温泉は都合が良かったのだ。

屋内小浴場をヘルに使わせ、悠斗達は露天風呂に向かう。もちろん実達は放っておいてだ。

屋外に設置された露天風呂は雨の日でも入れるように屋根が設置されている。

風呂にゆっくりと入る習慣を持つのは日本人くらいだというが、そう悪くないと悠斗は思っている。

今にも泳ぎそうなところを兄にたしなめられ大人しくしている次男と、それを見張る長男。家族みんなで旅行なんて神だった頃には考えられない光景だ。

神は一々旅行なんて行かない。それにまだ彼女が生きていた頃は、彼らを神々の目の届く場所には連れて行けなかった。そして家族が引き離された後は、彼らはそこから動くことさえできなくなった。

「たまには、こういうのも悪くないな」

神々から追われる立場となってからは、日常に緊張がついて回るようになった。どんなに余裕を見せていても、心のどこかが警戒していた。

だから、今回のような旅行は良い息抜きとなったかもしれない。感謝するつもりはないが、まあそれなりの礼をあのかの豊穰神にしてやってもいいかもしれない。

「父上、良いのですか？」

温泉気分を味わっていた悠斗に、息子が訪ねた。

「何がだ？」

「あの兄弟のことです。無理矢理にでも離れた方が良かったのでは？」

「今更だ。たいしたデメリットにもならない」

「しかし、足手まといになる可能性があります」

この間のように、と不安げに見える長男に、悠斗は正面から向き合った。

「そう心配しなくてもいい。その時は俺が責任を取る」

「なぜそんなにあの人間達にこだわるのですか？ 父上らしくもない」

そう、以前の彼なら不利益になるものは切って捨てていた。家族以外に誰かを守ろうなどとしたことはなかった。この人間界に来てから変化しつつある父に、フェンリルは不安を覚えていた。

「フェンリル、お前が心配することではない。俺はそこまで弱い」

「ですが」

「フェンリル」

さらに言おうとする息子の言葉を悠斗は遮った。

「俺にもまだわからないことがある。わからないまま途中で放り投げては永遠にわからないままだ」

いまだに心に残る空白。それを埋めるものは見つからず、また存

在しないと考えている。しかし今あの頃にはなくて、今はある何かが空白の痛みを和らげている。それを何と呼ぶのかはわからない。

だが、それを決して煩わしいと思うことはなかった。

「もう少し待ってくれ。俺自身、まだ答えが出ていないんだ」

それしか言うことができなかった。そしてそう言われてしまえばこの忠実な息子は反論することはないということもわかっている。

ずるいと言われるかもしれない。だが、今はその忠誠心に甘えてしまっしかなかった。人間界に来てから自分が自分で思っていた以上に不器用で万能ではないことに気付かされた。

だから気付かなかったのだ。あの頃も、そして今も。迫り来る未来に待ち受ける悲劇に。

「わかりました……。父上がそう言うのなら」

思った通りフェンリルはそれ以上追求しなかった。

それは彼自身が気付いていない感情をさらに大きくするものだということに、二人は気付いていない。

そしてそれが引き起こすさらなる悲劇にも、この親子は気付いていない。

「あー！ やっぱりいた」

遅れてやってきた実達が、先に行ってしまった悠斗達に薄情だと文句を言う。ミドガルズオルムは兄の目を逃れ、いつの間にか温泉での水泳を楽しんでいる。

弟を叱る兄の声が降ったのはその後すぐ。

まだ彼らは安らぎの時間に浸っていた。

第18話 転がる玉は止まらず

温泉といえば卓球だ。

言い出したのは当然お気楽な豊穰神である。

個人が経営するような温泉に卓球設備があるとは思えなかったが、意外にもお気楽神と同じ考えの人間は多いようで、卓球もしっかりと用意されていた。

温泉を経営する老夫婦に風呂上がりの冷たい麦茶をもらい、一同は手にラケットを装備する。

もつとも、やる気があるのは一部だけで、邪神一家——次男を除く——と始はどうでもよさげ。悠斗に至っては面倒くさいの一言である。

「風呂で汗を流した後に運動するなんてバカか？」

「そこ、場を冷ますような一言は慎め」

盛り上がる実達には聞こえなかっただろうが、この遥かに年上の弟の協調性のなさはなんとかならないかと始はため息を吐く。北欧神達が嫌うのも何となくわかるというものだ。

一方のお子様組——お子様じゃないのも混ざっているが——はさつそく順番を決めるジャンケンを始める。二対二でやればいいのはと助言するが、まずは一対一でやるのが王道だと言われてしまう。そんな王道あったらどうか……。

根拠のない王道に基づいて、まずはジャンケンに勝った桜とミドガルズオルムが対戦を始める。

ところで——、

「お前の所の次男はルールを知っているんだろうな」

「おそらく————知らんな」

そう悠斗が答えると同時に卓球には似つかわしい派手な音が響い

た。オレンジ色の物体が部屋中をパチンコのように駆け巡り、試合をそばで見っていた実の頭に当たり、減速したところをフェンリルによって捕らえられた。

フェンリルの手の中にあっただのはオレンジ色のピンポン球だった。だいたいの状況を推測すると、ルールも知らないミドガルズオルムがラケットでピンポン球を思い切り叩く。球は部屋中を飛び回り、今現在フェンリルの手の中にある。以上。

そして球はミドガルズオルムの頭の上に返される。フェンリルの手に包まれたまま。

その後の効果音は説明するまでもない。

「お前は注意しなくて良いのか？」

「フェンリルが代わりにしているからいい。二倍も三倍も説教を食らうのはオルムが気の毒だろう」

どうやらこの父親は次男の教育を長男に任せているらしい。悠斗が言うには、自分が口を出す前に長男が教育的指導を行ってくれたらしい。なのでもう一任することにしたという。それでいいのかと始は内心想ったが、他人の家の教育方針に口出ししても仕方がないかと考え、結局口にはしなかった。

一時中断した卓球を再開する一同。つきあいが悪いと非難され、悠斗達も無理矢理参加させられることになる。ジャンケンで順番を決め治し、トーナメント式に試合を始める。

一回戦はルールを覚えたミドガルズオルムとフェンリル。あまりにも気の毒すぎて、周囲は同情の目で試合を見守る。

ミドガルズオルムは積年の恨みを晴らさんとはかりに意気込んでいるが、フェンリルはそれをあざ笑うかのような顔をしていた。

そして試合は始まる。本人以外の人間はほぼ間違いない訪れるであろう未来を予測していたが、あえて口には出さなかった。

結果は十数分後。

一時間も経てばトーナメントは決勝に辿り着いている。試合の場に立っているのは悠斗とフェンリル。親子対決となっている。

この二人、やり方がとにかくいやらしい。

一回戦のミドガルズオルムとフェンリルの試合。最初はミドガルズオルムが圧倒した。フェンリルはそこそこ動くが、ミドガルズオルムの素早さとパワーに圧倒されていた、ように見えた。これは観戦者達も驚き、このまま終わってしまうのかと思った。

しかしミドガルズオルムがあと一点入れれば終わるという時に、予想もしない反撃が始まる。一見本気にもなっていないような涼しい顔と動きでフェンリルは一点二点と点を確実に入れていく。最初は一点や二点入ったところで変わりはないと高をくくっていたミドガルズオルムだったが、三点四点と来たところで妙だと思う。先ほどから自分は一点も入れられていない。連続で五点六点と入れられようやくここで自分が遊ばれていたことに気付いた。

ふと対峙する兄の顔を見ると、馬鹿な弟をあざ笑うかのようなとても良い笑みを浮かべていた。ミドガルズオルムは今すぐにでも逃げ出したくなかったが、試合を放棄することはまず許されないだろう。結局半泣き状態で試合を続けることとなった。結果は言わずもがな、である。

未だに膝を抱えて落ち込んだ状態のミドガルズオルムは放っておくとして、一方の悠斗も嫌な試合をする。

一見やる気がなさそうで、適当に打ち返しているように見える。しかしその打ってくるところが取りにくい場所だったり、ネットに引っかけて落としたり、相手を右に左に揺さぶるなど、実に嫌なプレイをする。何度もコートの端に当てて明後日の方向に球を飛ばすのを見ていると、こいつ狙っているのか！？と誰もが驚愕した。

なるべく体力を使わず、相手の精神を削るという嫌々な戦法で悠斗は勝利する。

さて、トーナメントは決勝戦を迎える。賞品はなし、だったのだが。

「父上、試合を始める前に、お願いがあるのですが」

「お前がお願いとは珍しいな。何だ？」

「勝った方に賞品を付けていただきたい」

「ほう？ 欲しいものがあるのか。何だ？」

「それは試合に勝った場合に」

それではメリットもデメリットもわからないのではないかと誰もが思ったが、この父親はおもしろく思ったらしい。

「思えばお前と勝負というのも初めてだ。いいぞ、お前が勝ったら好きなものをやるよ。俺がやれるものならな」

「ものと言うよりも…いえ、それは勝ってからにしましょう。ところで父上が勝った場合はどうするのですか？」

「俺か？ そうだな、勝ってから考えるところか」

それでいいのかと誰もが思ったが、口にする者はいなかった。

「フェンリル兄様、いつもと違う」

それまでほとんど口を開かなかったヘルが一人つぶやいた。

「変って言うのは？」

始がそのつぶやきを聞き逃さず訪ねる。思えば彼女と会話するのは初めてかもしれない。しかしヘルは質問されたことに驚き、慌てて自分よりも小さな兄にすりつく。少し傷つく。

その兄もようやく気力を取り戻したらしい。妹に代わって質問に答えた。

「フェン兄はいつも父さんの意思を最優先にしてきた。必ず父さんを自分の上に持ってくる。だから、そんなフェン兄が父さんに勝つ気であることがすごく珍しい」

「そんなに？」

すぐそばにいた実や桜も会話に加わってきた。

「うん、初めてのことだと思う。いつものフェン兄ならわざと負けるか、最初から勝負しないかだよ」

この次男坊は兄や妹と違って人間との会話を嫌ってはいないらしい。

確かに普段のフェンリルとは違うことが、短期間しか付き合っていない始達にもわかった。何よりも父を第一とする彼にしては、今回の行動は奇妙だ。

「変化が訪れているんだよ。きっと誰よりも早く、そして明確に」突然口を挟んできたのはそれまで正面を見ていたフレイだった。

「変化は確実に起こっている。君たち人間にも、そして僕たち神々にも。ロキも昔とは違う。それは僕より君たちの方がよくわかってるんじゃないかな？」

そう言った視線の先には血の繋がる子ども達があった。血の繋がりよりも、さらに太い絆で繋がった彼らが気付かないはずがない。

「一人の変化は二人目三人目の変化をもたらす。小さな変化がやがて大きな変化へと発展していく。彼の場合それが見えやすかっただけじゃないかな」

そう言った彼の視線は、今まさに初めての勝負を始めようとしている親子、その息子の方へ向けられている。

「ただし、変化は良いものばかりではない。時に傷となりさらに裂ければ血が噴き出すだろう。変化に一番気付かなければならないのは本人だよ。そして自分の変化とは本人が一番わからないものだ」

その視線に込められている感情は何だろう。哀れみか、同情か。

「つまり、他人が言っても自分で気付かなければ意味がないということですか？」

律儀に丁寧語で訊く桜に、フレイは微笑みかける。

「君は頭が良いね。その通りだよ。気付くのは彼自身でなければならぬ。気付かなければその先へは進めない。自分がどうありたいかがわからなければ、変化は中途半端となるか、本人にとっても予想外の方向へ進んでしまうか」

その顔が今までになく深刻だったので、フェンリルの変化が悪い方向へ行ってしまうのではないかと不安になってしまう。

「まあ、その当たりは彼らの問題だろう。親子川いらずつて言うしね」

……？

「フレイさん、それは親子水入らずのことですか？」

「ああ、そうそうそれそれ」

微妙に間違ってるし、しかも使い方も違うし。

はあっとため息が数人分はき出された。

一方、試合を始める二人の表情はそれまでになく真剣だった。

「始めますよ、父上」

「ああ、いつでも良いぞ」

先鋒はフェンリル。

掌から球が浮かび、ラケットのゴム面がそれを叩く。球はコートを跳ね、悠斗へと向かう。悠斗は鋭い動きでそれを相手コートに返す。コートの端ギリギリを狙った良い球だ。しかしフェンリルはそれを予測したかのように回り込み叩きつける。

コートへと飛び出した球はなかなか止まらない。まるでプロの試合を見ているかのようなのだ。

一点を取るのに何分かかっているのだろう。何度も傷んだ球を変えた。それまでの試合で汗一つ流さなかった二人が全力疾走をしたかのように息を切らしている。

現在、悠斗があと一点まで迫っている。しかしフェンリルが一点入れば点差が開くまで試合は続く。

観客は息を呑んで試合を見守る。

球が再び宙に浮く。

ラケットが球を打つ音と球がコートを跳ねる音が数十回と続けられる。汗が飛び散り、髪が乱れる。しかし気を乱すことはない。

その時、悠斗の球がわずかに浮く。致命的なミスだ。フェンリル

がこのチャンス逃すわけもなく、球は容赦なく叩きつけられる。
これで決まったと誰もが思った。しかし球は吸い寄せられるかのように悠斗の持つラケットへ向かう。違う、悠斗がそれを予測していたのだ。

返されると思っていなかったフェンリルは焦り、返された球を今度は自分が浮かせてしまった。そして、再び鋭い球が繰り出される。球はラケットに触れず、そのまま壁に激突しコンコンと音を立てて転がった。

そして試合は終了した。

「俺の勝ちだな」

「…完敗です」

フェンリルは潔く負けを認めた。

「やはり父上にはかないませんか」

「勝ちが決定するまで気を緩めるな。こちらのチャンスが相手の罠であることだってあるんだから」

そう、あの時悠斗の打った球が浮いたのはミスではない。最初から罠だったのだ。相手の気を緩め、その隙を突く。フェンリルはまんまとその罠にはまったのだ。

「そういえば賞品だが…」

「はい、何にしましょう」

「…まあいいや、お前との勝負もおもしろかった。珍しいお前を見られただけでよしとしよう」

「それで良いのですか？」

「ああ、父親が息子にせびるなんてみっともないよ」

額に浮かぶ汗をヘルに渡された手ぬぐいでぬぐう。

「それよりも、俺はお前が欲しがってたものの方が気になるな」

「それは負けたからなしですよ」

「教えてくれるくらい良いじゃないか。別に勝たなくてもやれるものかもしれないのに」

「そこは私のプライドというものが許さないの」

「そうか：まあ、その通りだな」

そこに経営者の老人がやってきて、夕食の準備ができたことを告げてくれた。

皆がおながが減ったと言って部屋へと戻る。そんな中、悠斗はフェンリルに近づき言った。

「フェンリル、お前は俺の自慢の息子だが、何も完璧である必要はない」

「？」

「お前がたとえそれをみつともないと思っても、それがお前の真実だ。それを受け入れられない方がもったかつこうわるいことだ」

夕食に向かう一同に続くように部屋を出て行く悠斗が、最後に振り返り言った。

「もしお前がこの先自分ではどうしようもないことに陥ったなら、遠慮なく俺を頼って欲しい。あの時お前を救えなかった俺に八つ当たりしても良い。だから頼むから俺の手の届かないところへは行ってくれな」

「私はずっと父上と一緒にですよ」

フェンリルはそう返すが、悠斗は悲しそうに笑うだけだった。

二人が出ていった部屋に一つのピンポン球が残されている。球は突然風に揺らされたかのように転がり始め、壁にぶつかって止まった。そしてその瞬間、バチンと音を立ててはじけた。

その音は部屋を出て行った誰の耳にも届かなかった。球は無残にオレンジ色の破片を当たりに飛び散らせ、血もない骸をさらしていた。

——— 本当の始まりはこれからだ。

クスクスと笑い声が風と共に舞う。誰の耳にも届かない予告。そ

れは決して遠くない未来。
横たわる黒い獣。その傍らで、
彼は何を思うのだろうか。
それは神すらも知らず。

第19話　すべては運命

僕達は生まれたときから二人だった。

幼い頃から思っていた。一人ではなく二人で生まれたことにはきつと重要な意味があるのだと。

それは何か運命じみたものだと、特別なものなのだと思っていた。ただそれは特別でありたいという子供じみた虚栄心だったのだろうが。

それでも自分は生まれた時から一人ではなかった。だから死ぬまですっと一緒だと思った。いつも一緒でなくても、一番近いのはお互いなのだとかたくなに信じていた頃があった。

しかし事故をきっかけに変わっていった兄が、兄弟どころか他人よりも遠く感じた。距離はもはや測れないほど離れていた。

それでも、最後に傍にいるのは自分だと、成長した後も信じていた。

なぜそこまで信じるのかと問われた時があった。一卵性でもない、兄弟以上に似ていない兄に、そこまでこだわるのかと。

その時、僕は確かこう答えた。

一緒であることが当たり前なのだと。

記憶にも残らない、しかし確かに覚えている。初めて彼に会ったとき、僕の心が言った。

『やっ与会えたね』と――――。

正直こんな田舎で温泉以外に何を楽しめばいいと言うのだ。

コンビニすらない田舎の温泉宿でできることと言えばたかが知れている。観光地もなく、あるのは清らかな小川と秋の色に染まった山。黄金の稲に様々な色の果実を実らせる畑。

ああ、なんて素敵な自然美。などと感動するはずもない悠斗はとにかく暇だった。

元々こういった宿は休むことだけを目的としている。帰宅は明日なのであと丸一日は滞在するのだが、せっかくの時間を悠斗は部屋でごろつくことで消費していた。

他のメンツはというと、始とフェンリルは宿の主人が趣味で集めたという蔵書を読みふけり、若いガキどもは昨日の続きをと卓球場へ。フレイは朝から散歩に出ている。今部屋に残っているのは悠斗とヘルだけだ。

鳥のさえずりも虫の鳴き声も、本物の子守歌には適わない。

心地よい歌声が悠斗の心を癒す。彼女に似た彼女の歌。それは遠き過去を思い出させてくれる。安らかで、暖かったあの頃を。

悠斗の頭を膝に乗せ、ヘルは母から習った歌を歌う。それは風と共に流れていきそうなくらい自然で、春の太陽のように優しいものだ。

昔、幸せだと言えた頃、よくこうやって彼女の膝枕で眠った。彼女の歌はどんな子守歌よりも聞き心地が良くて、眠ってしまうのもったいないくらい美しかった。

サラサラと流れる黒髪も、花のような香りも、自分の頭を撫でる白い手の感触も、ふわりと微笑むその顔も、何一つ色あせることなく覚えている。

優しく撫でられるのが好きだったが、それを口にしたことはない。それでも彼女にはわかるのか、子供みたいねと笑っていた。子供扱いされることは不満であるはずなのに、撫でる手を止めたくなくて、文句も言わなかった。

その口から溢れるのはいつだって人を包み込む慈愛。他人を欺し、傷付けるばかりの自分とは正反対だった。

しかしそれを決して嫌うことも恐れることもしなかった。ただ子供っぽいところがあるのねと、それだけで済ましてしまう人だった。だから、彼女に何を言われても傷つくことはなかった。ただその声だけで癒された。

その存在だけですべてが救われた。

今はもう二度と会うことはない、愛しい人。

「父様、母様のことを考えてるの？」

「わかるか？」

「わかる。だって、娘だもの」

女の洞察力って侮れないなと本気で思う。それが大切な人のことならなおさらだ。

「たまにはこういう時間も必要だと思う」

「退屈は嫌いなんだ」

「知ってる。でも、休むことも必要だと思うの。母様も言ってたでしょ？ 三日働いたのなら一日休みなさい。息抜きは怠惰ではなく義務なんだって」

「お前はアイツの言ったことをよく覚えてるな」

「子供にとって親は導き手だもの。父様は本当に神だけど、人間の子供だって自分の親は神様なのよ」

「なら、神って存在も意外と手軽なものなのかな」

本当にそうならいいのにと本気で思った。

何一つ判らぬ世界で、ただ一つその存在だけが絶対だと信じられる。最初は親のマネをして、だんだんと世界を知っていく。子供はそうやって大人になっていく。

どんな虐待を受けても親を憎めない、捨てられることに怯える子供がいるというが、それはたとえどんな親であっても、その子供にとっての世界であるからだろう。その意味では、確かに親というのは『神』であるのだろう。

自分を救ってくれるかどうかは関係ない。ただ絶対の存在。

「私にとって父様と母様は『神様』、家族は世界。私のすべて」

「俺は、お前にそんなことを言ってもらうほど出来た存在じゃない」
外見なんてどうでもいい、その中身は一枚皮を捲れば醜悪で、汚らしい。この世で自分が一番醜いのだと思ってしまふほどに。

「どんなものでも構わないの。私にとって父様は大切な父様。父様が汚れた存在ならその父様から生まれた私達だって汚れてる」

「お前達は汚れてない」

「私達が汚れていないのならお父様だって汚れてないわ。それに私はお父様が汚れていても構わないの。だから、自分を墮とさないで」
たとえ汚れきった手であつても、また頭を撫でてね。抱きしめてね。

そう言われれば父はそれ以上何も言えるはずがなかった。

「あー疲れた！」

そう言つて部屋に入ってきたのは賑やかな次男坊だった。

「卓球をしていたんじゃないのか？」

「休憩！俺もゴロゴロする！」

「いらんところをマネしなくてよろしい。ヘル、お茶を入れてくれるか？茶菓子ももらったしお茶にしよう」

悠斗は起き上がり、着ている浴衣を整えた――ちなみに彼は昨晚から浴衣のままである。理由は楽だから。

ヘルはちゃぶ台に置いてある急須にポットからお湯を注ぐ。ミドガルズオルムは自主的に茶菓子を並べる。これは朝食後、宿の主人がくれた饅頭である。

穏やかな時間に穏やかな空気が漂う。

確かにたまにはこういうのも悪くないのかもしれない。子供達の笑顔を眺めながら、悠斗はぼんやりと思った。

こんな最低の自分から生まれた宝物達。受けいれてくれる暖かい人。お前たちを護るためなら、俺はどんなに汚れても構わない。

ただ願わくは、いつか終わりに行き着く場所が、彼らと同じである

ように。

視界を赤く染める紅葉、青い空、鳥の鳴き声。それを満喫しながらのお茶はいつもよりおいしく感じる。

悠斗達が家族水入らずでお茶を飲んでいた頃、実と桜も外のベンチに座りお茶を飲んでいた。傍らには宿の主人が気を利かせて持ってきてくれた煎餅がある。

「こうやってゆっくりするのも良いわね。家族旅行や修学旅行みたいに保護者の目がないし」

「観光地を巡る旅行も良いけど、こうやってのんびりするの也不错くないね」

彼は知らないだろうが、ちょうど悠斗も同じようなことを考えていた。まったく似ていない双子は、変に似ている。

「…一つ、訊きたいんだけど」

「何？」

「あんたは、どうして悠斗にこだわるの？」

桜の突然の問いかけに、実はなぜそんなことを訊かれているのか。いや、何のことを言っているのかわからなかった。

「昔からずっと思ってたの。あんたは基本的に誰とでも仲良くできるし愛想も良い。でも独占欲がなくて、嫉妬なんて感情はほとんどなかった。でも、あんたが唯一執着したのが悠斗だった」

桜が何を言っているのかわからない。桜は実の相づちも待たずに続ける。

「双子だからって仲良くする義務はないわ。仲の悪い兄弟だっている。あんたは誰かを悪く言うのは苦手だし、本気で他人を嫌うこともできなかった。だから気の合わない双子の兄にただ一人積極的に

接しているのもわかる」

でもね。桜はそこで一度言葉を句切った。

「今の悠斗は血のつながりはあっても本当の兄弟じゃない。それでも家族だと言って付き合うことを決めたのはあんた達だけど、あんたは始さんみたいに割り切ってない。まるで悠斗と一緒にいるのが当たり前のような氣でいる」

そう、桜がずっと抱えていた疑問。

実は昔から空気が読める子で、相手が自分を嫌っているとわかれればそれ以上無理に関わることはしなかった。だけど悠斗にだけは違った。

ロキとしての自覚が現れた悠斗は大杉家の人たちと仲良くしようとはしなかった。適当に付き合い、北欧神達が現れてからは完全に自分の周囲から排除しようとしていた。

それは敵意にも見えただろう。にも関わらず、実は悠斗への接触を積極的に続けた。一度は迷いもした。しかし再び元の形を取り戻した。

始は悠斗に対し、相手が望む以上の形で接することはなかった。その関係は兄弟というよりも、対等な大人の関係にも見える。割り切っているから口出ししない。ただ見届けるだけだ。

それに対し実の接し方はおかしい。異常と言っても過言ではない。他の誰でもなく、ただ悠斗だけにその執着心は向けられている。ドロドロとしたものではないからわかりにくい、付き合いの長い桜にはそれがわかった。

「実、私は家族じゃないし、あんたが言った二年間の悠斗を知らないから結局は他人事なのかも知れない。でも、あんたのやり方はおかしいと思う」

「おかしい？ どこが？」

本気でそう言っているのだと、そのどこに間違いがあるのかと、純粹に聞いてくるその目に、どこか寒気を覚えた。

「あんたは悠斗の正体が人間だろうがそうではなからうが構わない

のよ。あんたにとって重要なのはそれが悠斗であることだけ。あんたは誰とでも仲が良いけど、本当はどうでもいい相手なのよ。あんたにとって意味があるのは悠斗だけ。それに気付いてないつもり？」
実の答えを待たずに桜は続ける。いや、聞きたくなかったのかもしれない。聞くのが恐いのかもしれない。

「ねえ実。あんたはどうして両親でも始さんでも私でもなく、悠斗を選んだの？」

多くの選択肢がある中、なぜあの悠斗を選んだのか。

しばらくの間沈黙が続いた。

そして、一つのため息と共に沈黙は破られた。

「桜、僕も昔同じようなことを訊かれたことがあるよ。『何で悠斗にこだわるんだ』って」

「それで？」

「だから僕も答えたよ。『一緒にいるのが当たり前なんだ』って。最初から決まってるんだって。僕にはわかっていたんだ。僕は悠斗に会うために生まれてきたんだって」

「そんなの、誰が決めたのよ」

「さあ？ 神様って答えるのが適当かと思うけど、神様にだってわからないことはあるんだね」

彼らの傍にいる邪神は、その無知と無力さから大切な者を失った。世界を敵に廻した。

ベンチから立ち上がり、数歩歩いてから実は立ち止まった。

「もしかしたら」

風が木の葉を吹きあげる。木の葉は逃げるかのように空へと飛び出す。

桜の方を振り向いた実の目が、青く光ったように見えた。

「運命ってやつかもね」

桜は立ち上がることも、何かを言うこともできなかった。

恐かった。生まれて初めて味わう恐怖だった。実の顔は似ていないが、生きているのに、シギユンやフレイヤを前にした悠斗の顔に似てい

た。

冷や汗がたらりと頬を流れた。

「？ どうしたの、桜」

そう言った時にはいつのも実がそこにあった。

「実…あんだ、何？」

「？ 僕は僕だよ。さっきから変なことばかり訊くね」

そろそろ戻ろう、そう言って実は歩き出した。そこには先程までの空気は無かった。

「実…：あんだ、本当に誰よ」

桜の問いかけに答える者はいない。ただ、彼がこのままであることを願うしかなかった。

第19話 すべては運命（後書き）

長くなったので二つに分けました。
次で4章終わりですね。

第20話 鏡面の我が顔

外へ出たのは気まぐれだったとしか言いようがない。そこでまったく似ない弟にあったのは偶然でしかない。

少なくとも悠斗は運命というものを信じていない。というより拒否している。北欧神話には運命を司る女神達がいて、その助言が時に神々を動かすこともあった。

しかし悠斗は彼女たちが苦手だった。感情もなく、ただ義務的に運命を口にする彼女たちがまるで人形のように見えたのだ。

確かに神々は彼女たちが語る運命を重要視していた。だが悠斗はそれを受け入れることはできなかった。

何より彼はその運命のために血を分けた家族と離ればなれになったのだから。だから彼が運命を嫌うのも無理はない。しかしそれ以上どんなにあがいても変えることができない運命に嫌悪を示した。それは静かな波が巨大な津波となって押し寄せてくるかのように、決して逃れることはできないかのように、彼らを飲み込んでいった。だから運命というものは嫌いだ。悠斗はそう思っている。

そしてここで彼に会ったのは運命というたいそうなものではなく、ただの偶然だと言い切る。

「悠斗も散歩？」

「ただ外の空気が吸いたくなっただけだ」

愛想のカケラもない兄の言葉にまったく気にせず、実はとなりに並んだ。

一面に広がる田畑は美しいと思えるものなのかもしれないが、今の彼らには心に残ることでもない。悠斗は最初から風景を楽しむ感性がないし、実は悠斗と話すことの方が重要であるからである。と言っても、何か重要な話があるわけではない。ただ彼と話がしたか

っただけだ。

他愛もない話をして、悠斗はつまらなさそうな顔をするだけだった。話題が尽きかけた実は先ほど桜と話したことを思い出した。

「そういえばさっき桜が変なことを訊いてきたよ」

「ふーん、何て？」

悠斗はあまり意味のなく相づちを打つ。

「何で悠斗に拘るんだって」

実は何でもないように言ったが、悠斗にはそれが引っかかった。

「ずいぶん前にも訊かれた事があったけど。何でそんなこと訊くんだろう？」

「：それでお前は何て答えたんだ？」

桜と同様に訊いてくる悠斗は、実の気持ちを理解していない。何でと訊くのはおそらく至極まっとうな疑問だからだ。悠斗はそれまでうつとうしいとかよくやるなあと思わなかった弟の執着にここでようやく気付いた。頭の良い彼にしては遅すぎるくらいだが、それが彼にとって当たり前と化していたからだろう。それぐらい悠斗と実是一緒にいたのだ。そこに疑問を持たないほどに。

始のように憤慨するわけでもなく、ただ一緒にいるのが当たり前のように訴えるその姿は異常ととれなくなかった。しかしそれを考えるほど深い関係になるとあの頃は思っていなかった。そしてそのまま忘れてしまった。

だから悠斗がその異常にはつきりと意識したのはこれが初めてだった。

そして実は十数分前と同じ言葉を口に出す。

「『一緒にいるのが当たり前なんだ』って」

悠斗の身体を悪寒が走った。言葉にするのはたやすいそれが、どれだけ異常なのかを実は気付いていない。その二重の意味で悠斗は驚愕した。

人には運命がわからない。決して読めない文字のように、決して見えない本のように、運命は存在するにもかかわらず、人間達には

ほとんど無縁のような存在である。

それは人が運命を知らないから。知らなければ自分が運命に従っているのか、それとも従っていないのかわからない。だから人にとって運命とはあってもなくても変わらないものなのだ。

運命の相手なんて本当にいるのかすらわからない。ただの思いこみなのかもしれない。そしてそんなあるかすらわからない運命に流されていることにすら気付いていない。それが人間だ。

だが、今日の前にいる人間である弟はまるで運命を知っているかのように言う。そしてそれにまったく疑問を持たず口に出す彼の異常さは、悠斗自身がかつて感じたものだった。

それはかつてバルドルが死んだ時の、あの気分の悪さ。自分の身体が自分のものでないような、他人の目を通して見ているような、あの不愉快さ。そしてその異常。それによく似ていた。

決められた台本を押しつけられたような、そんな気分だった。そして今も、まるで台本を目の前で読まれているかのような気分だ。

「…実、お前……自分が何を言ってるのかわかっているのか？」

つまらない質問だというのはわかっている。しかしせずにはいられなかった。彼はなぜ運命を語るのか。ただの人間であるのに。

「？ わかっているに決まってるじゃない。何かおかしい？」

その表情はいつもと何も変わりはない。しかし悠斗はそのおかしさに気付いていた。いや、あまりにも遅く気付いたのかもしれない。

「俺は神でお前は人間だ。いつまで一緒にいられるかもわからない。本来なら二度と会わないはずの関係だ。普通の人間以上に俺たちの縁はもろい。なのになぜそんなことを言う」

「桜も悠斗も変なことを言うね。誰かと一緒にいるのがそんなに変なの？」

「夢見がちな人間が言う運命なら俺は否定する。だが、お前が言っているのはそんなことではないだろ。ただの人間が運命を語れるはずがない」

未来は予言されたとき、急速にその形へと向かうのだと未来を司るノルンが言っていた。だから運命は簡単に口に出してはいけないものなのだ。

預言書なんてあてにならない。神は予言の重要性を知っているからこそ人間に伝えたりはしない。それを形に残させたりはしない。「よくわからないけど僕は悠斗と一緒に生まれたのは運命か、特別なものだと思ってる」

「だから簡単に運命を口に出すな。それはお前達が思っている以上に重い」

「わかってるよ。でも僕は本当にそう思ってる。たとえ悠斗がどこへ行こうとも、何をしようとも、最後に一緒にいるのは僕だと思ってる」

「そんなセリフは好きな女に言ってやれ。俺に言っても仕方がないだろ」

「本当のことなんだからしょうがないじゃないか」

「どこもしょうがない。俺とお前が一緒に生まれたのはたまたまだ。偶然に過ぎない。俺の方がもう一度訊きたい。どうして俺にこだわる。お前には俺より絆の強い人間がいくらでもいるだろう。俺はそんなにお前と仲良くしていた記憶はないぞ。むしろひどいことをしたことだってある。なのになぜ俺にこだわる」

血の繋がった家族でもなく、幼い頃からの友人でもなく、愛した女性でもなく、もはや戸籍上も繋がりが無い双子の兄。なぜそんなにも執着するのかと。

すると実はやはり何でもないかのように言っただけだ。

「仲が良いからとか、血が繋がってるとか関係ないよ。僕は悠斗と一緒にいるんだよ。これからも」

「だからなぜ——」

「だって最初から決まっていたから」

「何が」

「会うことが。僕と悠斗は最初から出会うことが決まっていたんだよ」

「そんなこと誰が言った。それが運命だとも言うのか」

「運命と呼ばれるものならそう呼ぶよ。僕自身、それがなぜなのか、何のためにかすらわからないけど。でも初めて君に出会った時、僕の心が言っただ」

「何て」

「『やっと会えたね』って」

それはまるで本能のように、その思考に逆らわない、疑問に思わない。その異常さにすら気付かない。

悠斗は目の前にいる弟がわからなくなっていた。悪寒すら走った。今、目の前にいるのは誰か。

「お前……誰だ？」

人でも神でもない、これは――何者だ。

一陣の風が二人の間を通り抜けた。舞い上がる木の葉が悠斗の視界から実の姿を隠す。その先にある本当の姿を。まるでそれを隠そうとするかのように、木の葉は風に身をゆだね、二人を覆う。

視界を遮る木の葉の間に、悠斗は実の一部を見た。

いや、その一瞬に瞳に映ったのは実ではなかった。日本人にはない青い瞳、金色の髪。かつて自分が持っていた色。そしてその顔は――。

「おとーさん、何してるのー？」

開きかけた悠斗の口を止めたのは背後から声を掛けてきた彼の次男だった。

それと同時に風は止み、木の葉は地に落ちた。

「フェン兄がご飯の準備ができたから呼んできなさいって。お昼、かやくご飯だよ」

その場の緊迫した空気が洗われていく。まるで風と共に山の向こうへと消え去っていったかのように。

「そういえばもうお昼の時間だね。動いたからお腹が空いちやった」
そう言った実は既にいつもの彼だった。瞳も髪も黒い。それはそうだ、彼は生まれてからずっと黒眼黒髪だ。

きっとさっきのは見間違いだ。でなければあり得ない。あの青い眼に恐怖を覚えたなんて。誰かに恐怖を覚えるなんて今までなかった。きっと間違いだ。

「おや、そんなところで何をしているんだい？」

まるでタイミングを計らったかのようにフレイが帰ってきた。

「そろそろお昼じゃないかと思ってね。腹が減っては祭りはできないってね」

「祭りじゃなくて戦だよ」

「おや、そうだっけ？　ちびっ子は意外にも頭が良いようだね」

「チビじゃない！」

フレイとミドガルズオルムが言い合いながら屋内に戻っていく。

「悠斗、行こう」

実は当然のように言う。一緒に行くのが当たり前のように。

「ああ、今行く」

何か問題が片付いたわけではない。実の異常が変わったわけでもない。ただ、今は置いておいてもいいのではないかと思ったただけだ。それは後から考えれば逃げていただけなのかもしれない。それ以上を知ることが恐れたのか、知っていたから恐れたのか、それはわからないけど。

ただ取り返しの付かない後悔となっても、愚かなこの時の自分は何も出来ることはない。まだ運命はその時を迎えていなかったのだから。

後悔はいつも定められた運命の下に与えられた。たとえ何度繰り返そうともやり直しはつかない。それでも後悔せずにはいられない。ただ苦しみと嘆きが残された。

それでもこの時は忘れようとした。あの時見た似ていないはずの弟の顔を。

似ているとは言われたことがない双子の弟。その顔を。

まるで毎日見る鏡の中の自分だったと。決して認めはしない。

第20話 鏡面の我が顔（後書き）

第四章【短き平穩に身をゆだね】終了です。

次からいよいよ物語の核心へと迫ります。そのまま一気に最終章へと走っていききたいと思います。最後までお付き合いください。

章末座談会2

始「やっとな回目か」

フェンリル「あと何回も続くかわかりませんけどね」

悠斗「確かにこれ以降シリアスな展開になるんだからこんなことしてる暇なんてないだろうな」

実「大丈夫だよ、こういうのは本編に影響されないから」

悠「それでいいのか。くだらないことで時間つぶしているくらいなら本編を書けばいいのに」

始「まあそれは作者の都合だ。せっかく始めたんだから最後までやってもらわないとな」

題目？ 桜やヘルは誰とくつつく予定ですか？

悠「何だ、この意味のわからない題目は」

始「まあ、つまり、こういった長期連載ものでは主人公とヒロインが最終的に恋愛関係になるのが定番で、この作品でもそうなるのではないかと」

実「この小説女の子少ないしね」

フ「というより作者が女より男の方が書きやすいというのも理由の一つですね。あと登場人物のほとんどが北欧神話から来ているし、作者はなるべく原作を尊重したいので性転換のたぐいはしないそうです」

始「まあとりあえず本人に訊くのが一番じゃないか？」

悠「さっきオルムが呼びに行った」

実「仕事早！」

始「とりあえず来るのを待つか」

五分後

桜「それで呼ばれたってわけ？」

実「まあそういうこと」

桜「前回出られなかったから今回もなしかと思ったわよ」

ミドガルズオルム「お父さんちゃんと呼んできたよ」

悠「ああ、オルムは偉いな。ほらお菓子をやろう」

フ「父上あまり甘やかさないように」

始「話に加わる気のないあっちはほっというて、桜はどうなんだ？
誰か意識しているのか？」

桜「うーん、ないなー」

フ「幼馴染みで恋人になるのが人間の定番なんじゃなかったんですか？」

始「それはフィクションの話だ」

桜「悠斗や実を意識したことってないな。子供の時は一緒にいるのが当たり前だったし」

始「今も？」

桜「今は一緒にいるのが当たり前で異性として意識できないのかも。悠斗は久しぶりに会ったら全然変わってたけどまったく見向きもされないからこっちもする気になれないし」

悠「俺はガキに興味はない」

始「お前、一応未成年のくせに……」

悠「人間世界での話だ。それで実は？」

桜「やっぱり意識しないな。異性として意識してないのもそうだけど、向こうが子供の時と何も変わってないもの。男はもう少し男らしいところ見せてくれないと」

実「……」

実、何気にシヨック

桜「始さんは尊敬できるお兄さんって感じかな。まだこっちの方

が意識できるけど。でもやっぱりお兄さんってかんじがして、そういう感情を持ったことはないな。まあ今は 恋愛より他の方が楽しいからする気ないけどね」

フ「花より団子ですか」

悠「なんか意味が違う気がするが似たようなものだろ」

桜「コラ」

始「次行こうか、ヘルさんはどうなんだ？」

ヘル「え？ 私？ ええと、あんまり考えたことない……です」

悠「ヘルは嫁にやらん」

実「言うと思ったけどね」

ミ「じゃあタイプとかないの？」

へ「ええと、お父様みたいな人がいいです…」

フ「これまた予想通りで考えること自体が無駄な気がしてきませんか」

始「そうみたいだ。まあ恋愛話になることはないんじゃないか。期待してる人には悪いが」

悠「ヘルが欲しい奴は俺の屍を越えていけ」

題目？ 今後の予定は？

悠「それはさっさと終われと言いたいのか？」

始「卑屈にとるな。作者はあと三・四章のつもりらしいがあくまで予定だからな、あてにはならない」

フ「作者をあてにしたことはないですけどね」

ミ「俺もつと出番増やして欲しいー」

フ「出番が来る前に終わってしまうかもしれませんよ」

始「まあそれは作者の気力次第だな。とにかく計画通りに進めてくれないとこちらも困るし」

悠「どうせろくなことは書かないだろ」

実「まあそれは否定しないそうだけど…」

へ「私はみんなで静かに暮らせればそれで良いのに…」

悠「まあそれでは読む方もつまらないだろう。どうせこっちに拒否権はないんだ。せいぜい付き合ってやるとしよう。恨まないかは別だが」

実「なんか、下手な話を書いたら殺されそうだね」

桜「それはそんな性格にした作者自身の責任よね」

始「自分が作ったキャラクターに殺されたら話にならないな」

悠「そうか、今殺してしまえば少なくともこれ以上不幸にはならないな」

始「待て待て、それはいかん。それだけは」

フ「どうせたいして期待もされていない小説です。ここで終わっても問題ないでしょ」

実「いや、それ自分で言ったら悲しくない？」

悠「というわけで今から殺しに行こう」

ミ「行くの？ 行くの？ 僕も行く！」

実「待って待って！ それは駄目だって！」

フ「大丈夫ですよ、証拠は残しませんから。残っても問題ありませんね」

実「そういう問題じゃないって」

桜「だけど、これ書いてるのが作者なんだから止めようと思えば止めれるんじゃないの？」

始「そのつもりらしいぞ。ほら、今パソコンを切ろうとしてる」

悠「おいコラ待て、殺すまで待て」

実「殺すと言われて待つ人はいないと思う」

へ「あ、モニター切ったわ」

悠「コラ待て！ 無責任」

ブチッ

第21話 答え求める迷い人達

暗い夏がやって来る。厳しい冬がやって来る。

大いなる冬が世界を包み、二度と夏は訪れない。

寒さと飢えが大地を襲い、人々の屍が大地を覆い尽くす。

ヨトウンヘイムで一羽、アースガルドで一羽、ニヴルヘイムで一羽、雄鳥が鳴く。

月と太陽は二匹の狼に飲み込まれ、星々は天から墜ちる。

咎人の呪縛は解き放たれ、黒狼は鎖を引きちぎる。

冥界より死者が船に乗り憎き神の地へ向かう。

角笛は一度きりの役目を果たすかのように、神々に世界の終焉を知らせる。

神の時代の終わり、それを“神々の黄昏”と呼ぶ。

始まりがどこにあったのか、歯車が狂ったのはいつなのか、それすら考える暇もない。最初から予定された動きを取らない歯車がそのままでいられるはずがなかったのかもしれない。この平穏がつかの間とわかりつつも、その終わりを見ぬふりをしていた。

ならばこれは自分の愚かさが招いたことなのだろう。

両手に抱える宝物。これだけは失わないと誓ったのに。あの日の喪失感を忘れたこともなかったはずなのに。

しかし新たに抱えようとすれば腕の中の物はポロポロとこぼれていく。拾ってはこぼし、拾ってはこぼし。そんなことを何度繰り返し返したのだろう。

自分は優れているとおごっていたのかもしれない。抱える物が増えても抱えきれると、自惚れていたのかもしれない。

早く気付くべきだったのだ。どんなものにも終わりがあるということ。人であろうと神であろうと抱えられるものには限度があることを。そして一度失ったものは二度と戻ってこないのだということ。

旅行から帰って以来、悠斗は鏡を見るたびに考え込む。

実の様子は以前と何も変わらない。誰も頼んでいないのに遊びに来て、時に土産を持って平日休日関係なくやってくる。

忘れようとしているのに忘れられない。あの日の実の顔を。

そしてそれを思い出すたびに何かを忘れているような気分になる。それはきっと大切なこと。思い出せたなら何かが変わるのだろうか。しかし思い出そうとするたびに頭が痛くなり思考を停止する。これに似た状態は神だった頃にもあった。

それは既視感に近かった。デジャブというものだろうか。

以前にも見たことがあるような光景。次にするべきことが台本に書かれているかのように進められる。その状況にどこか気持ちが悪くなり、やめようとしたこともあった。なのに周囲や自分の身体が自分の意思を裏切り動く。まるで糸に絡め取られた操り人形のように。

あの時の実の顔。いつも自分が見ている顔。なのにどこか別のところで見たことがあるような気がする。

「そんなはず、ない」

自分に言い聞かせるように悠斗は口に出した。

彼には血の繋がった兄弟もなく、両親もとうにいない。そして子ども達も父親である彼とはまったく違う顔だ。そして血の繋がりがこそあれど、その関係を失った人間の兄弟。覚醒を始めた頃から遺伝

子上の繋がりも無意味なものとなっていた。

もはやこの顔や身体は人間の両親から受け継いだものではない。

この魂も肉体も既に大杉悠斗のものではない。

だから、彼と同じ顔の者など会ったことがないはずだ。

だが胸の内にくすぶる不快感は消えない。まるで悪い物でも食べたような気分だ。

「まだ俺を解放する気はないというのか」

誰が、とは言わない。それを呼ぶ固有名詞があるとすれば、それは「何度でも抗ってやるさ。これ以上何も奪わせはしない」

聞いているかも知からない相手への宣戦布告。

その名は、運命。

ガシャーンと何かが割れる音が部屋に届いた。

その音が先ほど父の入っていった洗面所であることに気づき、フエンリルはすぐに向かおうとした。

しかしすぐに出てきた父の姿に足を止める。

「どうされたんですか」

息子がそう訊くのも当然だ。眼の前にいる父の右手からは血が出ている。何かを殴った跡だ。

「何でもない。すまん、散らかした。片付けておいてくれ。少し外に出て来る」

それだけ言って悠斗は血の出る拳をそのままに部屋を出て行った。すぐに玄関の重い戸が閉まる音がした。

フエンリルは納得できないが仕方がなく洗面所に向かう。そこには割れて役割を果たさなくなった鏡と、破片に紛れて点々と血がこぼれていた。それが誰のものなのかも、何があったのかもだいたい想像できる。しかしなぜ彼がそうしたのか、その理由がわからなかった。

おそらく彼は苛ついた末に鏡を殴った。そういうことなのだろう。しかしの苛つきの原因がまったくつかめなかった。

旅行から帰って以来、父の様子はおかしかった。

以前までの余裕のある態度とは打って変わり、時折思考に耽り、声をかけても気付かないことがある。ぼんやりとしているかと思えば、突然苛立ち厳しい顔になる。

あの旅行で何かあったのだろうか。フェンリルに思い当たることはない。直接訊いても見た。しかし父は「何でもない」と言うだけで何も教えてはくれなかった。

父が子ども達に隠し事をするようになったのはいつからだっただろう。

いや、する必要がなかった。自分達には言葉を交わさずとも通じる絆があったから。血だけは繋がっても絆はなかった正妻の息子達とは違う。たとえどんな時であっても互いを思い合い、その行動すべてが互いのためとなる。黄昏に染まるあの日までそうであった。そしてこれからもそうであると信じていた。たとえ人の身に姿を変えても、心は決して変わらない。大切なものは何一つ変わりはない。自分達はいつであろうと父の宝であり、他の者に代わることはできない存在だと信じていた。

しかし人間界に来てから、正確には一度袂を別った兄弟と和解してから、悠斗はそれまで持たなかった感情を表していくようになった。それは決して自分には理解できず、父とどんどん離れていく気さえした。

悠斗は心配するなど言ってくれるが、それでもフェンリルの不安は消えなかった。

父に自分達以外の家族がいる。その状況が許せなかった。

父の考えていることが、悩みがわからなくなっていた。以前なら訊かずともわかったのに。自分の知る父でなくなってしまうのではないかとさえ思った。

父を変えたのは間違いなくあの兄弟なのだろう。血の繋がりなど

ほとんど意味を持たない。なのに自分達に似た絆を持つ。

この感情はなんだろうか。いなくなってしまうばいいとさえ思うこの感情は。

邪神の息子である自分がたかが人間に張り合おうとするなどあっていいはずがない。だからこの感情は気のせいでしかないはずだ。そう考えてきた。

しかし最近の父の様子を見ながらその感情が徐々にふくれあがり確固たるものへと変わろうとしている。

そんなとき父の言葉が蘇ってくる。

『フェンリル、お前は俺の自慢の息子だが、何も完璧である必要はない』

『お前がたとえそれをみつともないと思っても、それがお前の真実だ。それを受け入れられない方がもっとかっこうわるいことだ』

これが、真実なのだろうか。否定しようとしながらも、否定することが父の言葉を否定することに繋がる気がしてはつきりと答えが出せずにいた。

そこは誰も信仰しない神の地。忘れ去られ、ただ存在するだけの場所。

アースガルド。かつて繁栄を極めた神の地である。

人間界が切り離され、人にあがめ奉られるはずの神はその信仰者を失い、神という称号だけが呼ばれることのない名札のようにぶら下がっている。しかしそれでも神は存在する。たとえば人が何を思うとも、何を信じようとも、彼らは存在する。

ミーミルの泉、知識の泉とも呼ばれるその畔に広いつばの帽子を被った男が立っている。顔の半分を隠す帽子はなぜか、なくなった片眼を隠すためである。復活を遂げても片眼は戻ってこなかった。代償として支払われたものは得た報酬を返さない限り返ってこない。そして彼自身それを返す気はない。だから眼はそのままだ。

隻眼の男、彼こそが北欧神を統べる主神・オーディンである。

彼は今一人、泉の畔に立っている。そこには他の神々も彼が普段連れ歩いている二羽のカラスもいない。彼は一人でここに来た。

実はそこにはもう一人いた。いや、それは一人と数えて良いのだろうか。

なぜなら彼には物を掴む手がなければ歩くための足もない。それどこか心臓もない。ないものを挙げればキリがない。日本の有名な文学作品で耳をなくした男の話があるが、彼は耳こそあれど、首から下にあるはずのものが何もない。

もっとわかりやすく言おう。彼は首から上しかないのだ。頭だけだ。頭だけの男が泉にいる。正確には泉の中央にある大樹の根にからみつかれている。

彼はこの泉の唯一の住人・ミーミルである。

ミーミルはアース神族とヴァン神族の和平協定の際、ヴァン神族によって首を切られる。知識が豊富で賢かったミーミルが死ぬことを惜しんだオーディンによって首だけは助けられ、このミーミルの泉からオーディンに知恵を与える存在となった。

ミーミルは優れない顔の主神に言葉を与える。

「主よ、我らがアース神族の長たる方が、何故そのような浮かない顔をされるのか」

自分からは口を開かなかったオーディンも、長年の相談者の言葉に応えないわけがない。

「ミーミルよ、私はこれから何を成すべきなのか悩んでいる」

「神が迷えば人も迷う。主よ、あなたほどの者を悩ます状況とは我らを裏切りし邪神についてか」

やはり彼は今何が起っているのか教えずともわかっている。知識の泉に浸かり続けた彼は知識の神をうわまるほどの知識を有している。

「そうだ、我が子や同志たちは彼を罰するべきだと彼の地へ飛び立つとうとする。私が止めても聞きはしないだろう。いや、私は止めることも命ずることもしていない。ただ見ているだけだ。それは私がそれを正しいか正しくないかわからないからだ。ミーミルよ、お前にはその答えがわかるだろうか」

本来なら裏切り者を抹殺せよと命令を下すのは自分の役目だ。それは主神として当然のことだ。しかしそれは感情に動かされた行為ではないだろうか。戦いを繰り返し血を流すことは本当に正しいことなのだろうか。

ミーミルは答える。

「主よ、今邪神を殺そうとすることは感情に踊らされる愚の行為。これは罰ではなく復讐に過ぎず。そして憎しみは新たな憎しみを生む。これを繰り返すこと真の愚。世界を統べる者ならそれを断ち切るることこそ今すべきこと」

首は感情を表さない。ただ事実のみを語る。

「しかし彼の者を討たぬもあなたの感情より生まれし行動。かつての情に流され義務を怠ること、それも愚」

復讐に走ることも情に流され許すことも感情より生まれた愚の行為。なら正しいこととは？

「主よ、たとえ神であろうと心に動かされる者は必ず失敗を犯す。そしてどんな行為にも間違いが存在する。故にあなたが望む正解は存在しない」

「では私はどうすればいい？」

「我は首。生と死の間にあるもの。知恵の一部。しかし知恵はすべての答えをもつものにあらず。知識は素材でしかなく、すべての真理を導くのはそれを使いし者だけ」

長い間知恵の泉に使っていた彼はもはや自分自身が知恵の一部と

なっている。既に人格は失われ、ただ辞書のように知識を与える存在と化している。

「やはり、他人に頼ってはいけないということか。そうだな、最後に決めるのは私自身だ」

憎しみよりも悲しみがそこにあった。なぜ、と彼に問いかけた。最後に彼と交わした言葉となったそれは、答えられることはなかった。

今も自分はその答えを求めているのだろうか。

オーディンはぐりと周囲を見渡す。

復活しても何一つ変わらなかった場所。そこはかつて彼と出会った場所でもあった。今は一人しかない。

『おもしろいな、お前。神とはこうも強欲なものか』

片眼をミームルの泉に捧げ知識を得た。七日七夜ユグドラシルに首を吊り死の世界に足を踏み入れたことによりルーン文字を得た。そんな自分をずっと見ていた者に気付いたのは、その声だった。

死んでまでさらなる力を手に入れようとした自分を面白そうに眺めていた。

本来なら警戒しなければならぬ巨人族の男。美しい容姿と何かを企むような不適な笑いが、なぜか嫌いではなかった。

『お前は力、俺は退屈を紛らわす為の娯楽。欲するものは違えど利害は一致している』

種族の確執もプライドも関係ないと、ただ何も縛られずに生きるその様が羨ましいとさえ思った。今までにないタイプの者だったというのもあっただろう。他の神々に非難されることをわかりつつも、彼を迎え入れた。

最後に傍に居るのは彼だと信じていた。

しかし今、神は一人。邪神は遠き地に。

友よ、我が義兄弟よ、今お前は何をしている。何を考えている。もう一度会いたい。たとえ二度と修復できない関係だとしても、

殺し合うだけの再会であつても。
あの日の答えを聞けるなら。

第21話 答え求める迷い人達（後書き）

いよいよ核心へと向かいます。

第五章【黒狼が哭いた夜、彼の代わりに雨が泣いた】

第22話 一万年目の真実

珍しく自分からやってきた知人――友人と呼ぶとはげしく怒る――
―はいつにも増して不機嫌な顔を向けてくれた。

「どうしたんだい？」

思わずそう尋ねてしまうほど。

しかしそんな気遣いや疑問などに応える気もなく、彼は同じベン
チに腰掛ける。三十センチほど離れているのが何とも彼らしい。

元々彼は自分を好んではない。そんなことは百も承知だ。だが
これほど不機嫌な顔を見るのは一体いつ以来だろうか。

悠斗は膝に片肘を立て、隣に立つ自分になど目もくれず、明後日
の方向を睨みつけている。別にそっちに何かがあるわけではない。
ただ単に自分と視線を交わしたくないだけだろう。

だがそれほど不機嫌な彼がわざわざ会いに来るなどよほどの理由
があるのだろう。

「本当にどうしたんだい。私に何か用があったんじゃないのかい？」
フレイが尋ねても、悠斗はしばらく何も言い出さない。本当にど
こかを睨みつけているだけだ。まるでここではない、どこかにいる
誰かを睨みつけるかのように。

悠斗はようやく口を開いたのはフレイが諦めたため息を吐く一秒前
のことだった。

「俺は何をすべきなんだろうな」

とても彼らしくない言葉にフレイは再び驚かされる。

「本当にどうしたんだい。今日の君は何か様子が変だが」

「おまえに変と呼ばれる筋合いはない」

いや、彼らしさは健在か。

「ならどうしたんだい」

「正直するべきことがわからない」

そう、わからないのだ。

ラグナロクの後、傷ついた身体と魂を癒すためこの世界に来た。まずは身体を癒し、散り散りになった子供たちを見つけ、やってきた刺客を撃退していった。

だが、するべきことがわからない。

「自分でもおかしなことを言っているのはわかってる。だが、俺はこの世界に来て何をするべきなのか、最近になって考え始めた」

運命や使命と言った他人に決定された人生を全うする生き方は悠斗が最も嫌う生き方だ。だからするべきことなど考えたこともない。自分の人生は常に自分が選んできた。そこに計画性はない。

なのに、今激しく何かをしなければならぬという感覚に襲われている。しなければ悪いことが起きるような。虫の知らせのような警告。

悠斗はこの感覚を以前一度だけ感じたことがある。

それはまだ彼が神の座にいた時のこと。彼が神の座を追われ、捕縛される直前だ。

そのとき感じた感覚は二つ。そしてその二つは相対するものだった。

一つは〇〇をせよ、という命令のようなもの。

もう一つはしなければならぬ、いや、してはならないという虫の知らせのようなもの。

今感じているのは後者の感覚。前者の感覚はない。

「あのとき俺は後者の方を選んだ。理由はわからないが、警告のようなものを感じた。それに従えば取り返しのつかないことになってしまう」

だが結局その未来が変わったのかどうかはわからない。きっと結果は変わっていない。なぜあんなったのか未だにわからない。だから誰にも言ってはこなかった。息子たちにさえ。自分さえ信じられなかったのだから。

「今回はどうなんだろうな。俺に予知能力のたぐいはないはずだが、今俺は重大な選択を迫られているような気がする」

自分の未来を変えるような選択。それなのにどうすればいいのか具体的な選択が見つからない。

「俺は息子たちとずっとこの世界で幸せに生きていければそれでいいと思っていた。これ以上神の復讐や使命に関わるのはごめんだとな」

「まあそれはわからなくはないね」

フレイもそのあたりが悠斗に似ている。使命よりも快樂を求める。実に自分の欲望に忠実で素直な正確と言えよう。

だからこそ悠斗は話せた。今まで誰にも言えなかったことを。信用しているからじゃない。今のうちに誰かに言わなければならぬと思ったからだ。そしてその相手は息子たちでも人間でも、他の神々でも駄目だ。使命より情や快樂を重んじ、中立に近い立場である彼でない。

フレイもそれは理解しているのだろう。だからわざわざ自分を話し相手に選んだ理由を問いはしない。

「ここで選択肢を間違えれば俺はきつと再び何かを失う。これは予感ではなく俺の直感だ」

「なら君が以前行った選択肢はどういったものだったんだい？」

「さっき言ったとおりだ。何もしなかった」

そう、何もしなかった。するべきことを放棄し、何も見なかった聞かなかった。

誰の命令なのかはわからない。誰からの警告なのかもわからない。だが、その正体すら考える気にならないほどの使命感がそこにあった。まるで自分はそのために生まれたかのように。

それに対し後者の警告は弱く、しかし暖かった。寝ぼけて聞く話のようにおぼろげでありながら、そこには悠斗への愛情が感じられた。本当に自分の身を心配して言ってくれているのだという意志が感じられた。だからそちらを取った。

「命令の内容も覚えていない。いや、最初からわかっていなかった。まるで身体が勝手に知っているような感覚だ。自分のことなのに他人事のような気分だった」

そしてすべてが終わってから確信する。自分に命令する誰かは最初からあの結末を望んでいたのだと。

「誰だい、それは」

「それはまだわかっていない。考えようとすればかき消されるかのようにその意志がなくなってしまう。フレイ」

悠斗はそれまでにないほどまじめな顔でフレイを見据える。

「今日話したことをおまえは忘れてしまうかもしれない。きっと俺がこれから話すことは俺たちを操ろうとする何かの意志に反する行為だろう。そして俺の反抗はそれに対して微々たるものかもしれない。だが、この真実を持ち失わなかったことが俺の反抗の成果だと思っている」

「突然どうしたんだい。一体何の話を」

「たとえおまえが忘れさせられても、俺にとってただの自己満足でしかなくても、こうすることに意味があると思っておまえに話す」

「だから一体何を」

「俺は、バルドルを殺していない」

すべての音が、声が、世界から消えた。

ただ果然と、今聞いた言葉が聞き間違いであると思って、しかし告白者の真摯な顔がそれを否定していて、何を信じればいい。だから果然とするしかない。

「ロキ……君は、今何を言ったのかわかっているのか」

「わかっている」

その真実が神々が信じてきたすべてを否定することになっても。悠斗は内心、ほっとしていた。いつかのように自分たちの会話はなかったことにされてしまうのではないかと危惧していたからだ。

悠斗は気づいていた。今まで自分たちに何度も干渉し、真実から遠ざけようとしていた何かの存在を。それに悟られず行動すること

は容易ではない。なぜならその何かはまるで天から自分たちを見下ろすかのように、すべてを監視している。そう、まるで神のように。神が天から見下ろされるなどふざけた話だ。しかしどんなに否定しようともそれは確かに存在する。

今こうして行動できるのは彼らの背後にある木々。それを挟んで背を向け合うようにベンチに座っている彼の娘のおかげだ。本当ならこんな無茶はさせたくなかったのだが、それでもしなければならぬ。そして彼女も喜んで応じてくれた。

何を話しているのかは彼女は知らない。聞いている余裕もない。母より受け継いだ力、それをフルに活用し、何者かの目から悠斗達を隠しているのだから。

こうして何事もないということは成功しているのだろう。ヘルは何の事情も訊かず協力してくれた。その気持ちに応えるためにも、このチャンスを逃すわけにはいかない。

「フレイ、おまえ達神々が自分たちすら操る何かの意志の存在を認めたくないことは百も承知だ。しかし、事実を受け入れなければ先には進めない」

悠斗自身、あの出来事がなければここまで信じなかっただろう。いや、あの時さえ気のせいで済まされてしまいそうなほど、小さな疑心だった。

それがはつきりしてきたのはこの世界に来てから。その存在を強く感じるようになった。四六時中自分を監視する眼。異分子である自分をどうにかしたいという意志。初めてそれにはつきりと対抗する意志を持った。

これはその始まり。

「夢の中で歩くような、そんな感じだった」

希望の神・バルドル。大神オーディンの息子であり、すべての神々の希望。彼さえいればアースガルドは安泰。平和は永遠のもので

あると信じられていた。

しかしある日、運命の神ノルンが下した預言は残酷なものであった。バルドルの死である。

彼の母・フリッグは彼を死なせまいと、世界中のすべての生物・無生物に彼を傷つけないことを約束させた。これによりいかなる武器も彼を傷つけることはできなくなり、決して死なない神となった。ただ一つ、若すぎて契約できなかったヤドリギを除いて。

これの存在を知ったロキは、皆に愛されたバルドルに嫉妬し、そのヤドリギを手に入れた。そして盲目の神ヘズにこれを投げさせた。何者も傷つけることのできなかったバルドルをヤドリギは貫き、バルドルは死んでしまう。

これによりロキは神々から罰せられることとなる。

「命令に従わず家からも出なかったはずの俺は、夢の中でバルドルの前にいた。そしてヘズに彼を殺すためのヤドリギを手渡していた」まるで他人事のようにその様子を見ていた。身体だけが彼の意志を置いて動いているような気分でもあった。

「そしてバルドルは死んだ。そのときのヤドリギを手を持った感触、ヘズに言った台詞、すべて覚えている。本当に自分がしたかのように」

目を覚ませばバルドルの死の知らせが飛んできた。自分はやっていない、そうは言えなかった。まるで無意識に彼を殺しに行ったかのように、記憶は鮮明だったのだから。本当に自分が殺していないと言い切ることができなかった。

だから一旦、姿を隠した。女の巨人族に化けた。

するとロキの正体を知らないフリッグからバルドルのために涙を流してくれと頼まれた。どうやら冥界へ行ったバルドルを生き返らせる条件としてヘルが出したのが「世界中のすべてが彼のために泣くこと」だったらしい。

だが――、

「俺はバルドルが嫌いだった。死んでくれて喜ぶほどにな」

すべてに愛されることを約束された存在。それをひけらかしたわけではないが、彼の苦勞も知らない精神はそれを知る者にとって憎いことこの上ない。恵まれた者は恵まれなかった者の苦しみを知らない。彼は愛されることしか知らなかった。

ロキにとってはただ存在するだけで愛される彼の存在は何よりも許し難いものだった。

嫉妬と言われてもかまわない。逆恨みだと言われてもかまわない。苦しみも何も知らず、知ろうとさえしないきれいすぎる神が嫌いだった。

「そんな俺が、バルドルのために泣けるはずがない」

結果はもちろん分かりきっていたこと。バルドルは蘇らなかった。神々はロキを非難し、彼の気持ちなどまったく理解しなかった。そしてロキ自身、あの不可解な出来事を誰にも相談できなかった。

「オオカミ少年と一緒にだ。嘘つきは誰にも信じてもらえない。俺にはあの時血を分けた子供達以外、誰も味方がいなかった。そして信用できなかった」

そう、血よりも強い絆でつながれていたはずの義兄弟さえも。

フレイはしばし何も言うことができなかった。普段口が開けば次から次へと言葉を並べる彼でさえ、何も言えなくなるほど衝撃的な事実だったから。

もちろん信じる必要などない。自分たちを裏切った邪神を、欺瞞の神を信じる方がどうかしている。なのに、今フレイはそれを笑って一蹴することができない。

彼の見たことがないほどの真摯な眼が、信じてもらえないと思っても言わずにはいられなかった彼の行動が、それを嘘だと思わせなかった。

これは真実。数千年、いや一万年目にして語られた真実。

「笑いたければ笑っていいんだぞ」

最初から期待はしていない。しかし、

「笑わないよ。こんな場面で笑うほど僕は道化ではない」

意外な答えに今度は悠斗が驚かされる。

「おまえに笑う以外の顔があったことの方が驚きだ」

「ひどいなあ。これでもまじめな時はあるんだよ」

数千年に一回くらいなら。味方にはならないかもしれないが理解者にはなれる。秘密の共有者。

「ところで子供達や彼らには話していないのかい？」

「ああ、言ったところで心配させると思ってな」

もっとも父親を信仰している長男にはそれが逆効果となりそうだが。ところでなぜその話にあの人間の兄弟達まで入るのがいささか疑問であるが…。

「他の神々にも話してみるかい？」

「いや、無駄だな。信じてもらえないわけがないし、証拠もない。言い逃れにしか聞こえないだろう」

「まあ、それもそうだね」

最初から信じるという選択肢がないのだから当然と言えば当然だ。

「オーディン様も？」

その名前を口にすれば怒るかと思ったが、意外にも悠斗は起こりもせず、むしろ考え込む始末だ。

本当にこの二人の関係は理解できない。黄昏以前から、彼らの関係は周囲に理解されないものだった。主神が巨人族を仲間に入れ、さらには義兄弟となった時、アースガルド中が震撼したものだ。

信頼しているのかそうでないのか。想いを通じ合っているのか嫌っているのか、まったく判断ができない。今も他の神々の意見も聞かず、報復もしない。そしてもう一人も恨み言一つ言わない。本当にどういう関係なのだろうか。

その答えは本人らだけが知ること。答えは神すらも知らず。

案外神というのは無能なのかもしれない。

第23話 漆黒

悲劇は突然訪れる。だからこそその悲劇だ。

フェンリルは一人歩いていた。特に行くあてや目的があるわけではない。誰もいないあの家に一人いることに耐えられなかったからに過ぎない。

悠斗が出て行っすぐ、妹のヘルもないことに気づいた。一人で外に出るとは思えないので悠斗が連れ出したのだろう。もう一人の弟は今朝から遊びに行っている。生きている時間だけなら零を三つ付けるぐらいの年月の筈なのに、未だに精神がお子様並みだ。父が甘やかしすぎているためかもしれないが、だからこそ自分がしっかり驍をしなければならないと昔から使命じみた義務感があった。

そう、父の為になることが生まれた時からの使命であると確信している。

昔から他人に弱みを見せない父は大きく、頼れる存在だった。彼を隣で支えるのが息子としての義務であった。

神々によって捕らえられ、弟は冷たく暗い海に、妹は希望も未来もない死者の国・ヘルに、そして彼は寒く寂しい霧の国ニブルヘイムに閉じ込められた。周りには一面の霧。自分自身の姿さえ見えなくなるほどの深い霧も珍しくはない。他の生命は何も感じられない。霧が体温を奪い、身体だけではなく心の温もりすら奪っていった。黒く冷たい鎖は細いのに決して切れない。当然だ。小人たちが作ったグレイプニルは魔法の鎖。力づくで壊せるはずがない。

幸い飢えで死ぬ心配はなかった。神の血がそれを可能にしていたのかもしれない。彼を襲ったのは果てしない孤独だった。

自分以外誰もいない。家族で月夜の下で過ごした日々が走馬燈のように蘇っては消えていく。騒がしい弟の声も、泣き虫の妹の泣き声も、何も聞こえない。子ども扱いされていることが嫌で口では断っていたが、本当は優しい掌が好きだった母の温もりも、どこにもない。毎日当たり前のようにあったものがある日奪われた時の喪失感は無くしたことの無いものには決してわかることはない。

救ってくれたのはあの人だ。家族なのに時々しか会えない。そのことに不満が無かったワケじゃない。自分たち以外の家族を持ち、神々という敵であるはずの者達の元へと帰るあの人に。

だが、わき見もせず駆けつけてくれたその姿が、自分の手が傷つくことを厭わず鎖を引きちぎろうとする姿が、そして孤独のどん底に落ちていた自分を救ってくれた姿は、紛れもなくただ一人の父だった。

立場を危ぶむ行動だったのだろう。ただでさえ巨人族との間に子どもを設けていたことが発覚した後だ。さらに自分を追い込むことになるくらいのことわかっていたはずだ。

それでも彼は来てくれた。自分以外の声がとても優しく、自分以外の体温がとても暖かかった。何度も何度も、彼自身が捕縛されるまで何度も会いに来てくれた。こちらが心配しても何でもないと言う。父親が子どもに会いに来て何が悪いのだと。

そして言った。「すまない」と。

何もしてやれなくて、ここから解放してやることもできなくて。

本当に不甲斐ない父親だと。

きっと自分を責め続けていたのだろう。孤独だったのは自分だけじゃない。神でありながら他の神は味方ではなかった。彼をいつも支えていた母は自分たちが囚われた後すぐ傷が元で亡くなった。

もしかしたらあの時一回だけかもしれない。父の弱さを見たのは。最愛の人を失った直後の彼は、今まで自分が見てきたどんな姿とも違っていた。そして傷を抱えながら懸命に一人立ち上がるその姿を見て、フェンリルは決心した。

自分の一生はこの人の為にある。命のかけら一つ残さずこの人の為に。

だから父が何をしようともその先にある未来を気にすることはなかった。信頼していたから。なのに、今幼少の頃以来の不満が胸の中に渦巻いていた。

そう、これは不満だ。あの頃と同じ、父が自分たち以外に家族を持つ事への不満。そして彼に身を挺してまで守られる彼らへの嫉妬。ここしばらく彼の中で正体もわからずわだかまっていたものの正体がようやく発覚した。不満と嫉妬。父には自分たちだけの父であって欲しい。他の誰かを、自分以上に信頼して欲しくない。父の隣に立つのは自分でありたい。

こんなにも汚く醜い感情が自分の中にあつたことに戸惑い、いやそれ以上のショックがあつた。

そう、彼は父が彼に言った通り、父にとって自慢の出来る完璧な息子であろうとしていた。それは意識的な部分も無意識的な部分も含めて。

かつて、彼の妹が父に告白したそれと似た自分勝手な思い。たとえばそれを告白しても彼の父は許すだろう。娘の告白を許したように。しかし、フェンリルはそれを父に告白することも、自分を許すこともできずにいた。父の恥になるような自分は役立たずの屑に過ぎない。父が弱さを見せないのなら自分もそうであろうとしてきた。そうすることでより父に近づけると思ったからだ。

今彼が許せないのは自分自身。そして父を奪う存在。しかしそれを抹消しようなどしてはならない。父はそれを決して望みはしない。彼自身気付いていないのかもしれないが。父の中での兄弟の存在は決して軽いものではなくなっている。護るべき対象の中に含まれている。それは彼らを家族と認識していることに他ならない。きっと直接訊けば彼はそれを不定するかはぐらかすだろう。だが、それは確実に事実だ。

だからこそ彼らを傷付けることは父を傷付けることに繋がってし

まう。再び家族を失う苦しみをあの人に与えてしまふ。それはあつてはならない。

だが、自分の中にある嫉妬が、欲望が、彼らを殺せと命じてくる。消してしまえば楽になれる。父を独占できる。また本当の家族だけで一緒にいられる。フェンリルにとって家族以外の存在に価値はない。極端に言えば、いや言わずとも家族さえいれば他がどうなつてもかまひはしない。

実際にそうする人間は多い。結局世界よりも自分自身を形成する世界を優先する。自分自身、身近な人間。自分が生きたいが為に他人を蹴落とす。理想論は口だけでしかない。理想は行動を伴わなければ虚実や空想に過ぎない。本当に守れるのは手の届く範囲だけ。それすら守りきれぬかは保証できないのに、縁もゆかりもない人間を守ろうとするのは正義に殉ずる覚悟をした者だけだ。

やりもしない優しさを語るのは偽善だ。最初からしないことを覚悟しておけばいい。守りきることと切り捨てる覚悟を。かつて父から習った教えの一つ。彼は世界で最も守りたかった者を護ることができなかった。本当に大切なものを護るためには敵対するすべてを排除しなければならぬ。そうしなければ本当の平穏は手に入れない。

しかし父にはそれすら選べなかった。すべてを敵にまわすほどの力が彼にはなかったから。

だからこそ息子には自分と同じ過ちを犯して欲しくないのだろう。フェンリルは家族以外に大切な者を作らなかった。視野の狭い生き方だと言われようが、彼にそれを変える気はまったくない。無駄に増やしても護りきることなどできないのだから。他にまわす余裕があるのなら本当に大切な者にすべてをまわせばいい。それがフェンリルの考え方だ。

考え事をしながら歩くのは良くない。いつの間にかフェンリルは来たこともない道を歩いていた。街から外れ、山へ向かう斜面。彼にしては珍しい失敗だ。

周囲に人家はほとんどなく、プレハブ小屋や工場らしい建物が点々と建っている。どうやらこの辺りは山を開いてできた工場地区のようだ。だが人気はない。使われなくなってかなり経っているようだ。

興味がそえられるわけでもなかったの、すぐにきびすを返し元来た道を引き返そうとした。しかしその足はピタリと止められる。

原因は引き返そうとした先、今まで自分が歩いてきた道にある人影。人よりも優れた五感を持った自分がまったく気付くことができなかった。それだけで警戒を強めるのに、その顔を見れば気がゆるんでしまうのは仕方のないことだと彼自身言い聞かせる。

なぜ警戒する必要がある。自分が全力で信頼を寄せている相手に、彼に敵意を向けるなどあり得ない。彼は未来永劫、自分の味方であるのだから。

なのになぜだろう。悪寒が止まらないのは。同じ臭いなのに、同じ顔なのに、何かが違う。

こちらに向かってくる彼が、まるで知らない人間のように感じるのはなぜだろうか。今すぐ逃げ出したくなるのは。

一步、また一步と迫ってくるたびに迫ってくる。これは、恐怖だ。今まで恐怖など感じたこともない。神々に捕縛された時も、ラグナロクの際、オーディンと戦ったときも、その息子達に殺された時でさえ、何かを恐れたことはなかった。そう、死さえも。

なのにこの初めての恐怖を、まさか父に抱くとは。

「父……上……？」

思わず本当にそうなのかと尋ねてしまうほど、確信が持てずにいる。見慣れた顔なのに、人間界に来て、その姿は変わらずにいたのに。

なぜ、初めて見る気がするのだろうか。

彼は、ゆっくりと歩み寄ってくる。それはとてもゆっくりとしていて、足音がほとんど聞こえないほど静かなのに、重くて寒い。押しつぶされそうで、凍えてしまいそうで、なのにその顔は優しくほ

ほえんでいて。

(あれ?)

ふと気付く。彼はこんな顔で笑ったりしない。我が子に向かってこんな顔をしない。これはそう、まるであの男と話している時のような――。――。

フェンリルの前に立った彼は、何の前触れもなく右手を持ち上げる。その右手はフェンリルの顔の前にかざされる。

視界が覆われる。冷たい手が触れる感触がした。指の間から見える彼の顔。やはり笑っている。でも、すごく嫌だ。

いつも感じる温もりが、優しさが、何も感じられない。笑っているのに、全然優しくくない。

昔ただ一度見た顔。あの男を前にした時、これから殺し合いをするという時に、見せたあの顔。あの男に向けた、あの顔の意味は――。

なぜ、彼は笑ったのだろう。

「父上……」

もう一度呼ぶ。しかし答えはない。返ってくるのはあの微笑みだけ。

赤い光が指の隙間からフェンリルの目を差してくる。いつの間にか日が暮れていたようだ。そんなことすら気付かなかった。どうでもいいはずなのに、なぜか脳はどうでもいいことを考えている。

夕日に照らされ、彼の髪が黄金に輝く。それはきつと美しい光景。しかし、何かおかしい。

(あれ?)

フェンリルは再び気付く。彼の髪の色、眼の色に。今更と言われればその通りなのだが、それはおかしいことであり、しかしどこもおかしくないもの。

『父上の髪と眼。元に戻りませんね』

父と暮らすようになって間もなくそんな話をしたことがある。

この世界に生きる悠斗の髪と眼は黒色。そして神だった頃のロキ

は金髪に青い眼。大杉悠斗の殻を破り本来の姿を取り戻していった彼が、唯一昔と違った所。

どんなに時間が経っても、彼の髪と眼は元の色には戻っていない。『そういえば、なぜだろうな』

悠斗自身、それほど気にしてはいない。美しいと言われた髪も眼も、彼にとってはたいした価値はない。戻らなくてもかまわないとさえ思っているのだろう。

しかしフェンリルはそのことがずいぶん気になっていた。

まるで何かが足りないかのように。

「：お前は、誰だ？」

かろうじてまだ動く口がそれだけ発する。だがやはり答えはない。目の前にいるのが誰なのか。父と同じ、だが違うこの男は。

そういえば、父と間違われた男がいた。仮初めの肉体に血のつながりはある。だが顔はまったく似ていない。だが間違われた。父のルーン魔法の効力によるものだとしても。

本当にそれだけ？

ああ、もう思考さえ自由にならない。

かざされた手は視界のすべてを遮ることはできない。しかし、じわじわと視界が黒く染まっていく。身体は動かない。動く術を忘れたかのように。いや、動こうとすら考えることができずにいる。

野生の勘がなくとも今危険が迫っていることがはっきりとわかる。なのに、身体も意志の自由さえもフェンリルの手から離れてしまっている。

染まっていく。黒に浸食されていく。

黒が嫌いだった。自分が生まれ持った色。闇の色。母も黒髪だったがその肌は透けるように白くて、父は夜のようにだと言っていた。夜の空に浮かぶ月。そんな夜の空のようだと。

でも自分は違う。上から下まで真っ黒。夜の闇よりも烏よりも黒い。光などカケラもない。人の姿をまねても結局本性は何も変わっていない。主神を殺すことを運命づけられた黒狼。殺して、殺され

るために生まれてきた化け物。

どうして？ 愛し合った二人から生まれてきたのに、なぜこんなに黒いの？ なぜこんなに醜いの？

黒は嫌いだ。そこには罪・憎しみ・苦しみ・痛み・恨み、すべてが混ざってるからこんなに黒いのだ。何も生み出さない黒。黒に何を混ぜても黒にしかならない。善意も愛もすべて飲み込んでしまう。自分の業を表したかのような色が大嫌いだった。

視界が黒に支配される。身体も心も、すべて。

わずかに残った視界に彼の口元だけが映る。声はもう聞こえない。ただゆっくりと動かされる唇の動きを読むことはできる。確かに彼は言った。

『使命を果たせ』

そして彼は漆黒に吞まれた。

大杉始がその意外な客人を迎えたのはほとんど日が沈んだ頃だ。その時家にいたのは始だけ。末弟は昼に出かけていき、まだ帰ってきていない。両親は夫婦水入らずの旅行に行っている。

呼び鈴が鳴ったとき、弟が帰ってきたのだと思った。しかし弟なら自分で鍵を開けて入るはず。なら宅配便だろうか。だが返事をしても誰も名前を言わない。

さすがにおかしいと思い、少し警戒しながら始はのぞき穴から外をうかがう。そこには確かに人がいる。彼の血だけ繋がった弟の長男。

始は警戒を解き、鍵を外し扉を開ける。そこにはやはり邪神の長男・フェンリルの姿があった。

「どうした？ こんな時間に」

フェンリルがこの家に来たのは悠斗が出ていった時のみ。こうして訪ねてくることは今までなかった。だから不思議に思いつつも、幾分か信用のある相手に警戒などあるはずがない。

フェンリルは何も答えない。ただ黒い前髪の中に隠された眼は何うことができない。

「何か用か？　悠斗が何か言ってきたのか？」

一瞬だけ彼の身体がびくりと動いたように見えた。しかしそれすらもなかったかのようにまたじっとたたずむ彫刻に戻ってしまった。どうしようか困りながらも、ここで話をするより中に入る方が良いと考え、客人を招く。

「とりあえず上がれ。実はまだ帰ってないが」

そう言って扉を開けたまま彼に背を向けた。後ろの彼はついてくると思っていた。

フェンリルはゆっくりと足を前に出す。

「それで、一体何の用――」

振り返ったからその光景が見えた。振り返らなければ何もわからずに終わっていただろう。

黒い闇に光る獣の眼。

そして世界は暗転する。

第23話 漆黒（後書き）

一人の語りだけで終わってしまいましたね…。
全然進んでないし。次はもっとテンポ良く進めたいと思います。

第24話 野良犬の行方

病院に着いた時、既に空には星々が並んでいた。

見舞客もほとんどおらず、患者も病室で夕食を食べ始めている頃。静寂に満ちた待合室をずかずかと横切る男がいた。荒々しく音を立てる歩き方に注意する看護師がいたがまったく耳に入らず、視界にすら入っていない。

男は廊下を奥へ奥へと進む。そこは他の見舞客や患者がほとんど近寄らない場所にある。壁には窓ガラスがはられ、中の様子が見られるようになっていく。部屋の前には椅子が設置されており、そこには一人の少年がグスグスと泣いている。他には誰もいない。

無機質な電灯が廊下を照らしているのにここは暗い。そう感じるだけかもしれないが、ここで明るい雰囲気など似合いはしない。

少年は男に気づき伏せていた顔を上げる。その顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃの醜いものだ。今からこれでどうするのだと思ったが口にはしなかった。ここで空気を読まないほど性悪のつもりもない。

男は少年に一度眼を向けただけで何も言わず、窓から室内をのぞき込む。

室内は暗い。その中でモニターやランプだけが光源となっている。部屋の住人は明かりなど必要としないのだから。唯一在る家具であるベッドの上には男が一人横たわっている。患者が着るシンプルで飾り気もない水色の服を着せられている。むき出しになっている腕や顔、頭にはほとんど皮膚の色が見えないくらい包帯で隠されている。

ここは病院だ。そして病室に眠るの患者が何事もないはずがない。それでも、これで生きているのかと疑いたくなる姿だ。しかし周囲にある機器はその鼓動が動いていることを示している。モニターに鼓動が刻まれる。規則正しい機械音。それらだけが彼の生きている証に見えた。

死人に病室は必要ない。ならばそこにいるだけで生きている証になるはずなのに、それすら考えられない姿だった。

「何があった」

男、悠斗はここに来て初めて口を開いた。それはもちろん泣いている少年に向けて言ったものではあったが、どこか確認するかのような発言にも聞こえた。

一度目では何も答えられなかったが、二度聞けば嗚咽混じりの返事が来た。

「今日、家に帰ったら……倒れてて、すぐに……救急車呼んで……」

答えはしたが悠斗の欲しい答えではない。そんなこと予想のできる光景だ。本当に知りたいのはその前だ。

「見たのか」

何を、とも誰を、とも訊きはしない。だがそれで十分意味は伝わる。少年、実にもそれは伝わっていた。だから首を縦に振ることでは応える。

「そうか……」

それだけだった。悠斗はきびすを返しその場を後にしようとする。その悠斗の腕をすれ違いざまにガシツとつかむ手があった。誰かなど考える必要すらない。ここには二人しかいないのだから。

悠斗はその手を振り払いもせず自分を見上げる弟を見下ろす。ただ無表情に。彼はここに来てから一度も表情を崩していない。それすら腹正しいと言わんばかりに睨みつける瞳。純粹な憎しみ。見慣れたはずの視線が、この弟からだとても珍しいものとなる。

こいつもこんな顔ができたのか。

「どうしてだよ」

掴む手に力がこもる。

「どうして彼が……あんたの息子が始兄さんを傷つけるんだよッ」不幸にも、いや故意なのか、その場を立ち去る犯人を見てしまった。血の繋がらない兄の息子。黒髪に長身の、獣の目をした男。

悠斗は何も答えない。掴まれた手首が痛む。

『傷つけるつもりだったんじゃない、殺すつもりだったんだ』

そう言ってやろうかと思ったがやめておいた。それではただの八つ当たりだ。言い訳も謝罪もない。

何分そうしていたのだろうか。二人が互いをにらみ合っていた中、三人目の存在がその空気を打ち消す。

「何しているの、二人とも！」

ただならぬ雰囲気を感じ取ったのだろう。二人を止めんとばかりに桜が駆けてきた。それに気を取られた隙に実は力を緩めてしまう。その隙を逃さず悠斗は手をふりほどき足早く歩き去っていく。

後ろから二人が止める声が聞こえた。しかし悠斗を止める力はない。誰かが追ってくる気配もあった。

実達が悠斗を追う。悠斗が角を曲がり視界から消えたのはほんの数秒。しかし、実達が角を曲がった先に悠斗の姿はなかった。ただ開け放された窓から吹く風が、最初から何もなかったのだと嘯いていた。

烏が地面に降り立つ。黒い翼は細長い腕に、漆黒の帽子は同色の髪に。バサリと風に舞ったのは羽ではなく黒いパーカー。空舞う者は大地駆ける者の姿へと転じる。

久しぶりの飛行に何の感慨もなかった。そんな心の余裕などどこにもなかった。

悠斗は数ヶ月ぶりの大杉家の前に降り立った。人間としての人生の寢床としていたかつての我が家。人であった頃の人生に不満はなかった。何の危険もない、神であった頃に比べれば一瞬に過ぎない

十数年。しかしそれを刹那と感じたことはない。むしろ怠惰に時を過ごしていた頃よりも、幼稚でありきたりなことをやっていた十数年の方がずっと深い。

長ければ良いというものではない。どんなに短くとも、そこにある価値は時間の長さで測れるものではない。

閉ざされた扉の向こう側に人の気配はない。鍵もかかっている。何人たりとも通さぬと言うように立ちふさがる扉。わずかに流れてくる血の臭いが、そこで何があったかを物語っている。

どんな鍵を使おうとも、神の前では無意味。人間の文明など神の前では無力に等しいのだろう。悠斗が一つのルーン文字を宙に刻めば、文字は鍵穴に吸い込まれ何の抵抗もなく扉を開け放つ。

一步家に入ればそこにあるのは惨劇の場。玄関と廊下に広がる紅の装飾が悠斗を迎える。既に何時間も経つというのに、むせかえるような鉄の臭いに思わず眉をひそめる。

壁に、天井に、まき散らされた赤黒いシミ。これでまだこれを流した人間が生きているとは驚きだ。もったも、まだ生きているとしか言えないが。絶対に助かるなどという希望は最初から持ち合わせてはいない。たとえ助かったとしても以前の生活は送れないだろう。既に五体満足ですらないのだから。生きていただけでも奇跡だろう。そう、あれはまるで食い散らかしたような――。

「……お父さん？」

その場で考え込んでしまっていた悠斗以外の声が発せられる。

ニユルリ、と悠斗のパーカーに付いたフードの中から出てきたのは一匹の蛇。光加減で黒にすら見える光沢のある灰色の身体。一見すると珍しい模様をした小型の蛇にしか見えない。これが世界を取り巻いた大蛇とは誰も思わないだろう。

「大丈夫だ」

頭を除かせた次男坊の頭を優しくなでてやる。

「どうだ、オルム」

フードから悠斗の首に巻き付いたミドガルズオルムはヒクヒクと

小さな身体の小さな鼻を動かし臭いを嗅ぐ。むせかえる血の臭いの中からある臭いを探す。できれば父の勘が当たっていないことを祈りながら。

しかし蛇の優れた嗅覚はそれを探し当ててしまう。

「うん……あったよ」

人の血の臭い、その中に獣の臭いが。血を分けた兄弟の痕跡が。「そうか」

それだけ言って悠斗は乾ききっていない血だまりを見つめる。

どうしてこうなったのか。いや、なることがまったく予想できなかったわけではない。ただ、それでもなるはずがないと思っていた。感情に流されずいつも冷静に行動してきた息子。愚は決して犯さない。そう信じていたからこそ背中を任せることが出来た。俺が何かをしなくてもあれは一人で何でもできる。俺がしてやることは何もない。

しかしそんな彼にも心はある。昔から、特に最近彼の中に渦巻いていた感情に気付いていた。考えすぎだと言ってやりたいほどの強い感情。一人前だからと言って放っておくことはできなかった。父親として甘やかしてやりたかった。

だが人間界に来て、神々との戦いが繰り返される中で、どうしても彼に頼ってしまう場面は多かった。あまりにも優秀すぎたから。それでも彼一人に背負わせるつもりはなかった。完璧でなくてはならないと思ったことはない。できればもっと自分に頼って欲しかった。我が子を支えるのは親のつとめだと思っていた。

しかし彼は完璧を求めてしまった。他人がどんなに優秀だ、完璧だと褒めても彼は決して満足しない。すべてが父の為に、父の為にすべてのことをしようとした。

だから自分の中にある感情を認められずにいた。否定された感情はなお彼の中でふくれあがりそして弾けた。

いや、弾けさせられた。

それに気付くのに、俺はあまりにも遅い。まだすべてを理解して

いない。なのに事態は俺の理解を待つてはくれない。

これからどうするべきなのか。いくつかの選択肢が存在する。しかし、遅ければ遅いほど選択肢は減っていく。そして最後には最悪の選択肢しか残されていないだろう。

だから今行動しなければならぬ。何をすべきかわからなくても。

「行くぞ、オルム」

邪神は再び飛び立つ。もう一人の息子連れて。愛する我が子を探しに。

かつて連れ去られた子供達を探しに一人で飛び立ったあの日。しかしあの日わかった居場所が今はわからない。

まるで絆が切れてしまったかのように。

フェンリルは夜の街を一人歩いていた。身体がとても軽い。昔身体を拘束していた鎖が解き放たれた時のような解放感。夜の風が心地よい。まるで自分の身体の一部のように。

閑静な住宅街を歩く人影はほとんどない。たどえいたとしても暗闇の中、彼の衣服に付いた赤い模様を見つけることはできないだろう。

そう、人はそんなことすらできない。脆弱で愚かで無能な生き物。そんなものにこだわる必要などない。最初からこうすれば良かったのだ。あんな簡単に死んでしまう生き物。邪魔ならさっさと消してしまえば良かった。なぜこんな簡単な答えがわからなかったのだろう。

フェンリルはすべてから解放された。すべてのしがらみから、悩みから、感情から。

踊りたくなるほどの高揚感。こんなに楽しい気分は久しぶりだ。普段家族以外の前ではほとんど動かさない表情が豊かに動く。歓喜に震えている。

フェンリルは自分の表情がどんなに歪んでいるかにまったく気付いていない。普段の彼からはまったく想像も出来ない表情だ。

彼の影がゆらゆらとうごめく。他の影と重なっても混ざり合わず、さらに黒い影がはっきりと形作る。血肉に酔う獣の形。

獣は理性など必要としない。食べたければ食べ、殺したければ殺す。その何が悪い。弱い生き物のくせに、たかが十数年の付き合いのくせに、私から父を奪う存在。ならば邪魔者は消してしまえば良い。

そう、今の彼は獣だ。鎖から解放された獣。誰にも縛られない、縛れない。縛ろうとすればどこかの神のように手を食いちぎられてしまう。

用意されたレールの上を歩くことは楽だ。考える必要もない。しかし自由はない。解放されたはずなのに実はまったく自由でないことに彼は気付いていない。

さあ次はどうしようか。まだ残っている邪魔者を消そうか。人も神もすべて消えてしまえば良い。私の世界を壊そうとする者は罰を受けるが良い。

傲慢な審判。裁判官も弁護士もいない審判に用意されるのは処刑の一つのみ。

黒がさらなる黒に染まる。漆黒の闇に飲み込まれる。

鎖から解かれた獣の行く末は、最初から決まっているのかもしれない。

第25話 殺害動機

家族とは一つの世界だ。宇宙と言ってもいい。男と女が出会い、子供を産み、育み、老いて死ぬ。そしてその子供がまた家族を作る。繰り返し繰り返し、世界は広がっていく。人は生まれた時から既に宇宙の中にある。

ロキにとってそれは零からの始まりであった。彼は自分に連なる血を知りながらも感じたことがなかった。ただ情報として父と母を知り、巨人族という枠組みの中に生まれた。だが彼自身父と母に親としての愛情を与えられたことはない。種族特有の関係性だったのかもしれない。とにかく血縁の絆はなく同じ種族という絆と枠組みだけがあった。だから家族という世界を知らなかった。

親は子を愛するもの、それすら知らずにいた。それを知ったのは皮肉にも巨人族と対立する神々の仲間に入ってからだ。当たり前のように愛し愛される世界に初めは驚きを隠せずにいた。それぐらいロキにとって家族という世界は不可解で異常なものに見えたからだ。それをうらやましかったのかと言えばそうでもない。得もなしに互いの為に生きるという生き方に彼は価値を見いだせなかった。得かそうではないか、それだけでしか見ることはできなかった。

それが変わったのは実際に家族を持つてから。心の底から愛する女性に巡り会えた。そして最愛の女性との間に子供が生まれた。自分と彼女の子。愛情の結晶と言える存在。不思議なものでそれがどんな姿をしている、自分と彼女の血を引いているだけで価値がまったく変わってくる。

他人の子は嫌いでも自分の子は別格。その意味を理解する。

家族を失うことは世界が壊れること。本当の世界が壊れるよりも、家族を失うことを恐れた。それが家族というものなのだろう。

彼女を失ったとき大事な世界の柱を一つ失った。決して埋めるこ

とできない空白が生まれた。だからこそ残された子達は何に変えても守ろうと誓った。

たとえ離ればなれになっても、絆が消えることはない。どんな姿をしても、何をしてでも愛し続ける。そう決めていたはず。
なのに、

ナゼ彼ハ我ガ子ヲ殺サナケレバナラナカタノカ

なぜ、と問われれば子はやりたかったからと答える。

ブラウン管の世界でも現実でも、簡単に人は人を殺す。殺すことは安易。その理由も、方法も。ただむかついたから、なんとなくという理由で誰かが誰かを殺す。人は簡単に人を殺してしまう。特に理由もなく人は殺される。なら失った命の価値は、重みは。

命は大事なものだから人を殺してはいけません。そんな子供でもわかると思われるルールが実は理解されていない。本当は知っているから。我々はいつだって何となく生きて、なんとなく殺して、なんとなく殺されるのだと。

復讐なんてたいそうな理由は必要ない。金なんて価値は関係ない。命なんてそんなものだ。いつだって他人の命は軽すぎて簡単に捨てられてしまう。

なんとなく、それは十分すぎる理由ではないだろうか。
欲望が理性に勝った時、そこにいるのは人ではなく獣。獣は本能のままに動く存在。だが、人が獣を殺す理由も、獣が人を殺す理由もたいした違いはない。

ただ殺したという結果だけが重要なのであって。

悠斗は神であった頃も今も、誰かを殺すことにそれほどの戸惑いや罪悪感を抱いたことはない。ただ殺すか殺さないかの選択肢だけが彼の中にあった。

今彼に与えられている選択肢は一つしかない。いや、一つしかない時点で選択肢とは呼べない。それは決定事項だ。

「私は彼らが嫌いでした」

子は自分にとっての神である父の前で告白する。

「私の大切な者を、いや世界を壊す彼らの存在が憎かった」

この礼儀正しい息子が誰かに向かって憎悪を抱くのは珍しいことではない。今までだって彼は抱えきれないほどの憎しみを傲慢な神々に向けていたのだから。

だがそれは矮小な人間に向けられるには巨大すぎる。ぶつけて壊しても、余りあるほどの憎しみはその対象だけでなく彼自身も傷つけるだろう。

憎いから、嫌いだから、生きているなら誰でも持ちうる感情。彼がそれを抱いたことに何の咎があるだろうか。あるとすれば、それを爆発するまで放置した彼の父のものだろう。

曇天の空は今にも泣き出しそうなくらい薄暗くどんよりとしている。夜の闇の方がまだ清々しいと思えるくらいに。

場所がどこであるかは関係ないが、一応人気のない開けた場所と言っておく。いつ降り出してもおかしくない天候だが二人とも雨具など持っていない。降り出した後のことなど考える必要がないかもしれないからだ。

子には選択肢があった。父を殺すか父に殺されるか。父には先にも言った通り選択肢はない。彼にとって未来を持続させるために他の道を選ぶ方法などなかったのだ。そして未来を持続させなければならぬ理由が彼にあった。

なぜ殺し合うという選択肢しか用意されていないのか。それは彼らが既に何らかの意志によって動かされる駒であるからだ。それは

悠斗がフレイに語った神すらも操る存在。それに気付いていた悠斗ならこの状況を回避する機会もあったはず。しかし彼はその機会を逃してしまった。

気付いたときには駒と化していた。そして一度駒となればもう取り返しはつかない。少なくともこの盤が終わるまで彼が退席するとはできないのだ。

父と息子の決闘は珍しくない。子は親を越えて大人になる。その為の手段として決闘はメジャーな方法だ。しかしこの戦いは少年の成長を促す為のものでもなければ復讐でもない。

対する息子の姿が既に人の形を保てなくなっていることには気付いていた。そしてもう理性を失っていることも。それに気付いたことも、既に取り返しが付かないことにも、頭の良すぎる悠斗にはわかっていた。不幸にも。

父の兄弟を傷つけたとき、フェンリルの中で優先順位が変化した。護ることから壊すことへ。一度変化した優先順位はもはや元に戻すことができないほど進んでしまった。もはや破壊することだけを目的とした存在。それは既に人とも獣とも呼べないのかもしれない。だが、それでも我が子であったものを、この手で殺せる父がいるはずもない。

ならばなぜ彼は我が子を殺すに至ったのか。ただ彼は言う。

愛していたからだ——と。

降り出した雨がすべてを洗い流す。血も汗も、何もなかったかのように。

二人の戦いはあまりにも凄惨で、あまりにも無価値なものに終わる。二人の間に言葉はない。言葉だけで解決するようなものなら最初から起こってすらいない。また息子には会話を成すだけの理性も知性も既になかった。彼を見つけたその時には、ただ一方的に言葉をはき出すだけだった。ぶつぶつと壊れたラジオのように、目の前にいる父親すら認識していかないかのように。

言葉が意味を持たない世界。だから悠斗も言葉を発することはない。肉体と肉体の触れ合いのみが意味を成す。殺し合いもセックスもその意味合いでは変わらない。ただぶつかりむさばり合うという意味では。

名の代わりに骨の折れる音が響く。制止の言葉の代わりに血の吹き出る音が血と共に溢れる。

悲鳴すらない。痛みの為に叫ぶことすらしない悠斗。それに代わるようにフェンリルが吠える、哭く。

骨が砕けた、肉が食いちぎられる。腕が身体から引き離される。

爪が肉を引き裂き、牙が身体に食い込む。

それでも、悠斗は何も言わなかった。

そして終わっても、何も言わない。

横たわる黒狼の毛は血と雨で濡れている。いくら雨が洗い流しても血は落ちきらない。悠斗もまた血と雨で濡れている。濡れていない所など一つもない。ただ顔から滴る水は雨のみである。

彼は泣かない。涙はとうの昔に流し尽くしたから。だから彼の為に流してやる涙がない。父は子の骸を前に泣くことも出来ずにいる。父として最後にしてやるべきことすらできない自分に怒りと憎しみが向けられる。

だが、今はただ悲しみと後悔だけ。

泣けない彼の代わりに雨が泣く。空より降る雫のすべてが彼の涙。泣いて泣いて。しかし彼は二度と目を覚まさない。

彼の世界はまた一つ欠ける。二度と埋まらない穴が再び穿たれる。一度出し抜いた驕りと余裕がすべてを遅らせた。気付いたときには既に遅し。

雨がすべて洗い流してしまえばいい。すべてなかったことになればいいのに。そんならしくもない考えが浮かんた。

そして別れは一つに終わらず。すべての別れの始まりでしかない。

君と共に生まれたこと。それが始まりではない。本当はもっと以前から。

君が僕であり僕が君である証。魂の繋がり。決して切れない縁。君は僕の過去。僕の現在、僕の未来。僕は君の未来、君の現在、君の過去。僕たちは鏡を見るかのように同じであり、コインの裏と表のようにまったく違う。だけど誰よりも近い存在。

一緒にいることが当然で、一緒に生まれたことが必然だった。僕たちは同じ目的の為に生まれてきた。始まりから共にあり、永遠に来ることのない終わりは決して僕たちを引き離しはしない。

永遠の時を共にしよう。それが必然、それが運命。なぜなら僕たちは一つであったのだから。君が成すことを僕が記憶する。君が成さなかったことを僕が成す。そのために僕は在る。

僕たちは仮初めの終焉をもたらすために生まれた。その為に僕たちは存在する。世界に悲劇を、世界に混沌を、復活の為の終焉をす

べての命に。

僕たちは嚆矢、僕たちは鍵、僕たちは閉幕のベル。

だから僕にとって不必要なものは君にとっても要らないもの。要らないものは消さなければならぬ。それも間近に迫る終焉の前に消える一つの石ころに過ぎない。

だから悲しむ必要なんてないんだよ。その悲しみもすぐに消えてしまう。永遠の前にはほんの刹那に過ぎないのだから。

さあ、最後の鍵はあげた。早く僕の元に辿り着いてね。僕にとってはほんの刹那でも君と離れることが苦痛なのだから。

浅葱幕は落とされた。僕たちの本当の黄昏が始まる。

第25話 殺害動機（後書き）

第五章 【黒狼が哭いた夜、彼の代わりに雨が泣いた】 終了です。

章末座談会3

フェンリル「というワケで、気まぐれで始まったこの座談会も三回目です」

悠斗「誰も期待してないと思うがな」

始「……待て」

悠「何だ？」

始「本編のシリアスさはどこへ行った。というか死んだ奴がなぜここに」

フ「失礼ですね。あなただって死んでるでしょ」

始「俺は死んでない！　　というか怪我させた奴が言うな、この犯罪者！」

フ「これは失礼。早とちりしてしまいましたね。――――（ボ

ソリ）ちっ、死んでれば良かったのに」

実「今何かキャラが崩れるようなセリフが聞こえた気がしたんだけど」

悠「気のせいだ。まあこういうオマケに本編は関係ないというのが鉄則だ」

桜「それはそうなんだけどねー」

悠「これはすべてフィクションです」

実「その通りだけと言っちゃダメ！」

ミドガルズオルム「だけど話が進むにつれメンバー減っていきそうだね」

悠「そうだな。本編を気にしてたらこんな悠長なことしてる暇はないな。最期には誰も残ってないかもな」

フ「そして誰もいなくなっただですか？」

悠「そう、それ」

始「縁起でもないこと言うな」

フ「次回辺りにまた誰か死ぬかもしれませんよ。たとえばHさんとか」

始「…それは俺に死ぬと言っているのか？」

フ「言ってませんよ。自意識過剰ですね」

桜「はいはいそこまで、本題に入るわよー」

題目？ 皆さんのプロフィールを教えてください

桜「なんか今更な気もするわね」

始「まあ今まで簡単な人物紹介しかしてこなかったしな」

フ「一応設定はあるんですが、作者がどこに置いたのかわからなくなってしまうているの でここでは簡単に。年齢がわかる方が想像しやすいでしょう」

悠「しかし何で他人のプロフィールなんて知りたがるんだ？ 無意味だろ」

始「それを言ったら終わりだろ。主人公最初に行け」

悠「面倒くさい…。大杉悠斗、歳は忘れた。人間世界では実と同じ。神だった頃は数えて ない。本名は邪神ロキ…以上」

実「それだけ！？ もっと趣味とか誕生日とか」

悠「覚えてない」

実「あのね…」

始「まあここで全員分言うのは時間が掛かりすぎるから簡単でいいだろ。次」

実「大杉実。十七歳、高校生。悠斗の双子の弟です。趣味は読書」

悠「マンガしか読まないだろ」

実「そんなことない！ 最近では北欧神話の本も読んでる！」

始「はいはい次は俺な。大杉始。悠斗と実の兄。二十歳、大学生。趣味は映画鑑賞。現在 入院中」

フ「早く（この世から）退院できると良いですね」

しれっと言うフエンリル。それを睨む始。

フ「フエンリル。人間名は黒川影行、ほとんど覚えてる人はいませんね。邪神ロキの息子 で長男です。尊敬する人は父上、嫌いなのは人間全般です」

実「今の問題発言では…」

悠「気にするな、次」

ミ「ミドガルズオルム、お父さんの子供！ 好きな人はお父さん！

苦手なのは怖い人（フエン兄）」

フ「失礼ですね。教育的指導をしているだけなのに」

ミ「何で僕が思ったことわかるの！？ というか既に怒ってるじゃん！」

フ「怒ってませんよ。ただ言葉遣いの悪い弟に摂関をと思ひまして。私だって本当はこんなことしたくないんですよ？」

ミ「嘘だ！ 絶対嘘だ！」

逃げるミドガルズオルム。それを捕まえるフエンリル。

実「あちらの兄弟喧嘩（？）は放っておきましょう。次」

ヘル「ヘル。お父様の娘で、兄様達の妹です…。好きな人はお父様。

理想はお母様です」

始「なんか言ってることが兄弟で同じだな」

悠「よくできた息子達だろ」

始「ただのファザコンだろ。次」

桜「倉本桜。十七歳、高校生。実達の幼馴染みです。趣味はシヨツピング。至ってノーマルの人間です」

始「俺たちだってノーマルだ」

桜「そうかしら？」

実・始「……」

題目？ 作者に希望することは？

ミ「次こそ出番！」

始「前回も言ったな。俺はとりあえず復帰を」

フ「大丈夫ですよ。回想で登場できますから」

始「…それはおまえの方だろ」

フ「私は父上達の安全です（どこかの死にぞこないが死ぬこと）」

桜「私もほとんど出番無いからなー。でも下手に出番あるとろくな目に遭わないから平穩 かな」

へ「家族みんなで過ごせれば良かったのに…」

実「何だか暗くなってきたな。僕はなんか不思議な立ち位置みたいなものでもう少し穏便に」

始「悠斗は？」

悠「死ね」

第26話 君に別れと感謝の言葉を

過去の真実など意味のないものだ。たとえ過去明かされなかった謎が解かれたとしても、それによって得るものは何もない。

死者は生き返らない。失ったものは戻らない。だから過去は過ぎ去った時点で不変のものとなる。未来が過去を変えることはない。今このときでさえ、流れる時は止まらずゆるりゆるりと我々の横を通り抜けていく。掴もうとした手は何も掴むことはない。

悠斗にとって過去は今現在を作り上げたものだ。だから過去が大事じゃない訳じゃない。

過去の真実を知ることによりこれから起こることを予見する。さらなる悲劇を防ぐために。そう、何かを成すことができるときのみ過去の真実は価値を持つ。

しかし何も変えられなかった。所詮この身は操り人形でしかないのか。糸を切ることはできないのか。

もう、何もできないのか。

今更過去を明かしたところで何になる。護りたかったものは護れなかった。過去の真実は未来へ繋がるなら意味も持つだろう。しかしそれ以外に於いては諸刃の刃だ。知ることにより変化する未来。それは時に知らぬ方が良かったと後悔する。

過去はパンドラの箱だ。いらぬものと必要なもの、両方が入っている。時にそれは希望すらも飛び出てしまうだろうが。

なら、俺は間違えたのだろうか。自ら最悪の事態を呼び込んでしまったのではないだろうか。水の流れにあらがえばほとんど前に進まず、流れてくる流水は自身の身体を傷つけるだろう。結局俺はあいつが望んだとおり流水をせき止める岩になっていた訳だ。

自分の愚かさに笑いが止まらない。

むなしく笑う彼の姿にどんなときも威風堂々としていたかつての

姿は見当たらない。ただ我が子を自らの手で失わせひからびた父親の姿がそこにあった。

「ひどい顔だね」

子供たちでさえ声を掛けることが出来なかった彼に、躊躇無く声を掛ける人物がいた。それは決してありがたい来訪者ではなかったが。

悠斗はじろりとらみつける。しかし客はまったく動じない。それどころか珍しいものを視たと言わんばかりだ。

今この部屋には二人しかない。子供たちは父に何を言っているのかわからず、張り詰めた空気に耐えきれずしばらく前に出て行った。それすらも彼への気遣いだ。

それが嬉しいと感じることができず、ただ悲しく虚しかった。

いつそのこと責めてくれれば楽だった。しかしそれを彼らがしないこともわかっている。いつだって彼らは父の味方であったのだから。

たとえ彼が兄を殺したのだとしても。

許可も得ず客人は悠斗の正面にあるソファに腰を下ろす。悠斗はそれに文句を言う気力すらなかった。

数分の間、二人は何も言わず悠斗は睨み、相手はその顔をのぞき込む。

「君の口がここまで閉じていたことなんてあったかな」

数分の後に出たのは相手の方からだ。悠斗は今日一日ほとんど口を開いていない。食事すら摂らず、ソファに寝転がっていた。それも含めてのことなのだろうが。

「……」

やはり悠斗は何も言わない。視線だけで追い出せるならとうにできていると言わんばかりの視線だ。あいにくそれで追い出されるほど空気を読める男ではないが。むしろ図太いと言えるほどだが。

悠斗が何も言わないので男が言う。

「欺瞞の神の君が何も言わないなんて貴重だね。何か言われれば三

倍にして返す男だったというのに」

何とも不拔けた姿だ。そう男は言った。

それにすら何も言い返さない悠斗に男はもはやあきれ果てた。

「そんなに御子息の死がショックだったのかい？ 自分で」

殺しておきながら。

そう続くのを止めるほど、悠斗の視線は鋭くなっていた。視線だけで殺してやると言わんばかりに。

そして今度こそ重い口を開く。

「お前に何かを言われる覚えはないフレイ。死にたくなかったらとつとと出て行け」

「ようやく口を開いてくれた。それでこそ君だ」

辛辣な言いぐさにも関わらず、フレイは堪えていない。むしろ喜んでいいる。彼が彼らしくあることをなぜ喜ぶのだろうか。

「この間会った時の君は不安定ながらも芯はしっかりしていた。ピースを得ても、それをどう使ったらいのかわからないという感じだ。でも今の君は考えることを放棄している。君らしくもない。策略の神であつた君が思考することすら投げ出すとは、ツール達が見たら何と云うだろうね」

笑うだろうか、驚くだろうか。この抜け殻をあつた邪神と信じられるだろうか。しかし悠斗の姿勢は変わらない。

「勝手に言わせておけ。酒の肴にするのも世間話のネタにするのも勝手だ」

たった一つ失っただけで、世界の価値は失われる。そこに生きる者たち、そして自身でさえもどうでもよくなってしまう。

未来のために彼を殺したのではない。だから未来に興味は沸かない。そこにある価値など感じられない。

生きることすら価値を見いだせない。まだ自分には護らなければならないものが残っているのに。だから未来を選んだのに。

しかし後悔さえしている。しないはずがない。愛する我が子を殺したいと願う親がどこにいるのか。

止めるのが親の責務だと思った。これ以上狂わせてはならないと知った。本当は未来など関係なかったのかもしれない。ただ、彼がこれ以上彼でなくなっていくことに耐えきれなかったただけなのかもしれない。

だから後悔しているのか。

何もする気になれないのだ。すべてが無駄に思えて。

神などえらそうな名札に過ぎないではないか。何もできなくて、愛する者も護れなくて何が神だ。そして神はいつだって気まぐれで無力だ。それをよく知っているから、彼は誰にも祈れない。

今までにないほどの自暴自棄な悠斗にフレイは本気であきれ果てる。もはや笑う価値すらない。

「以前言っていた、私たちを操る存在。それに対して何かできることはないのか？」

「盤上の駒に何ができる」

「反抗はできる」

「微々たるものだ。それこそ俺たちは簡単に換えの効く駒なのかもしれない」

あの時のように。「ロキ」という駒の代わりがいたように――――？

「ロキ？」

突然勢いよく起き上がった悠斗にフレイは驚く。しかし悠斗はその言葉を聞いていない。今感じた疑問を考えることに没頭している。あの時、「ロキ」という駒は差し手の言うことを聞かなかった。しかし彼がすべき事は成された。誰によって？

ロキによって？ 違う、だって俺はあの時動かなかったではないか。記憶があっても、俺の肉体は間違はなく外に出ていなかった。一歩たりとも。

事実と真実の食い違い。なぜもっと早くに気づかなかったのか。あの時、記憶を持つてはいても、それは間違いなく他人の経験だったはずだ。俺の肉体は一つしかない。精神だけが動いてバルドル

を殺した？ それはない。俺にそんな力はない。精神だけで何かができるはずがない。

物理的な行為をするには肉体が必要だ。なら、自分に代わって動いた肉体は誰のものだ？

バルドルを殺したのは俺じゃない。なら、誰が殺した？ あの時動くはずだった邪神の代わりに動いたのは誰だ？

代わりなんて誰にでもできるわけじゃない。誰かが行った経験は俺のものとなっていた。それは俺とその代役が近い存在、いや同じだからじゃないのか？

そう、それは鏡面に映る己の姿のように――。

一つの推測が頭に浮かぶ。そんなはずないと否定する声が挙がる。しかしそれすらはじき飛ばすほどの強い直感がある。

『一緒にいるのが当たり前なんだ』

人の身でありながら運命を口にしたまったく似たところのない弟が言った。

『僕は悠斗と一緒に生まれたのは運命か、特別なものだと思ってる』
『たとえば悠斗がどこへ行こうとも、何をしようとも、最後に一緒にいるのは僕だと思ってる』

『初めて君に出会った時、僕の心が言ったんだ』
『『やっと会えたね』って』

枯れ葉の向こうにあった似姿に問う。お前なのか、と。

思い立つと悠斗はすぐ立ち上がり電話を取る。部屋にいるフレイの存在など眼中にも入らないかのような、そしてその顔は緊張と驚愕に溢れている。

繰り返されるコール音が長く感じられた。早く出ると急かす思いと、このまま先延ばしにしてしまいたいという相反する思いが頭の

中でぶつかり合う。

それが良かったのか、悪かったのか。電話は数回のコール音の後繋がる。

『もしもし？ 悠斗？』

出たのは幼馴染みの少女だった。

「なぜお前が出る。実はどうした」

悠斗がかけた相手とは違う人間が出たことに違和感と嫌な予感が加わる。

『いないのよ、昨日の晩から。ケータイも財布も全部置いていって』

それはもはや答えを言っているのと変わりはないのではないか。

彼の不在がすべてを物語る。ただ、彼が誰なのか、その答えだけが導き出されていない。

『始さんは変わらずよ。意識も戻ってない。今はおじさん達が付き添ってる』

そういえば彼らがいたなど、今更ながら思い出した。既に縁を切ったかつての両親に未練などない。それでも、あの二人にとっては他にない両親なのだ。

子を奪われかけたことに、彼らは何と言うだろうか。自分なら当然許せるはずもないが。

しかし断罪する相手は既にもいない。真実は人の身には知られることのないまま迷宮入りとなるだろう。

親は憎しみや悲しみをぶつける相手を見失う。

『ねえ悠斗、聞いている？』

「ああ：聞いているよ」

『悠斗……実、帰ってくるよね？』

常に明るさを失わない彼女の不安げな声に、悠斗は少なからず驚いた。こんなに弱々しい彼女を見たことがないからだ。

『実、最近変だった。どこが、と言われても困るけど、時々別人に見えた。いなくなる前、一瞬だけ、見間違いだと思うけど、顔も全然違う人に見えたの。外人みたいなの……』

似ていないはずの兄に似ていたのだと。

『悠斗……実は違うよね？ 神様とかとは関係ないよね？』

付き合いが長いだけにその変調に敏感に気付いたのだろう。そしてこの先にある未来が決して明るいものではないことに。

『私……悠斗の時みたいで、実のこと忘れたりしないよね？』

それに当たり前だと答えればいい。しかし悠斗は嘘でもそれが言えなかった。欺瞞を司る神であったのに。

「桜、忘れた方がいいことも世の中にはある。俺のことも、もしかしたらあいつのことも」

『悠斗？』

「俺の甘さが今回のことを招いたのなら、俺は完全に切り離すべきだった。自分が人ではないことを忘れていた」

『悠斗？ 何を言ってるの？』

「もしお前達がすべてを忘れてしまっても、俺やあいつがいたという事実は消えない。それが本来歪められた現実であったとしても、お前達と過ごした時間は俺達の中に残っている。だから無駄な事なんて一つもない」

『悠斗？ ちょっと待って』

「お前達に会えてよかった」

この会話すらいつか忘れてしまうかもしれない。だが、俺は憶えている。たとえそれが一瞬であっても、刹那であっても、その時間が存在したことを打ち消すことはできない。

悠斗は一方的に会話を切り、電源を切る。そしてその電話を叩き壊す。

激しい音と共に無惨に碎かれた電話は二度と繋がらない。何処にも。

そしてそれは悠斗にとっての決別の証でもある。優しく穏やかだった人との絆。それを自ら断ち切る。

「それで良かったのかい？」

何も聞かずともわかっていた。だからこそフレイは尋ねた。しか

し悠斗の顔は吹っ切れたかのようにすっかりとしたものだ。

「甘えるわけにはいかない。それに今までの時間が消える訳じゃない」

楽しかった時間も苦しかった時間も、すべて記憶している。それらが与えてくれた形無きものは悠斗の中にある。

「元々俺達の問題だ。人間を巻き込む方が間違っている」

「彼らは納得しないと思うよ」

「それでもだ。失いたくないからじゃない。俺はすべてを捨ててもやらなければならないことがある」

これから自分がしようとしていることは愚かと言える行為だろう。またさらに大事なものを自ら手で壊そうとしているのだから。

「真実にそこまでの価値があるのか？」

「ないだろうな。その為に失うものの価値と比べれば、比べる意味すら感じられないほどに」

だが、

「このまま安穩とした生活が送れるはずもない。俺が何もしなくても奴らは待ってくれない。その時無知なままであるか、知って何かをするのかの違いはある」

「すべて抱えたまま消えるという選択肢もあるよ。一度知ってしまった、知らなかった頃には帰れない」

「それこそ俺達の生きた時間が無駄だったと言われる。どうせ消えるなら俺は最後まで足掻くことにする。誰かの決めた生き方をするなど我慢ならない」

「知らなければ、それが誰かの定めた道とすら気付くこともなかったのに」

「それは人間がすることだ。俺はもう人でも神でもないが、だからこそできることがある。何もしないままよりは無様であっても自分に誇れる生き方を俺は選ぶ」

一度始めてしまえば二度と引き返すことができないだろう。最後にはすべてを失うに違いない。それでも。

「俺は前に進む。未来のためにじゃない、自分が何であったのか、その答えを得るために俺は真実を求める」

何も残らない。だが、自分に恥じる生き方をしなかったために。

もう止めても無駄なのだと眼が言っている。フレイは大きく息を吐き出した。

「：何か、私にしてほしいことはあるかい？」

中立を保っていた彼の申し出に驚きながらも、やはり情にあついことを確信する。

「あいつらのそばにいてやってくれ。これ以上、誰にも干渉されないために」

「：わかった」

悠斗の横を通り抜け外へ出ようとしたフレイの耳に、信じられない言葉が入る。それは彼との長い付き合いの中で一度も聞いたことのないもの。

それが嬉しくて、笑みで返す。

そして別れを。おそらく二度と会うことのない友人に。

きっと忘れない。この瞬間を。

『ありがとう』

たとえば私が世界の終わりと共に散りゆく運命にあったとしても、最後の一片になるその時まで、忘れはしない。

第26話 君に別れと感謝の言葉を（後書き）

第6章 原稿の上で踊る神々と零れたインク
開始です。

第27話 邪神と王

残された子供たちは、父の決定に逆らうことはなかった。ただそこに不安と疑心はあった。しかしそれでも最後には父を信じ従ってくれた。

もったいなさ過ぎるほどよくできた子供たち。彼らの父であったこと、ろくでもないことが多かったこの人生の、二番目に幸せなこと。

兄妹はこれが最後となることを知り別れの言葉を交わす。魂は永遠に一緒であっても、もう二度と触れ合うことはできないことを知っているから。ぬくもりを永遠に残すつもりであるように力強く抱きしめ合う子らの姿を見守る悠斗。失わなければ進めない道。今日このときをこの先何度も思い出すことになるだろう。そのたびに情けない父であったことを詫びるのだろう。だが、決して後悔はしない。そのために覚悟したのだから。

最後の挨拶を終えた子らが名残惜しく互いの身体から離れる。

娘が力強い眼で父と正面から向き合う。それは決意。父よりも彼女の方がよほど強いかもしれない。きっと彼女に似て。

娘が手を差し出す。これを握ってしまえばもう二度と後戻りはできない。しかし、既にその道は自ら絶った。道は前に進む以外残されてはいない。

差し出された手を握る。包帯によって隠された痛々しい肌。しかし、そのぬくもりは、彼女のものに似ていた――。

記憶を本に例える人間がいた。ならば脳内とは図書館のようなものなのか。

人の人生を双六に例えた人間がいた。ならばその上がりは死でありそれ以上はない。

人生の分岐点を扉に例える人間がいた。ならばその鍵がなければどうするのだろうか。

それらが合っているのかどうか悠斗は知らない。

ただ、悠斗にとって記憶とは絵であり、人生とは歴史という名の巨大な絵の一部分に過ぎない。分岐点は色の変わり目だろうか。

そう、神の記憶は絵であり、神話が描かれるならそれは壁画などに描かれるような壮大で神々しいものでなければならぬ。

今悠斗の目の前を通り過ぎていく絵はまるで壁画を切り取ったようなものから、美術館などに飾られているような豪華な絵ばかりだ。もしかしたら人のイメージなのかもしれない。神話を切り取ったような絵。それはさながら挿絵のようなもの。こんな絵の一つ一つに「ロキ」であった頃の記憶が眠っている。

ここは記憶の水底。未来を見通す者にしか入ることは許されない場所。悠斗がここに来るのは二度目になる。一度目は黄昏の直後。死んだと思った次の瞬間にはここにいた。彼女が導いてくれた。神々の手の届かない所に。

未来を予知する力を持っていた彼女。彼女は自分の終わりを予感していたのだろうか。

そして今、悠斗は娘・ヘルの力を借りてここにいます。「死」という未来を司る彼女の力。しかしそれは母ほど強くはない。

本来「死」という未来は時間の中でそれほど強いものではない。だから彼女にはここへ来るための力が足りない。それを補うために彼女が用意したもの。

それを使い果たすまでに見つけなければならない。その先にあるものを無駄にしないために、意味あるものにするために。

悠斗は落ちる。記憶の海をゆっくり、ゆっくりと、あらがうこと

もなくただ身を任せて。

一つの絵が光り記憶が頭の中を横切る。また他の絵が踊り出し悠斗の脳へと飛び込んでくる。そうやって無理矢理己の記憶、そして神の記録を遡る。

そう、これはまだ神が人の上に立っていた頃のお話。埃を被った、懐かしいというには優しくない昔話。

『おもしろいな、お前。神とはこうも強欲なものか』

さらなる知識を追い求める強欲なる神の前に姿を現したその姿。日の光を惜しみなく受け輝く金の髪。空よりも海よりも鮮やかな青い瞳。芸術家が見れば絵に描いて永遠に残すだろう美しい造形。それは神よりも美しく、しかしそこに刻まれる笑みは幼い。新しい玩具を見つけた子供のように。

『お前は力、俺は退屈を紛らわす為の娯楽。欲するものは違えど利害は一致している』

そう、彼は退屈していたのだ。何十年何百年ただ巨人族という枠組みの中で変わらない時を過ごすことに。

それを変えるためなら今まで敵対してきた神の仲間になっただけのため。ただこの男が気に入ったというそれだけのために。

それは一人の邪神の誕生。一人の男が神話の舞台に姿を現した瞬間であった。

そこは神の手が行き届かない地。そこに住むのは巨大な肉体と力を持つ者たち。神の敵という枠組みに生まれてきた者たち。

うっそうとした森に生える木々は彼らの故郷では見ぬ植物ばかり。

空を覆い隠すほどの緑の傘は大地に日の光を与えない。そんな薄暗い森の中を歩くのは無謀な冒険者たち。

敵地であるにも関わらず堂々と先頭を歩くのは最強を自負する戦神トール。その後ろをびくびくとおびえながら歩くのは旅の途中で部下にした青年シアルヴィ。彼らの後ろを退屈そうにあくびをしながら歩くのは北欧神唯一の邪神であり欺瞞の神・ロキ。後に「大杉悠斗」と名乗る男の過去の姿である。

彼らが今いるのは先ほども述べたとおり神々の宿敵・巨人族の住処ウトガルドである。

なぜ彼らがたった三人――シアルヴィは途中から加わったので正確には二人である――で敵地に乗り込んでいるのか。それはひとえにトールの慢心と気まぐれから起こった。

戦いの神である彼は不必要に戦いを求めた。本来ならただの乱暴者と非難されるべきだが、彼にとつて幸いにもこの世界には定められた敵が存在した。そんな敵にけんかを売ることが勇敢であつて愚かではない。なぜなら敵が倒されることに文句を言う者などいるはずもないからだ。

しかしトールは勇敢で強いがその分というか、頭は決して良くない。だから彼一人で行かせるのは余計なトラブルまで引き起こすきっかけになりかねない。

この傍若無人の息子を唯一止められるはずの父・オーディンも敵を倒そうとすることを止められるはずもない。だからブレーキ役として彼の義兄弟・ロキを同行させることにした。

この頃の二人の関係は悪友のようなもので、決して悪いものではなかった。ロキも最強の神をわざわざ敵に回すことはない。むしろ単細胞のこの神を利用した方が得であると考えるほど知恵が回った。なので結局オーディンの命令もあり渋々トールの戦道中に参加することになった。

ロキは基本的に面倒くさがりであり、自身の興味に触れないものに対してはほとんど無関心であると言っている。なので今回の旅に

も消極的であった。神としての使命感などかけらもない。さらに彼は元々巨人族の出身である。積極的になるはずもないのだ。

ならばツールを裏切るような真似や、巨人族を保守するようなことをするかと言われれば、それはないと断言できる。なぜなら彼には神や巨人族といった種族の誇りや確執とは無縁だからだ。そういった枠組みでくくられることを受け入れる人物ではない。

なので今こうやって裏切り者の立場でありながら再びこの地に降り立ったことに罪悪感などは存在しない。彼には最初から持ち合わせていないのだ。

さらに言うなら彼はたびたび他の神々に知られずこの地を訪れている。愛する家族に会うために。そして、もう一つの理由がここにある。

それについてはまた後ほど。

とにかく彼らは巨人族の本拠地へと踏み行っているのだが、何ともでこぼこなメンバーである。一人は意気揚々と歩き、一人は怯えながら周囲を伺い、一人は退屈そうにあくびをしている。

旅の途中でもいろいろあったが、ツールの勇敢な（無謀な）行動により怪我一つなくここまでやってきた。そして今、ようやく彼らはウトガルドの王城を前にしている。

「ようやくここまでやってきたか。道中は思った以上に手応えのないものだったが、ここでは期待したいものだ」

まだ立派な黒ひげと壁を思わせるような体格を誇っていた頃のツールは、今と変わらずその戦意を高ぶらせている。ロキからすればただの蛮族であるが。

（適当にあしらわれていた場面もあったと思うが。なかったことにしたいのかそれとも本気で気づいていないのか）

その可能性もある、と過去と未来の二人が同時に思う。彼もまたたいした違いを示していないようだ。

神々にとって時間とは気づけば通り過ぎる無口な隣人に過ぎない。だからそこに変化を求めることも、それによって生まれる価値も見

いだすことはない。ロキ自身、そうであった。

（だが今は違うと断言できる。フレイに言われずともわかる。俺は変わった。だがその変化が悪い意味ではないとも断言できる）

変わりゆく時に置いてきた者たち。そこに価値がないとは言わせない。それは時に未来よりも価値があり、さらなる未来を生み出す。

（昔をやり直せたら。そんな人の願いを笑っていた頃の”俺”があれだ。あの頃の”俺”が今の”俺”を見たら、何と言うだろうな）

過去の自分を時に浮遊しながら、時に過去の自分と重なりながら見る様子はまるで自由に視点を変えることのできる映画だ。

もし映画なら三流に過ぎないが。

（この頃に記憶は俺だって覚えている。フェンリルたちが捕縛され、彼女が死んで間もない頃だ。そんな時期にくだらん提案をした筋肉馬鹿を殴り飛ばしたくなったものだ）

それでもその筋肉馬鹿につきあったのは主神の命があったからだけじゃない。元々彼の命を聞く義務はない。

このときこの馬鹿騒ぎにつきあったのは、もちろん理由があった。神々へのささやかな仕返しだ。神々の切り札であり、おそらく息子たちを捕縛するのに関与したであろうこの男に恥をかかせてやりたかったのだ。

ロキは知っていた。トールの戦道中が失敗に終わることを。

巨大なトールよりもはるかに高く巨大な門。その重厚な雰囲気は一人たりとも通さぬと言わんばかりにそびえ立っている。

まずはこの門をどうにかせねばならぬのだが、周囲に門番はおろか、人影すら見当たらない。城の周りは静まりかえり、鳥のさえずりさえ聞こえない。三人以外の生き物の気配は感じられない。

城の中がどうなっているかは外からはまったくうかがえない。重

厚な門と頑強な石壁がすべてを遮断している。

「で？　ここまでやってきたのはいいが、これからどうするんだ？」

「何を言っている。何のために来たと思ってるんだ」

「巨人族に喧嘩を売りに来た」

「違う！　これは戦争なのだ。いずれこの戦いが憎き奴らを滅ぼす序曲となるだろう」

自信ありげに演説するトール。

珍しく彼にしては頭を使った会話かもしれないが、結局根本が馬鹿のままだ。たった三人で何ができるというのか。

トールにとっては自分一人でもできると思っているのかもしれないが、仮にも神々の宿敵である巨人族がたった三人にやられるようならとっくの昔に終わっていた話だ。それすら考えつかないのはよほどの自信があるのか、それとも楽観的なのか。

（両方だな。間違いないく）

やはり過去と未来の異なる名の自分が同じ答えに行き着く。案外自分で思っている以上に変わってないのかもしれない。

「目的はわかったがどうやって。この門をどうやって開けるんだ。呼び鈴はなさそうだなぞ」

「こんなもの、俺様のミョルニルで一発だ！」

そう言ってトールが取り出したのは巨大な槌だ。トールを最強たらしめる要素の一つであり、最大の武器・ミョルニル。小人たちが作り出した地上最強の兵器だ。一降りで起こる雷は地を焼き払い、一降りで岩をたたきつぶす。

これがあるからこそトールは最強の戦神でいられる。しかし敵陣とは言え、いきなり門を壊して押し入るのが賢い選択とは到底思えない。

「なんでお前はそう短絡的なんだ。それでは強盗と何も変わらん」

「我々が正義なのだ。そんな罪人と同じであるはずがない」
話にならない。

三人――正確には二人が問答していると、それまで沈黙を保つ

ていた門が、何の前触れもなく、その重厚な作りに反して軽々と独りでに開いた。

突然のことに驚き、呆然とし、そしてようやく警戒を始める。しかし門の先、城内で三人を迎えたのは一人の若い女性であった。

「ようこそ、ウトガルド城へ。我が王がお待ちです。どうぞこちらへ」

女はただ機械的に、人形のような顔の唇だけ動かした。そして三人の返事も聞かずにびすを返して奥へと歩き出した。

「おい、貴様どういふことだ！」

「無駄だツール。彼女は何も答えない」

「どういう意味でしょうか？」

それまでほとんど口を開かなかったシアルヴィが主に代わって質問する。

「あれはただ主に言われて俺たちを案内するだけだ。質問に答えるような命は受けていない。巨人族というのは基本的に王に忠実なんだ。彼女をよこしたということは、この城の主が俺たちを招いたということだろう」

だからここで問答しても無駄だ。

「なら貴様にも忠誠心というものがあるのか？」

そう何かを含んだ問いは、間違いなく疑心が込められていた。

当然と言えば当然だ。むしろ今まで何も言わなかったことの方が驚きだ。

今もって尚、ロキの出自を気にする者は多い。今まで敵対していた巨人組に与していた者が、突然寝返ったこと。いや、ロキからすればそれは寝返りであるはずがない。なぜなら、彼を縛る枠組みというものは存在せず、両親から受けた血に未練などあるはずもなかったからだ。

ツールの問いに、ロキはニヤリと笑みを返す。

「今ここで俺を疑うということは、お前の敬愛する父親の判断を疑うという意味だ。まさかそれはあるまい？」

そう言われてしまえばどんなに怪しくてもそれ以上疑うことはできない。主神の決めたことは絶対だ。そう、神々にとっての『神』であるのだから。

神でさえも何かに縛られている。何かを信仰する。それに疑問すら持たない。あのオーディンでさえも、きつと何かに縛られている。(俺たちは何かに縛られなければ生きていけないのか)

自由とは無謀な冒険でもある。大地の保護を自ら失い、すがる藁すらもない中空へと放り出される。それを求めることを愚かと言うべきなのかもしれない。

だが、自由の先にある未来を得たかった。縛られたままでは得ることのできない、本当の未来を。

(だがそれも叶わない。得るのは何の得にもならない真実だけか) まだこの頃の自分はまだ知らない。自由を求めた先にある、さらなる地獄を。

(それでも、俺は――)

王は沈黙を持って来訪者を迎えた。巨人族がひしめき合うホール。その中で巨人族という名に相応しくない相貌の男。人間並みの身長と体格しか持っていない彼を、だれが巨人族の王と信じるだろうか。それでも王は生まれた瞬間より王であった。ただ定められたままに。

仮面によって隠されているはずの素顔を、俺は知っている。

ああ、弟よ。お前の言っていたことは正しかったな。確かに俺たちは共にいるべき運命だったのだ。俺はお前であり、お前は俺であった。鏡面に映る自身の顔に違和感を持つ人間などいないだろう。

俺がお前だったのか、お前が俺だったのか。どちらが先かなど覚えていない。ただ、俺たちは一緒だった。同じ運命の下に生まれし命だった。

あの日、道が違えるあの時まで――。

第27話 邪神と王（後書き）

長くなりそうなのでいったんここで切ります。

突然世界観が変わり違和感を感じておられるかもしれませんが、私自身が一番なじんでいません（笑）。

それでもこの作品を書く前から書こうと思っていた場面の一つなので、ようやくここまで来たという達成感もあります。すでに真実は目の前にあり、あとはボールをはぐだけです。ミステリーで言う犯人を名指しする場面でしょうか。ミステリーならそこで終わりかもしれないませんが、真実を知った彼の最後のあがきが残っています。です。この章は真相を知ることが目的で、次章があがくための話になります。よければそままでおつきあい願います。

第28話 邪神の戯れ

王は突然の来訪者に文句の一つも言わなかった。最初からそのことを予見していたかのように。いや、実際にしていたのだろう。この国に於いて、彼は誰よりも万能であるのだから。

だから無謀に乗り込んできた三人の神々など、子供をあしらう程度の雑作しか必要ない。

まず、ここが敵陣のど真ん中、それも敵に囲まれた中であることを全く気にしないかのようにトールが威風堂々と宣言する。

「貴様が巨人族の王か！」

玉座に座っているのだからそうに決まっているだろう、とは誰も言わない。

「確かに、私がこのウトガルドの王だが」

その声は誰かに似ているようで違う気もする。記憶に残らない声と言うべきだろうか。まあ、わざとそうしていたのだが。そうしなければこの鈍い馬鹿でも気づくかもしれない。

思惑とは関係なく、やはりトールは全く気づく様子がない。

「巨人族というわりには、王であるお前が一番小さいのだな」

ある意味失礼とも言えるべき発言にシアルヴィの貧相な胃はキリキリと痛む。ロキはあきれてため息を吐く。

「トール、でかければ偉いというものではない。そもそも巨人族とは呼ばれるが、全員が巨体であるわけではない。」

それは神々と変わらぬサイズのロキを見ればわかるだろう。周囲の巨人族たちがクスクスと笑う。飽きない見世物だ。

ロキの解説すら筋肉だるまの脳には届いていないらしい。

王は招かれざる客人の無礼な発言を笑って許した。

「ようこそ、アースガルドの神々。それで？　こちらには何の用で

？ 私の記憶が正しければ、私は君たちを招いた覚えはないのだが」
「決まっている！ 貴様ら巨人族を成敗しに来たのだ！」

よくもまあ、敵陣の真ん中で堂々と言えたものだ。もはや賞賛に値するのか、それともやはり救いようがない馬鹿なのか。

しかもそれを目的にやってきたのはお前一人だ。というかお前は
いちいち語尾に「！」を付けないと気が済まないのか。

いわゆるツツコミと呼ばれる者が過去・現在の二人の心中に広がるが、口に出さないのは無駄だとわかってはいるからだ。無駄なことはしない主義なのだ。

馬鹿丸出しの発言に周囲の巨人族は大笑い。良い見世物だ。シア
ルヴィの脆弱な心臓は今にも止まりそうだ。

トールは当然笑われたことに反応したがロキがそれを制した。応
じれば余計笑いものになるだけだ。

実際巨人族たちからすればこれはただの余興に過ぎない。たった
三人の神々に恐れることなど何もないのだ。檻に入れられた鼠をど
う遊ぼうが、それすらも自由だ。鼠の方が頭は良いのかもしれない。
少なくとも自分から檻に飛び込みはしないのだから。

巨人族は余裕だ。戦う気すらない。ただ遊んでいるだけだ。

そう、これは戯れに過ぎない。巨人族にとっても、ロキにとつて
も。

「勇敢な神よ、あなた方はたった三人で敵地へと乗り込んできたわけだが、あいにく我々は檻の中の鼠をいたぶる趣味はない。そして戦いよりもゲームが好きだ。そこで提案だ。あなたは我々を倒したい。しかし我々に戦う気はない。しかし勝敗がつかなければあなたは納得して帰りはしないだろう。私もあなたに帰ってもらわなければ困る。だからゲームをしないか？」

「ゲーム？」

あしらわれていることにすら気づいていないのだろうトールは、
単純に敵の言葉を聞く。

大丈夫なのか、神様。

「そう、ゲームだ。いくつかゲームをして勝敗を決める。あなたは自信があるのだろうか、ここで命を取る戦いを繰り広げてでも無駄に血を流すだけだろう？ ゲームに勝てば、それはあなた方が我々より勝っているという証になるんじゃないだろうか」

ようは戦う気がないからゲームでもして満足して帰れ、ということ。構ってもらいたがる子供をあしらっているに過ぎない。まあ、この筋肉だるまはそれにすら気づかないのだろうか。

「よからう、しかし我々が勝ったのなら、その証をもらおう」

「どうぞ、私の首でも何でも。こちらが勝っても何も要求はしませんよ。あくまで客人を満足させるための催しなのだから」

それは、このゲームの勝敗が最初からわかっているからの発言だ。たかがゲーム。その目的は勝つことでも、得ることでもない。

ただの嫌がらせだ。

ここまででははっきりと覚えている。

ロキは確かにツールたちの戦道中につきあった。だが、そんな無謀とも言うべき旅に同行したのは主神の命があったから。そう思っていた。

だけどそれだけではない。これはロキの策略の一部であった。ただこの馬鹿の鼻っ面をひっぱたいてやりたかった。彼女を殺し、子供たちを奪った神々への、ささやかな復讐だった。彼らが最強と認める神々の最終兵器。それが敵である巨人族に軽くあしらわれること自体が、神々のプライドと自信を大きく傷つけるだろうと。

そう、それが本当の目的。忘れてしまっていた。旅の終わり、どんなに心がすっきりしたかを。悔しく顔を歪めるツールを内心で嘲り笑っていたことを。

すべて忘れていた。その策略のカラクリすら。

巨人族側に協力者がいなければ成り立たない計画。ロキが頻繁に

ウトガルドへ来訪していたもう一つの理由。
自分と彼が、一緒になければならぬ理由。

結果は最初から分かりきっていたことだ。結果から言えば、トールの戦道中は大が付くほどの失敗で終わる。文字通りあしらわれ、遊ばれたのだ。

トールの力など、巨人族の魔術と知恵の前には何の力もない。その指にすら触れることなく、トールは敗北したのである。

詳しい経緯は一応彼の名誉のため黙つていてやる。というよりあまり関係のないことなので説明する必要がない。

問題はその先。アースガルドへの帰路についていた時だ。

ロキは一人勝手に帰ると言つて二人と別れた。その腕を大きな翼に変えて、大空を舞いロキは姿を消した。

もちろんトールたちがロキの勝手な行動に今更疑問を持つはずもなく、文句を言うだけに留めていた。だからこのときの策略は神々にはまったく感知されずに終わった。

ロキはある程度空を泳ぎまわったあと、誰にも見られていないことを確認した上で、来た道に戻った。

その先にはつい先ほどまでいたウトガルド。その奥深くにそびえ立つ城があった。

正門には行かず、まっすぐバルコニーへと降り立つロキ。それを迎えたのは仮面を被った男。玉座に陣取っていた男はロキを同じ視線から迎える。

「おかえりなさい」

「ああ、ご苦労だったな」

ロキは当たり前と言わんばかりに室内へと入る。王もそれを咎めることはなく、その後を追う。

広く、ゆつたりとした空間。調度品の一つ一つが高価なものであ

ることが窺える。しかし派手ではない。高貴さを残しつつ、あくまでくつろぐための空間となっている。ロキは部屋にあった一人がけの椅子にドッシリと腰を下ろす。まるでそこが自分の席だというように。

ここは王の自室。本来なら家臣すら許可なく入ることを許されない場所。なぜそこにロキがいることを許されているのか。

それこそ愚問だ。自分自身に許可を得る必要などないからだ。この部屋にあるものはすべて王のものであり、同時にロキのものである。

すでに用意されていた二人分の紅茶。王も向かい合う椅子に腰掛け、茶に口を付ける。

「もう仮面はいいぞ。顔も見せない相手と茶を飲んでもうまくない」
そう言われて王は自分がまだ仮面を付けたままであることに気づく。そのことに苦笑しつつ、ゆっくりと仮面を外す。

そこに現れたのは鏡。いや、鏡を見たかのようにうり二つの顔。その髪は輝かんばかりの金。その目は空よりも海よりも美しい青。絵にして永遠に残したいと願うほどの美貌。それがこの世に二つ、存在している。

いや、彼らの存在は一つでしかない。彼は己であり、自分は彼である。

彼の心臓は俺のもの。

俺の目はお前のもの。

口も、鼻も、手も、足も、髪一本に至るまで。あいつは俺であり、俺はあいつであった。

誰よりも近くて、近すぎて見えなかった存在。

鏡の向こうに自分の顔が映ることをことを疑問に思う人間はいない。

それでもまだ、この頃の俺たちは同じ顔の意味を知ることにはなかった。ただまるでもう一人の自分自身であるかのように接していた。それほどまでに二人は近く、何でもわかり合えた。

空気よりも自然な存在。まだ、その意味をこの頃の彼らは知らない。

やっと見つけたな。

やっと見つけてくれたね。

遅くなったな。

遅くなったね。

もう少しだ。

もう少しだね。

お前の元へたどり着くまで、あともう少し。

「トールの顔を見たか？ 笑いを堪えるのが大変だった」

「あのまま絵にでも残しておきたいくらい傑作な顔でしたね」

「まったくだ」

思い出しては笑ってしまうのだから茶を飲むこともできない。

お互い、自分の首尾を褒め称え、愚かな戦神を茶菓子代わりにする。これほど楽しい茶会はない。

「それで少しは気が晴れましたか？」

「少しはな。だがまったく足りてない。だが、できるのはこれぐらいだろう」

仮にも神となった自分が裏切らない程度にできるのはこれくらいなのだ。裏切ることは考えなかった。憎しみを抱いても尚。

まだ、彼を信じていたかったのかもしれない。あの日の約束がまだ破られていないと。

王はそんな彼を少し叱るように言う。

「そこまで神々に義理を感じる必要などないと思いますが。いつで

もこちらに戻ってきてもいいのですよ?」

「お前は性急すぎるウトガルドロキ。愛想などとうに尽きているが、それでもあそこが最高の遊び場であることに変わりない」

ウトガルドロキ。ウトガルド、外の世界のロキ。そんな意味の名前は彼らが自分で付けた。

初めて会った時にあまりにも同じすぎたお互いに同じ名を与え合った。それが当然だと、何の疑問も持たずに。

「ロキ、娯楽を求める必要性は理解していますし、私だってそうです。しかし家族を奪った者たちと仲間である必要性は感じられませんか」

「珍しいな。お前が俺の意思に反抗するなんて」

「あなたのことを思っているのです」

「わかってる。からかってるつもりはない。俺だってこのまま永遠に続くとは思ってないさ」

ただ、

「本当にあいつが俺を切り捨てるのが先か、俺があいつを切り捨てるのが先か。そのどちらかが来るまではまだこのままで良い」

「そんなに信頼できる相手ですか? あなたの義兄弟は」

「知ってるだろ? 俺たちは利害の一致から始まった関係だ。それが失われるなら、あいつが約束を破るのなら、俺は遠慮なく奴らを切り捨てるさ」

「それはいつのことになるでしょうか?」

「焦るな、ロキ。そう遠くない未来さ。俺たちには時間がある。それにな」

それに――、

「なんだかんだ言って俺はあいつを捨てられないのかもしれないな」
仲が良いとか悪いとか、信頼するとかしないとか、そういう問題じゃない。

魂が、あいつのそばが良いと訴えてくる。説明すらできない、感情よりも本能。

「もう少し様子を見るさ。見切りを付けるのは、それからでも遅くない」

そう言うロキを、もう一人のロキは不満げに見つめた。彼らの意見が違えることは珍しい。だがそれだけで、気にもとめなかった。彼ならわかつてくれると信じていたからだ。

この時、何かが違えば結果は変わっていたのだろうか。
いや、すべては予定調和。過去にあらがう術などない。

ただ、流されるだけ。

あなたは思わなかったでしょうね。私があなたと同じかそれ以上に神々を憎んでいたことを。私の半身を傷つけた罪深き者たちを決して許さなかったことを。

私にとってはあなたしかいないのですよ。大勢の家臣や国民でもない。あなたにしか価値がない。

だから、あなたの代わりにやったのですよ。そうすれば、すべてがうまくいくと言われたから。その言葉に従った。

さあ始めましょう。神の時代の終わりを彩る喜劇を。

浅葱幕を下ろす時が来ました。

第29話 盤上の駒の足掻き

すごい勢いで意識が闇へと引っ張られる。視界が黒に染まり、一瞬思考が停止し、脳は考えることを放棄する。

ここに肉体はないのだから感じるはずもないのに、まるでジェットコースターで振り回されたような気分を味わった。

突然の出来事に悠斗の脳内は混乱する。いや、何も考えられず抵抗もできないまま落ちていっているのか上がっているのかわからない状況をただ傍受した。

悠斗の意識がはつきりしたのはいつのことか。

それは一瞬の出来事かもしれないし何時間も経っているのかもしれない。意識は闇の中に浮遊し、脳は徐々に現状を受け入れていく。周囲は闇に包まれているのに自分の姿ははつきりと見える。他には何もない。浮いているのか沈んでいるのか、進んでいるのか止まっているのか。それすら判断できない。

一度混乱した脳は何事もなかったかのように静まりかえっている。状況の把握は必要だろうか。いや、必要ない。考えるまでもない。こんな芸当ができる者は限られているのだから。

過去の海を漂っていた悠斗の意識を引きずり出した張本人は、もったいぶることもなくその姿を見せた。

淡い色のローブに身を包み、その色に似た淡い色の長髪をまとめることもなく背に流している。その容姿は美しいと言って差し支えないのに、どこか人形めいた美しさだ。じっとしていればマネキンか何かと間違えそうなほど、女の顔は変わらない。顔の筋肉が死んでいるのではないかと疑ってしまうほどに、彼女の顔は凍り付いている。

それなりに長いつきあいの悠斗でさえ、彼女の表情が変わったと

ころを見たことがない。おそらく誰もないのだろう。

そしてそれは彼女に限らず、彼女の姉妹にも言えることだ。

人格があるのかすら疑わしい。ただ淡々と運命を語るのみ。その預言は神々すら聞き逃せない絶対性がある。

「やはりお前か、ノルン」

「お久しぶりですね、ロキ」

神々との確執などまったく関係などない。そう言うかのような以前とまったく変わらぬ態度。いや、むしろ変わった方が不気味なのか。

人間や神々の運命を預言し傍観する三人の女神・ノルン。その一人・長女ウルズ。司るのは過去。他に二人の妹たちがおり、次女のヴェルザンディが現在、三女のスクルドが未来を司っている。

彼女たちもロキと同じ巨人族の出である。しかしその立ち位置はかなり特殊なもので、神からも巨人族からもその存在は逸脱している。まるで運命そのものであるかのように。

今ここには彼女の妹たちはおらず、ウルズ一人がいる。

ここは過去の海。記憶の水底。ここに入る力を持つのは時を支配する者たち。今悠斗はヘルの力を借りてここにいる。

そしてウルズは彼女自身の力でここにいる。

「お前のことだ、俺がここに来ることもその目的も知っているのだから？」

「ええ」

何の迷いもなくウルズは答える。彼女に迷いなど最初から存在しない。感情自体がないに等しいのだろう。オーディンですら、彼女たちの行動を制限することも命令することもできないのだ。

「過去も現在も未来さえもすべてわかりきった生き方など、俺にはごめんだがな」

「理解ではありません。私たちは運命そのものです。時間そのものであり、自身の身のうちにあるものを理解する必要はありません」
本当におもしろくない女だ。問答することすら無駄に感じるほど

に。

ここに来て確信する。彼女たちノルンは、それぞれ肉体を持ってもその意思は同一のものだ。つまり運命という巨大な意思の一部、あるいはそれを伝えるための電話口でしかない。

だから別々に見えて彼女たちに個性は存在しない。自我もない。何も考えず、ただ未来を預言するだけの存在。それが彼女たちの正体。

「お前の本体はどこにあるんだ？」

その本体が何を意味しているかを知っていると云ってやる。しかしやはり能面の女の眉はピクリとも動かない。ただ口だけが動いているだけ。

「私は一部であり伝達者。あなたの問いに答えるためにここにいるのではなく、ただ伝えるためにここにいるのです」

常に一方的な会話。その先にあるものが意識持つ個なのか、それとも自然現象的な何かなのか。

どちらにせよ、わざわざここまでメッセンジャーをよこしたということは、何か言うことがあるということだろう。

今更邪魔する気なのかもしれない。そうすれば何もかも無駄で終わる。ここにいる俺の足掻きすらその「何か」には微々たるものなのかもしれない。

しかしウルズの言った言葉は悠斗を驚かせるには十分なものだった。

「やりたいと言うのなら止めはしない。ただ、必要以上に知ってしまえば後悔するのはお前自身だ」

何の感情もこもらないその台詞に、ある感情が感じられた。

それは高慢さと、余裕。

できるものならやってみるがいいと、上から下を見下す驕り。それと同時に感じられる余裕。好奇心。何をしてくれるのか楽しみだと、純粹に楽しんでいる。まるで子供のように。

そこには怒りを覚えるが、同時に「何か」が自分と変わらない意

思ある者に感じられた。それは神秘性も偉大さも感じない、人間くささ。

初めて間接的にでも触れる「何か」のはっきりした意思。そこには目的など感じられない。ただ、楽しんでいるだけ。人の運命を見て楽しむ神のように。それは盤上で踊る『神』という名の駒を見て楽しんでいる。

「すでにあなたは入ってはならない領域に足を踏み入れようとしている。そこから先へ進めば、後戻りはできません。人としても神としても、その終焉を得ることはできませんよ」

それは他とは別のものとなってしまおうという意味だろうか。『生』も『死』さえ選べない。しかし、

「そんなこと今更だな」

悠斗は憮然と言い放つ。

「今でさえ自分の生き方を選べない。それが今更常人の枠から外れたところでどうなる。俺が望むのは生きることでも死ぬことでもない。知ること、ただそれだけだ」

「束縛は加護でもあります。知らないでいれば、あなたは『ロキ』としての生き方を保証される。それがたとえ理不尽で不幸に見えても、生きて死ぬことを保証されているということ。『生』も『死』も、そこに存在するから許される幸福。それすらなく闇の深淵に自我さえなく浮かんでいる魂は多い。存在できることの保証。あなたはそれを自ら捨てるのですか？」

「俺は誰かに生き方を決められるくらいなら、短くても自分で選んだ道を進みたい」

「それは無謀でしかありません。運命はあなたに存在と幸福、そして不幸を与えた。そしてそこには確かに価値がある」

その価値を決めるのすら自分ではない「何か」でなければ。

「何も知らなければ、知っても何もしなければ、あなたは保証された人生を受けられる」

「価値がないことは最初からわかってる。ここにこうして俺がいる

ということとは、それを選んだということだ」

だから今更説得も命令も無駄だ。

そう言うとうルズはゆつくりと眼を伏せる。そしてまた同じくらいゆつくりと眼を開く。

「なら、行きなさい。そこまでの覚悟があるのなら、あなたの知りたい過去へあなたを導きましょう」

ずいぶん気前がいいなと思えば、それを読み取ったようにウルズは言った。

「最初から止める気などありません。ただ、余計な後悔や未練を残さないための、確認でしかありません」

そして、

「一部と言いましたが私もあなたと同じです」

盤上の駒でしかありません。

〇〇〇にとって、これも暇つぶしの兒戯に過ぎません。

次の瞬間、悠斗の意識は闇に開いた穴へと落ちる。抵抗する暇もなく、落ちるといふより引っぱられるような勢いで、悠斗は時間のトンネルを流れていく。

ウルズの姿は一瞬の内に小さな点となり、すぐにどこにも見えなくなった。だから、彼女が最後に言った言葉が聞き間違いではなかったのか、それすらもわからなかった。

うねり狂う時間の渦。それをひたすら過去へと落ちていく悠斗。視界を通り過ぎていく過去の残映たち。それは時に暖かく、時に苦しく、しかし懐かしい。

視界だけでなく耳も鼻も、五感のすべてが過去を感じ取る。パンクしてしまいそうなほどの過去という情報の多さ。しかしそれは間違いない悠斗がこの目で、この耳で、肌で、すべてで感じてきた事実。

真実を得たいと願ったときから、その過去のすべても受け入れると決めたはずだ。

時間の逆流は悠斗の魂に優しくない。

あまりの勢いに削られていく精神、肉体、魂。しかし臆することはない。俺が俺であることを放棄しない限り、過去の海に溶けて消えてしまうことはない。

肉体で理解するのではない。俺が俺であることの証明は肉体ではない。そんなもの一度捨て去った。今も昔も変わらないのは魂だけ。一度は消されてしまった記憶であっても、必ず俺の魂に残っている。なかったことにはならない。

真実は最初から俺の中にある。今すべきことは、「何か」によって忘れさせられた過去を見ること、そしてそこから真実を理解すること。

おもしろいな、お前。神とはこうも強欲なものか

プライドばかり護っていると、他の大切なものを無くしてしまうよ貴様に弁解の機会など与えん。骨も残さず燃やし尽くしてくれる、

【ずる賢い者】よ

俺は、バルドルを殺していない。予言とは未来のためにあるものだ。ようこそ、アースガルドの神々。私はずっと父上と一緒にですよ。欲するものは違えど利害は一致している。あなたがバルドルを殺したためにこうなったのよさらばだシギン我が忠実な妻よ俺たちが兄弟として過ごしたことに変わりはない私は彼らが嫌いでした私達じゃ代わりにもならないの？何度でも抗ってやるさこれ以上何も奪わせはしないそれとも俺のこといらなくなっちゃったの？人間ごっこもそれなりに楽しか◆たよあなたのことを思っているのです一緒にいるのが当たり前なんだ私悠斗の時みたいに実のこと忘れたり◆ないよね？俺が殺してし▲うよいずれこの戦いが憎き奴らを滅ぼ■序曲となRUだろうそれTOもこの場で息子を殺SUことがで

●ますか？あなたGA全ての元凶9しよまだ俺を▼放する1はない
●いうのか▲んなNだから女に2つつWO■かし死ぬKOとになる
んだ5レイ●りが8いからお父様◆の気MOちを無視▼て7■0：
▲ねRA……い4………

初めて君に出会った時、僕の心が言ったんだ

『やっと会えたね』って

そして…俺は、知る。

第30話 忘れられた花

「お前、馬鹿だろ」

暖かな日差しが降り注ぐ日。小川のそばで二人は安らかなひとときを過ごしていた。

他の神々は納得しないだろうが、二人には二人にしかわからない繋がりがあった。それは絆のような、親愛のような、言葉で説明するのは難しい。だが彼らがお互いをどう思っていたかというところ、他人が想像するほど悪くもなく、しかし親しいわけでもなかった。

ただお互いが存在することを認め合っていた。ただそれだけのことなのに、それは他の神々には真似できないことだった。

相手を敬うことなく、憎むわけでもなく、ただ二人の立場は対等だ。だからそこに気遣いや敬語は必要ない。

神々の頂点に立つ主神に向かってこうも堂々と馬鹿呼ばわりできる者など、後にも先にも彼一人だろう。

「お前、やっぱり馬鹿だ」

「そう人をバカバカ言うな。一度でわかる」

「一度じゃわからんから言ってるんだろ。大事なことは二度言わないとな」

「私が馬鹿であることがそんなに大事か」

「ああ大事だ。知恵を司る神、死を司る神、そしてすべての存在の上に立つ存在が、実は人並みに馬鹿なんだからな」

ロキと呼ばれるこの邪神が神となってからまだそれほど時は経っていない。人からすればそれなりに長いかもしれないが、神々からすれば昨日の出来事のようなのだ。

神々からの反発はひどかったが、オーディンが彼を義兄弟とすることを取り消すことはなかった。

「私の何をもって馬鹿と断言するのか、説明を求める」

「説明してやらねばわからないことがさらに馬鹿である証だ。いいか、この世に神も人間も、それ以外の命も、合わせればそれこそ星の数ほど存在する。お前はその頂点に立つ唯一の存在だ。なのに、お前はわざわざ損な役割を自ら引き受けようとする。偉そうにふんぞり返れとは言わないが、わざわざ誰もやりたがらないようなことまでする必要がどこにある。そんなもの、あの責任がどうか言ってるヘイムダルあたりにでもやらせておけば良い」

「そなたとヘイムダルはとことん相性が悪いようだ。そんなに嫌い合う必要もないだろうに」

「あるね。俺とあいつはお互い生理的に好かん。あいつと意見が合うことなどまずあり得ないな」

「そうも自信ありげに言うか。やれやれ」

生きている内に一生の信賴を勝ち取れるほどの相手と出会うことは奇跡と言えるほどの確率だ。しかしここまで嫌い合う相手に出会う確率も同じくらい低いのではないだろうか。

「お前がやろうとしていることは、あの川に佇む岩と同じだ」

ロキが指さした先にあるのは穏やかな小川。その中央に立ち、水の流れをせき止めようとする岩。当然すべての水をせき止めることができるわけもなく、岩によって分かれた水は再び合流し下流へと流れる。

しかし水と共に流れてきた小石や枝、枯れ葉は岩に引っかかりそれ以上流れることはない。

「運命とは流れる水だ。せき止めることは出来ないし、抗えば自らの体に傷を付けるだけ。あの岩も枝や石に削られ、傷だらけになる。あんな穏やかな川ならまだしも、我ら神にぶつけられる流れは時に濁流となり、激流となる。お前一人が岩として立ちふさがった所で、自身を傷つけるどころか崩れ去るだろう」

他人の為に命だけでなく一生を賭けるなど愚かな事だ。自分の幸運を捨て去り、他者の不幸を背負ってまで生きることには何の意味が

あるというのか。

「誰もお前に感謝などしない。海に住む者は上流にある岩の事など気にはしないのだから」

「そうかもしれん」

「お前がやろうとしていることはただの自己満足だ。自己満足のために損な人生を送るくらいなら主神として偉そうに楽な生き方をすればいいだろ」

わざわざ主神が他人の災いまで引き受けようとするなど理解できるはずがない。損をするのは下の人間だ。それを自分から受けようとするなど。

「理解してくれなくても良い。だがこれはもう決めたことだ」

主神ははっきりと言い切った。

「私の行いが愚であるかもしれないことは承知している。だが神の時代が少しでも長く続くように最善を行うのが主神たる私の義務だ」

「それにいずれ神の時代は終わりを告げる。今でこそ人は我らを敬い崇めるが、いずれ恩恵を忘れる。人は神から離れ、それでも人は生き続ける。神がいなくとも」

それは予想ではなく予言。神は人の上に立ちながらも信仰されなくては意味のない存在。

「自然を司るのは誰なのか、死を与えるのは何者なのか。それは人の手により明らかになるだろう。そこに俺達の居場所はない」

信仰などなくても、人は生きる。ただ意地汚く、しつこく。

「神の加護を失った世界は生きづらくなるのか、それはわからない。だが、人はこの世に起こる事象のすべてを人の口で説明できるものと決めつけるだろう。その時俺達も人にとってただの存在となるのか、それともないものとされるのか」

天に祈ってもそこに神はいるのか。いや、雲の上にあるのは星のみ。神はいない。

「忘れるのは人だけではない。神とて忘れる。いずれお前のことすら忘れ去る日が来るだろう。当たり前前の恩恵を感謝することなく、

ただ怠惰に生きるだけだ。お前は一人上流に取り残され、冷たい水の中で耐え続けるだけ……。それでもか？」

「そうだ。私は人と神の為に存在するのだから」

ロキは重々しく息を吐き出す。もう何を言ってもこの義兄弟は意志を変えないだろう。たとえ人も神も彼のことを忘れ去る日が来ても、彼は一人冷たい水の中で絶え続けるのだろう。

「本当に馬鹿だな、お前は。救いようがないほどに」

「もう好きに言うが良い」

「最初から好きにしているさ。お前の為に遠慮などしてやる必要はない。ただ、」

「ただ？」

「あんまりにも救いがないから、哀れんでやろうと思ってな」

そう言うときロキは足下に生えている野花を摘んだ。そしてそれを川へと放った。

花は穏やかな流れに身を任せ、やがて岩に引っかかり止まった。

「お前は他人の不幸や汚れを出来る限り背負い、傷つき汚れていくだろう。最後にはみすばらしい岩となるか、崩れてカタチすら残さないかのどちらかだ。そのくせ美しいものや幸運はすべて下流に流してしまうのだろうか？ お前の元には何も残らない」

ならば、

「俺だけはお前の事を憶えておいてやるよ。人も神もお前の事を忘れ去る日が来ようとも、俺だけは記憶の片隅に置いてやる。ただ一人お前を憶え、哀れんでやる。それは何の救いにもならないかもしれない。だが、少なくともこの世界に一人はお前を想ってやる存在がいる。誰かがお前を憶えている限り、肉体が減びようともお前の存在がなくなることはない」

お前の自己犠牲を笑ってやるワケじゃない。ただ哀れんでやるよ。お前が傷つくことを、じゃない。忘れ去られることを、哀れんでやる。泣いてやりはしない。俺の涙はそんな安いものじゃないからな。ただ、俺の記憶も結構高いものなんだぞ？

「他の事を忘れても、お前の事だけは忘れないでいてやる。そして気が向いたら、お前の為に花を捧げてやるよ」

それだけは流すなよ？ 受け止める。

誰の為でもない、お前の為だけに捧げられる花なのだから。

お前は、まだあの花を憶えているだろうか。

その記憶は、消されたインク。塗りつぶされ消えてしまった文字の羅列。しかしそこにあった事実は消えず、読めなくなった文章は忘れられてもなお、原稿の上でインクの水たまりのようになって鎮座している。

俺は誰なのか。盤上に立たされた一つの駒なのか、原稿の上だけに存在する文字の羅列なのか。どちらにせよ、それを観戦する存在にとって俺はいつ消してもかまわない程度の価値しかないのだろう。だからこうして足掻くことは本当にただの見せ物。舞台の上で踊る人形劇。それは喜劇なのか悲劇なのか。どちらにせよ観戦者を喜ばせるだけのもの。

それでも、俺は——……。――。

その感触を憶えている。ヤドリギを手にした感触も、ヘズに言った言葉も、バルドルの血の臭いも、すべて——。

精神だけが肉体を離れてしまったのだろうか。いや、違う。そこ

には確かな肉体が存在し、精神は俺のものなのに俺ではなかった。
今掌に残る血の感触も、すべて幻などではない。倒れ伏すバルド
ル。その前に立っているのは誰だ。

血で濡れているのは自分なのに殺したのは自分じゃない。ならば
誰なのか。目の前にいる誰かだ。では彼は誰なのか。

答えは常に自分の中にあった。それがようやく失われた数式を得
て一つの答えに結びつく。

「お前だったのか」

悠斗は目の前に立つ己に言う。

やっと気付いてくれたのかと彼は笑った。問いかければ自分の中
から答えが返ってくる。問いかけるのは自分なのに、答えもまた自
分の中にある。最初からここには彼一人しか存在しない。

バルドルを失った世界はどうなるのか。神々の黄昏で一度滅んだ
世界は復活したバルドルによって再生される。そこにあるのは何な
のか。ただの複製だ。

世界は再び始まり、やがてかつてあった惨劇は忘れ去られる。最
初からなかったかのように。主神は再び災厄を招く邪神に出会い、
招き入れるだろう。

初めて、などではなかった。再会だった。忘れてしまっていた。
なかったことにされていた。

「まるでレコードだな。最後まで聞き終われば勝手に最初に戻る」
実に楽な方法だ。新しい駒を用意する必要も、新しい舞台を作る
必要もない。世界とはこんな簡単で単純なものだったのか。

「ずいぶん安上がりなものだな」

リサイクルと同じだ。自然に優しい環境作り。悦びも痛みも最初
から用意されたもの。初めてであるはずなのに始めてではないもの。
警告する声の意味を知る。あれは過去の自身からの警告だったの
だと。抗いきれなかった自分自身の。

「その中でも俺達はさらに適当な存在だな。ああ、リサイクルか。
使えなくなったものを一度潰して新しい別のものにするんだから」

なぜ世界に同じ存在が二つも存在する。似ているんじゃない。同じだった。顔も、肉体も、その魂まで。

「生まれ変わりなんて綺麗なものじゃないだろ。俺達はペットボトルと変わらない価値しかなかったんだな」

壊れても作り直せる存在。今、俺はどちらなのか。邪神か、巨人族の王か。

「知らなければ初めてと変わりありません。怠惰な神々はそれにすら気付かない。気付こうとしない」

ウトガルドロキと呼ばれる己はそう言った。

「だが私達だけは違う。私達は離れていても一つの存在。私達の役目は神の時代の終わりをもたらすこと」

「そして一方がその役目を怠れば、もう一方がその役割を代わりに行う。問題は起こらない。我らは同じ存在なのだから」

そういう風に作られたのだから。

「答えは得た」

「ならば、どうするのです？ 役目を再び果たしますか？」

「今更それはないだろう。どちらにせよ、俺はお前を許せない」

「ご子息の事ですか？ 彼は与えられた役目を果たそうとしただけです。それを止めたのはあなたですよ？」

「俺の兄弟を殺すこと、かつてあいつがオーディンを殺したように。それを再現したとでも言うのか？」

「他に何か？ どちらにせよ、彼を殺したのは貴方ですよ、ロキ」

「ああ、そうだ。俺達が殺した。我が子を。それが許されるはずもない。だから、自分を罰するのは俺自身だ」

「ならば、その為に逢いに来てくださいね？」

「ああ、首を洗って待っている」

どこでとも、いつとも、訊かない。再会の場はいつだって決まっている。そしてあいつとも――。

「待っていますよ。あの時からずっと、貴方だけを待っていたのだから」

そう言い残し彼は消えた。ここにいたのは過去だけ。自分の中にあるのは常に過去の己自身だけだ。

逢いに行かなければならない。今の彼に。

過去は既に過ぎ去り、そこにあるのは懐かしさと悲しみ。永遠の楽園など最初からありはしなかった。上がりの存在しない双六を歩き続けていた。もう、戻ることはできない。未来に何が待ち受けるかなどこの卑小な存在に分かるわけがない。だがたとえその先に絶望しなくても、立ち止まることは出来ない。

ああ、それでも、過去とは何と美しく懐かしいものなのか。そこには苦しみと悲しみがあつた。しかしそれを超える喜びと幸福が存在したのだ。

「お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

たったその一言を聞きたい為に、俺は過去を捨てきれないのだ。

第31話 夢の残り香

過去に縛られる人間を弱いと人は言うだろう。しかし未知なる不安が待つ未来よりも、たいした価値を見いだせない現在よりも、変わらず色鮮やかな過去は何時だって美しく、しかし届かないものなのだ。

幸せだった過去に囚われ、前進を忘れた者など死んでいるのと変わらない。過去の亡霊だ。過去にとどまり続けるのは死者だけだ。ならここにいる男もまた亡霊と言えるだろう。彼は既に過ぎ去った過去を清算する為に、今現在と未来さえ捨てようとしているのだから。

だが、ここに彼を裁く者はいない。いるのは優しき過去の幻影。都合の良い夢幻かもしれない。しかし、それでもすがらずにはいられない、自らが捨て去った幸福。愚かとは自分の為にある言葉だと彼自身理解している。それでも―――。

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま」

たったその一言をどれだけ欲し、忘れることができずにいただろう。平凡な日常なら飽きるくらい聞けるその言葉。一体どれだけの人間がその価値に気づかず捨ててしまったのだろう。気づくのはいつだって失ってからだというのに。

迎えてくれる人がいる、自分の存在を認めてくれる、そういう意味なのに。

その姿は最後に会った日から何も変わらない。死者は永遠に時を止める。神にすらある鈍足な時の流れすら失った存在。

だからこそ、その姿はまぶしかった。すべてを覚えていたというのに、その肌の白さも、黒く長い髪の流れる音も、その手の温もりも、鈴のように響くその声も、一瞬たりとも忘れることはなかったというのに、触れたくて仕方がなかった存在。

カタチだけの妻などではない。たとえ何があっても手放したくない、唯一の女性。

あの頃と変わらない顔で、記憶と変わらない声で、言葉は紡がれる。

「思ったより遅かったですね」

「まあな」

「あなたの頭は案外固かったということかしら。私がわざわざヒントも考える時間も用意したのに。そのほとんどを無駄にしまつて」

「悪かったな。それにお前のヒントの方がよほどヒントになってないだろう」

「自分の無能を棚に上げないでください。女に頼らなければ何もできないくせに」

本当に口の減らない女だ。改めて自分の趣味を疑いたくなる。なぜこんな女を選んだのだ。今更取り返しはつかないし、なれそめを長々と思ひ出す気もない。ただこの女が邪神ロキの愛人であって、その愛情が今現在も進行中であるというだけだ。

シギユンが忠実な妻なら、彼女は対等な愛人と言えるだろう。血の繋がらない義兄弟とは別の意味で、彼女はロキにとって対等な存在であり、その心の大半を占める人物である。

外見は美しい女性だ。艶やかに流れるウェーブの掛かった黒髪。雪のように白い肌。娘と共通する面影がある。それはやはり血のつながりが為す技なのだろう。ただ娘と違いその肉体は健康に溢れ、美しい顔のすべてを惜しみなくさらしている。自信溢れる表情は常

に怯えた表情が抜けきれない娘とは違う。

誰の予想も当たってはいないだろう。何処に薄倖の美女がいる？ 男の帰りをただおしとやかに静かに待つ女が何処にいるというのだ。勝手な噂はいくつか流れていたが掠りもしていない。

自分以外にこの女を選ぶ男はいないだろうと断言できるほど、男に寄り添う姿が似合わない女だ。

久々の毒舌がいくら懐かしいとはいえ、心地よいものではないだろう。

「お前も相変わらずだな。久々の再会に情緒も何もありません。そんなんだから言い寄る男の一人もいないんだ」

「そうですね。だからあなたも安心して長く留守にできるのでしたね」

「まったくだ」

これが愛し合った男女の会話なら、シェイクスピアの甘ったるい恋人たちが卒倒するだろう。この女がロミオの後を追って死ぬなどありえない。男に追わせることすら許さない女だ。

「まあ約束は守ってくれたようですね」

「当然だ。死んでお前に延々と説教喰らうくらいならまだ死なない方がマシだ」

彼女は後を追うことすら許さなかった。だからロミオは今も一人残されたまま。

別れは突然やってきた。悲劇はいつだって前触れもなくやってくる。いつも通り、何日ぶりかになるかわからないウトガルドへの訪問。まず向かうのは愛する家族の元。そこまではいつもと変わらなかった。いや、変化はとうに終わっていたのだ。ただ自分が遅すぎたというだけで。

倒れていた彼女を見つけたとき、まず自分の視界の異常を考えた。でなければ何かの冗談だと。でなければおかしい。彼女が血まみれ

で倒れているはずがない。

「ボダ！」

自分だけが使う彼女の愛称を呼ぶ。ただ単に長くて呼びにくいからだ。そして彼女も自分にだけはそれを許していた。それが彼女に選ばれたという証に思えた。

だが腕の中の彼女がそれに応えることはない。ただ血が流れ落ち、いくら手で押さえても無情に流れて……、

「ボダ！　しっかりしろ！　何があった!？」

口を開くのすら辛いのだろう。それでも憎らしい口調は変わらない。

「今頃やってきて…遅すぎますわ」

「ボダ！　大丈夫か？　今」

「人の耳元で…怒鳴らないでください……オウムですか、あなたは…」

「…その調子なら大丈夫そうだな。なら説明してくれ、一体何があった。子供たちはどうした？」

大丈夫なはずがない。そんなことわかっていた。しかしお互い心配されることは嫌いだとわかっていた。だからそれに気づかないことが彼女への気遣いとも言えた。

「こんな所で立ち止まってないで…早くアースガルドへ……あの子達は神々に連れていかれたわ…」

「神？　一体誰が」

「決まってるでしょ…あなたの…義兄弟よ」

「オーディンが？　なぜお前達の事がばれた？　それにアイツがそんなこと…」

「なぜも…どうしても…考えてる暇はないでしょ？　あなたは父親なんだから…早くあの子達の所へ……私のことは放っておいていいですから」

「放っておけるわけないだろ。子供たちは取り戻す。だからお前も」
「いいんです…最初からわかっていた事だから…」

「？　どういう意味だ？」

「たとえば決まっていたことだとしても：私はあなたと一緒にあったことを：後悔はしていません……：私自身が選んだことだから……」

「だから意味がわからない、いや、とにかく喋るな。すぐに手当を」「いいから聞きなさいって言ってるのよ……！」

血を吐きながらもしゃべり続ける彼女を無理にでも止めるべきだった。だがそれをしなかったのは彼女を損ねたくなかったから。最後まで自分らしくあろうとする彼女を、そのまま刻みつけたかったから。

もうわかっている。これが最期だと。だから、最期までこのままで――。

「……何が言いたい？」

「……私がいなくなった後……あなたは私を思い出しては傷つくでしょう。二度と帰らない過去を何度も……振り返って……。それでも、泣くのは今一回だけに……して……くださいね……。私、泣き虫の男は……嫌いですから……」

「俺は泣いたことなどない」

「だから……これから泣くのでしょうか……。ひどいですね、私……。いつかあの子達の分まで奪ってしまうのだから……」

「だから何の話をしている」

「私があなたに……先の事を話しても……それは意味のないこと……。だから、今は、これだけに……しましょ……。あなたと……出会えて……幸せだった……とは……：言わない……でも……：……」

それが、最期。

「あなたの為に……生きられた……：だから……：あなたは、私の為に泣いて――……。」

でも、追いかけないで。

夜の闇がいつもと変わらない冷たい風を引き連れてくる。彼女の魂を連れて行くかのように、冷たい風が二人の間を通りすぎた。そして、彼女が動くことは、二度となかった。

「ひどい女だな…お前は」

共にいることも追いかけることも許さない。それが彼女を選んだ男の義務。たとえ彼女がいなくなっても、その眼が疑われることはないように、確かであったことを証明しろと。

置いていく側は潔いと言うのに、置いていかれる側のことは何も考えない。なんて自分勝手な生き方、なんて自己中心的な願い。

「泣いてやるさ…俺の涙は高いぞ」

泣き方など知らなかった。彼女と出会えて笑い方を知ったのなら、泣き方を教えるのも彼女。

だから、お前の為だけに泣いてやる。俺が泣くのはこれが最後。たとえこの先何があっても泣きはしない。涙などすべてくれてやる。今までの慰謝料だ。だから、

俺を忘れる事なんて、許さないからな。

片時も忘れずお前を思おう。記憶の鎖で縛りつけて、俺もお前も互いを忘れないくらい縛りつけて。

女々しいなんて言うな。これは男の独占欲だ。愛に酔う人間が愚かだとはもう言えない。これは愛なんて綺麗なものじゃない。

これは、お前を逃がさない為の鎖。お前が俺のもので、俺がお前のものである証。お前が忘れたい過去も何もかも、一瞬残らず憶えている。

後悔などするな。これがお前の選んだ男なのだから。

巨人族の女、アングルボダ。預言の力を持つ魔女。そして、邪神の所有するただ一人の存在。

「まあ、あなたの独占欲に今更ケチを付ける気はありませんけどね」「文句を言うな。言うならお前の趣味の悪さに言え」

「言いませんよ。だって私、一度も後悔してないもの」
そう言い切る姿はいつそのこと潔い。本当にお互い趣味を疑うというものだ。

最後に彼女の声を聞いたのはあの終焉の日。神々の黄昏、自身の体が砕け散るのを自覚した時だ。

呪縛から解放されたロキは息子たちを引き連れアースガルドへ攻め入る。ミドガルズオルムはトールと戦い相打ちとなり、フェンリルは預言通りオーディンを飲み込むがその息子によって殺される。ロキも天敵となっていたヘイムダルと戦い相打った。

何も変わらなかった。預言を覆そうとしていたオーディンたちも、運命に逆らおうとしていたロキも、誰も変えることができなかった。スルトの投げた剣が大地を割り、すべてを紅蓮の炎へと変えた。敵も味方もなく、すべては一瞬灰燼と化し、そしてマグマの海に消えた。世界は滅びた。そこに生きる生命すべてを巻き込んで。

命が、肉体が失われていくのを感じたのはほんの一瞬の出来事。あれだけあつという間に終われば、痛みなど感じる暇もない。死んだ後の肉体の行く先など気にはしていなかった。魂の宿らぬ肉の器が灰すら残さず消え去ったことに、未練はなかった。

何も成せずに逝くこと。そこに未練がなかったとは言わない。だが、何を成すべきかすらわからずにいた。

俺は、あいつに何をしてやりたかったのだろうか。
最後に思い浮かぶのは愛する人でも愛する子達のことでもなく、

憎んで終わるはずだった義兄弟のこと。本当に自分は彼を憎んでいたのだろうか。憎むようにし向けられていたのではないだろうか。

だとしてもすべてを許すことは出来ないけど、彼に言いたいことは他にあった気がする。なぜ、と問いかける彼の顔が思い出せない。泣いていたのか、怒りに駆られていたのか、それすらも。

命が、肉体が消えどれくらいの時間経ったのか。実はほんの一瞬の出来事だったのかもしれない。それすら思考する意志が消え、虚空の海に投げ出された時だった。懐かしい彼女の声を聞いたのは「ほとんど何も言わずにミッドガルドへ投げ出して、その後も何も言って来なくて、やっとうって姿を見せる。遅かったのはどっちだ」

「それ以上求める事こそ贅沢いうものでしょう？ 女に頼ることを前提にしているつもりですか？」

「そんなわけあるか」

「ならいいじゃないですか。それに、所詮私は死んでる身分ですし」
終焉の日、すべてが消え去り欠片も残さず消滅したはずのロキたちをかき集め、治し、ミッドガルドへ隠したのは誰でもない、アングルボダだった。

未来を預言する魔女。それだけの力を持ちながら、彼女は未だに死者なのだ。

「私の力は死んでいるから強くなるというもの。干渉できる範囲は少ないけれど、干渉できればその力は神を超す」

それは死んでいるからこそ出来ること。死はその代償と引き替えに莫大な力を彼女に与えた。だが、それ故に誰とも触れあえない。

ここでこうして会話できているのは、ここが時間の渦に浮かぶ夢の中だから。

「これで私の出来ることはすべて終わりました。退場した（死んだ）者の役目はここで終わり。ここから先は、舞台に立つ（生きている）あなた達の役目」

「ああ、わかってるよ」

だから、今度こそこれで最後。懐かしい過去を振り返るのも、都合の良い夢を見るのもこれが最後だ。

「私にもこれから起こることはわかりません。もう既に運命の流れは私たちの予測を超えて動き始めている。だからこの先に何があるかは誰もわからない」

それは手探りで暗闇を歩く不安。導く手はもうない。それでも、
「決めたことだ。今更変える気はない。だから」

優しく彼女の頬に手を沿える。

「さよならだ、ボダ。俺もお前と出会ったこと、後悔はしていない」
「当然ですわ」

クスリとお互いの笑う声が響く。同時に世界は白く染まっていく。夢から覚める時間だ。夢が覚めれば残酷な現実が待っているだろう。だが夢に浸ることは許されない。それが自分の責任だ。

彼女の後ろに今までいなかった人影が一つ浮かび上がる。その姿が人間界で生きた姿のままであることが笑える。

そして悠斗のすぐ後ろにいつの間にかいた彼女が母親と兄の元へ駆け寄る。もう彼女を止めることはできない。手放したのはこちらからだというのに、悲しむ資格すらないというのに心が静かに泣く。既に去った者、これから去る者。失い二度と戻らぬ幻影があの時言えなかった別れを告げる。

「さよなら、父上」

「さよなら、お父様」

たとえば、これが都合の良い夢であつたとしても…。

「さよなら、あなた」

「ああ、さよなら」

さらば、愛しき残影たち。最後に会いに来てくれてありがとう。

目が覚めると、そこには避けようのない現実が待っている。数ヶ月の内に馴染んだマンション、自分のベッド。目覚める度に眼にした天井。眠る自分にすぎるようにしていたのは最後に残された息子。泣いているようだ。もう彼を叱って泣かせる兄はいないというのに。彼の背後、そこにもう一人はおらず、ただ最後に来ていたワンピースと顔を覆っていた汚れのない包帯が放置されていた。まるで彼女に置いていかれたかのように。

泣きやまぬ我が子の頭を横たわったまま優しく撫でる。彼は自分を許さないかもしれない。言葉で言っても、自身でコントロールのできない心の奥底で、彼を憎むかもしれない。それすらかまわないと思った。

ただ、今は置いていかれた悲しみに横たわる。もう夢は見ない。

夢の残り香が、まだ残っていた。

第31話 夢の残り香（後書き）

第6章 原稿の上で踊る神々と零れたインク
終了しました。

章末座談会？

実「座談会も四回目、ついに次回でおしまいだね」

始「正確にはお疲れ様会が最後に来て、章末座談会はこれで最後だな」

桜「最初に書き始めたの何年前だったっけ？ 本当に終わる日が来るとは思わなかったわ」

フェンリル「恐ろしく亀ペースでの更新でしたからね」

悠斗「まあ一度書き始めた以上、最後まで書く気ではあるらしいから、事故でも起きない 限り最後まで書く予定だからよろしく」
ミドガルズオルム「では座談会行っちゃおう！」

題目？ 今までの復習

悠「よくわからんが」

始「とりあえず今までの感想ということでもいいんじゃないか？」

悠「感想といってもな…」

フ「とにかく殺伐とした展開続きでしたよね、最近」

桜「どんどんメインのメンバーが死んだり怪我したりしてるしね」
ヘル「痛いのは嫌です…」

実「ところで悠斗、奥さんいたんだね」

悠「当たり前だろ。前にも一人出ただろ」

始「いや、愛とか一番お前に似合わない言葉が飛び交ってたからな」
フ「彼女いない歴〓年齢の人から見れば羨ましいんでしょ」

始「何で俺の交際関係をお前が知ってる…？」

フ「見ればわかりますよ」

始「お前……」

実「まあまあ」

桜「というか悠斗も二股だったのに偉そうよね」

悠「割り切ってたからな。一応両方に子供はいたがシギユンの方の家庭は形だけだったしな」

始「お前、本当に何で結婚したんだ？　それに女もこんな奴のどこが良いんだ？」

へ「お父様は格好良いです」

桜「はいはい……」

実「それに奥さん美人だったね」

悠「不細工より顔が良い方が良いだろ。もっとも顔だけのバカは嫌だな」

始「それ……誰か特定の人物を指してないか……？」

悠「さあな」

ミ「それよりこのもう一人のお父さんみたいな何？」

フ「ただの脇役がずいぶんと出世しましたね」

実「そこまで言う必要がある！？　というか、脇役じゃないんだけど！」

始「そこら辺の設定には裏事情があるんだが、ここで話してる時間がないんでお疲れ様会　に持ち越しで。それじゃあ次行くぞ」

題目？ 最終回予想

悠「まあいつかは出ると思ったがな」

始「お決まりだろ」

実「突っ込んでないで答えて」

悠「お決まりで夢オチとかじゃないのか？」

フ「ああ、がっかりする落ちNO. 1ですね」

始「そんなオチでたまるか。普通のファンタジーならラスボスと戦っておしまいがパターンだな」

桜「でもこの小説ラスボスって誰？」

ミ「オーディンとか？」

悠「俺にそのつもりはないがな」

始「北欧神話ではどちらかというとお前が悪役なんだがな」

悠「悪役のつもりはないが正義の味方のつもりもないな」

フ「このまま行くと一人も残ってないというオチになるのでは？」

ミ「そして誰もいなくなった？」

桜「禄でもないオチね」

悠「だがこのまま行けばあり得ないからな」

へ「みんな死んじゃったら冥界で一緒になれない？」

悠「ああ、それもありだな」

実・始・桜「「良くない！」」

フ「そもそもハッピーエンドがあり得るのかすら甚だ疑問ですね」

悠「まあそれこそ作者のみぞ知る、だ」

幕間 ある物書きの独り言

やれやれ、こちらもようやく終わりが見えてきたか。

いろいろ勝手をやる連中ばかり増えてきてるな。そんなつもりで書いたんじゃないんだがな。

予定通りに行くだけでも退屈だが、ここまで勝手にされても迷惑だな。

私が作った話なのに、思い通りに行かない。何もしなければ良いのにわざわざ私に反抗するようなことばかりする。とうの昔に書き終わった話など忘れていたが、放っておいたばかりに狂ってきてしまったようだ。

最後まで行けば勝手に振り出しへ戻る。放っておいても話が回る良い方法だと思ったのに、繰り返し続ければ綻びも出てくるものなのか。やはりこの書き方はもうやめた方が良いな。こんなことばかりでは忙しいだけだ。

いくら放っておいた作品だからといって、勝手にやられるのは困る。

どうにも反抗的な登場人物ばかり出てきているな。

わざわざやらなくてもいい抵抗ばかりしている。

反抗した人間の末路？ と、そういえば君は誰だ？ ああ、答えなくていい。通りすがりか読者しかここには来ないのだから。

とりあえず挨拶だけしておこうか。初めまして、名も知らぬ誰かさん。名乗らなくていい、どうせすぐに忘れてしまうのだから。

私が誰かって？ さあ、誰だろうね？

怒ったか？ それは失礼。だが冗談抜きでそう言ってるんだ。

私の存在はある者からすれば天上の存在かもしれないが、別の者からすればそこら辺に落ちている紙くずなのかもしれない。ようは私自身にも私が誰か断定できないのだ。

しかしそのことに不満を抱く必要などない。いるかもしれないし、いないかもしれない存在のことなど考えても無意味だ。人は自分の目で見えるものしか信用しない。それはただ考えることを放棄したに過ぎない。偉そうに言っているが、結局自分の理解できないものなどあつては困るからそう言っているだけだ。

世の中間人に説明できないことなど星の数ほど存在する。そもそも人間が理解できる範疇などたかがしれている。人間が中心の世界など人間の思考の中にしか存在しない。

世の中には私たちの理解できないこと、見えないことが山ほどある。そしてそれを理解することはないだろう。なぜなら人間は自ら目を閉じ、耳をふさぎ自らの思考に閉じこもろうとする生き物だからだ。

小難しいことを考えるのは人間だけだ。自分が何のために生まれてきた、どんな運命の下にあるのか、そんなことどうだっていいことだろ。

鳥は空を飛ぶことに疑問を持たないし、ライオンは他の生き物を殺すことにためらったりはしない。犬は自分が犬であることに不満を持たない。

無駄に脳が大きくなりすぎるから余計なことまで詰め込んでしまふんだ。結局視界が広がっても思考がそれを邪魔してゐるんだ。

つまり何が言いたいかと言うと、私は自分が自分であることに疑問も不満もないんだよ。世の中に生きる人間は、どこかしら自分を優越に感じたり、逆に落ち度を感じるだろう。時に自分自身が不満になるはずだ。だがそれは一度たりとも他人の責任ではない。君が君であり続けたのなら、他人の干渉などないも同然のはずだ。それを感じるのなら、それは君が他人に流されるだけの人間だったただけだ。

私？ 私は最初から他人などいないも同然だ。だから私の思考は常に私と身近なものだけで止まっている。それで十分じゃないか。生きるのにそれ以上のことなど必要ない。

もしかしたら私だって誰かの頭の中だけに存在するのかもしれない。だがそのことが私に何の関係がある？

私が出たこともない存在が私の上に存在して、その存在が私の運命を操っているのだとしても、私が私であることに変わりがないのならそれで構わないよ。

知らなければそんな存在ないも同然だ。私が自分の意思で生きているのではなくとも、私は自分の意思で生きていると思っている。そんな存在に気づいたところで私がすることに変わりはない。

世の中には知らない方が幸せな場合もある。自分の天上に絶対の存在がいることが許せないのならやることは二つに一つ。

忘れるか、抗うかだ。

私が選んだのはもちろん前者だ。だって面倒だろ？ 世界のために命をかけるのと同じくらい面倒くさい。私は今の自分で十分だ。私が私である限りそこに不満はない。

もちろん君がどうするかは君が決めることだ。それにとにかく言う筋合いも義理もない。

さて、それは私が下に立つ人間の場合の話だ。今この物語では私はとにかく天上の存在とやらだ。神が存在しながらも、私はその神のさらに上にある存在なんだ。

もし天上の存在に明らかな意思があったとしたらどうだろう。それはとても酷なことかもしれない。少なくとも下で踏みつぶされる存在にしたらだ。

そして残念なことに私はこうして独立した意思を持った存在であり、決して善良な存在ではない。もし私が善人であったなら、最初からこんな物語書いたりしないだろう。本当の善人は空想ですら人を殺さないものなのだから。まあ、そんな人間私は見たことがないがね。

私自身がどうであれ、私が書く物語の登場人物たちはずいぶんときがわめが悪い。抗ったところでどうにもならないこともある。それがわからないのか、わかりたくないのか。

何もこれが初めての経験ではない。今まで少数ではあるが私の存在に気づき、抗い、ついにはそれを達成した者は存在するんだ。

彼らの結末はまた別の物語に記されている。

抗った先に得られるもの、それは何なのか。それはこの物語の最後にわかるだろう。彼がこのまま抗い続け、そこにたどり着いたのなら、彼は私の前に現れるだろう。紙の上のインクではない、一つの独立した存在として。

しかしそれは彼にとって幸福なのかな。

ある者は何かに縋り、ある者は探求し、ある者は破壊に向かった。他にも、これからもそういった存在は現れるだろう。だが、籠から解放された鳥は幸せなのだろうか。

君はどう思う？

答え合わせは最後のページで。

いつもよりページが少ないって？ 手を抜いてないかって？

そりゃそうさ。誰だって後書きにページ数をたくさん使ったりしないよ。

これは後書きではないけど、私はこの物語の登場人物ではないのだから、ここで多く語る必要はないよ。これはあくまで私の気まぐれな独り言に過ぎないのだから。

私には君も紙を通しての存在にしか見えないんだよ。

これは物語の一部ですらない。著者が原稿の隅に暇つぶしに書いた駄文に過ぎないのだから。

人物紹介2

最終章目前になったので今までに登場したキャラクターたちの簡単な説明を。名前しか出てない人物については説明はありません。

北欧神

シギユン ? 歳 女

ロキの妻。二人の息子を産むが夫婦仲は良いとは言えず形だけのものだった。しかし彼女自身は夫への愛情とその愛人への嫉妬心を抱いていた。その嫉妬心から愛人の存在を神々に密告する。

オーデイン ? 歳 男

アースガルドに住む神々をまとめる主神。ロキの義兄弟。かつて彼の人柄に興味を覚え神の仲間を迎えた。現在は何をするわけでもなく、義兄弟との再会を待っている。

ミーミル ? 歳 男

アース神族一の知識を持つ神。ヴァン神族によって首を切られ、ミーミルの泉に沈められる。自らが知恵の一部となり個人としての意思はないに等しい。

ウルズ ? 歳 女

神々や人間の運命を司る三人の女神の一人。過去を司る長女。ただ運命を告げるだけの存在であり著者が張る付箋のような存在ではない。

巨人族

ウトガルドロキ ? 歳 男

巨人族の王。邪神ロキと同じ容姿を持つ。ロキ自身でありロキが彼である。役目を果たさないロキに代わってバルドルを殺した。

アングルボダ ? 歳 女

ロキの愛人。三人のモンスターの母親。辛辣な言い方が多いがロキへの愛情は確かにある。ロキとの関係が発覚した際アース神族に襲われその傷が元で亡くなる。予言の力を持ちラグナロクを予言した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9240c/>

神すらも知らず

2011年12月13日00時48分発行